星海社
FICTIONS

那由多の軌跡

土屋つかさ

Illustration／尾谷おさむ

星海社

僕が生まれるよりずっとずっと前、今から約一五〇〇年の昔。
後に〝大洪水〟と呼ばれる天変地異がこの世界を襲い、人間という種は一度滅びかけた。
実際に何が起きたのかについては、おとぎ話みたいな伝聞が残っているだけで、正確なことは分かっていない。
当時、最も文明が発展し栄華を誇っていた大陸、レクセンドリアが、ある日、突如消滅した。地面が崩れて海に沈んだとも、火山が噴火して爆散したとも言われている。いずれにせよ、それが原因で巨大な津波が発生し、世界中を飲み込む〝大洪水〟になったという。
人間が住んでいた土地の多くが海の底に沈み、同時に、今よりも遥かに進んでいたと言われている沢山の技術や知識が失われた。洪水をまぬがれた僅かな土地にも、魔獣と呼ばれる異形の怪物が発生し、生き残った人間の天敵と化した。
レクセンドリア大陸の周辺海域は常に荒れくるい、船が近寄ることさえ出来ない〝世界の果て〟と化した。〝世界の果て〟の向こう側、かつて大陸があった場所は、いつしか〝失われた楽園〟と呼ばれ、人間の立ち入ることが許されない神聖な領域となった。
決して辿り着くことのない〝失われた楽園〟は、〝大洪水〟後の世界を生きる人間にとって、願望と夢想の地となった。
運良く〝大洪水〟から生き延びた人々も、その後、長い長い苦難の時代を過ごす事になった。文明は大きく後退せざるを得ず、その上、地上を跋扈する魔獣とも戦わねばならなかった。飢饉や疫病に襲われた時代もあったし、人間同士で血を流し合うことも数え切れない程あった。そしてそれらは、今もなお、続いている。
人間同士で争っている余裕なんかなかった筈なのに、まるでそう宿命づけられているかのように、人間は多くの愚かな過ちを犯し続けた。
そうして、〝大洪水〟から一五〇〇年以上が経った、現在。
新暦一五七九年。
相変わらず地上には魔獣がいて人間の生活を脅かしているし、かつて人間が手にしていたという技術や知識は未だにその一部しか再発見されていない。にも拘わらず、人間同士の争いは未だ絶えることがない。
最近では大陸最大の領土を持つ帝国が、隣国に侵略戦争を仕掛けるのではないかという噂まで流れていて、どこの街でも不安と不穏の空気に包まれていた。
人間は、また間違いを繰り返そうとしているのかもしれない。
それでも、ただ一つ言えるのは、人間は過ちを犯しても、その度に反省し、互いに助け、励まし合い、決して諦めず、今日までやって来たということ。
人間は、数限りない物を失ったこの世界で、それでも、したたかに生き続けている。
きっと、この先も、ずっと。



那由多の軌跡

土屋つかさ

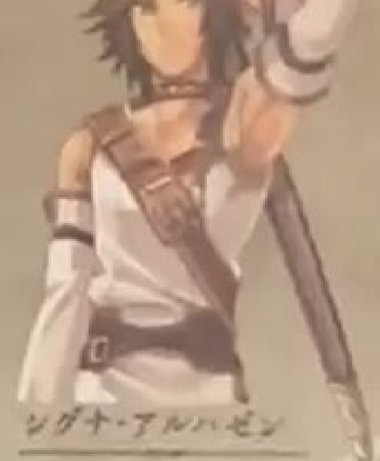
原案
日本ファルコム

Illustration
尾谷おさむ

登場人物紹介



クレハ・アルハゼン



シグナ・アルハゼン



ナユタ・ハーシェル

オルバス・アルハゼン





アーサ・ハーシェル



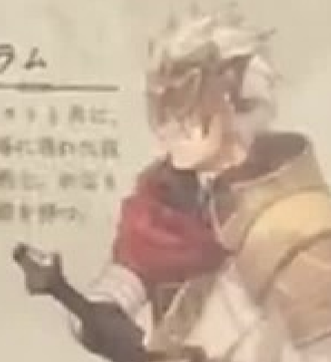
ライラ・バートン



ゼクスト



セラム



ノイ



第1章

船上にて

NAYUTA NO KISEKI

Chapter 1



大陸の港町サンセリーゼより南西約九八〇セルジュ。
シエンシア多島海の海上。夜。

「小童ども！　せめて酒が美味くなるような勝負をしろよな！」

バップス船長がそう叫ぶと、僕たち二人を取り囲んでいる大人たちがどっと笑った。

皆、黒留酒が溢れんばかりに注がれたジョッキを豪快に呷って、気持ち良さそうにしている。楽器が得意な男が掻き鳴らす弦の調べと、それに合わせた男たちの歌が、少し離れた所から聞こえてくる。陽気な歌声が、甲板を照らす松明の炎を揺らしていた。

帆船が大陸を出て二日目。夜の沖合をゆっくり進んでいる。天気も良く、波も穏やか。目的地到着を明日に控え、甲板では宴会が行われている。

二つの大きな月が浮かぶ満天の星の下、乗組員のほとんどが甲板に集まり、音楽に合わせて歌い、踊り、そして浴びるように酒を飲んでいた。

そして、十分に出来上がってきた頃、恒例の余興が始まっていた。

「ナユタ・ハーシェル！　俺はお前に賭けてんだ！　簡単に負けるなよ！」

クラック副船長が楽しそうに叫ぶ。名前を呼ばれた僕は、しかし反応せず、木剣を両手で握り、足を半歩出して構え、無心で相手の出方を待っている。

三歩前方にいる対戦相手、シグナ・アルハゼンは、僕とほとんど同じ構えで対峙している。ただし、口元には笑みを浮かべ、こちらを楽しそうに見返している。

誰かの野次を、別の誰かが受ける。

「何ちんたら見つめ合ってんだよ！　お前ら伸びたのは背丈だけなのか？」

「いや、ナユタはともかく、シグナは背丈も対して変わってねえな。小童のままだ！」

どっと笑いが起き、その度にまわりはジョッキを呷っていた。

シグナは、「けっ」と笑い、こちらを見たまま観客に向かって叫ぶ。

「黙って見てやがれってんだ飲んだくれども！　あと小童って言うんじゃねえ！」

「生意気なことを言うじゃねえか、小童！」

船長が叫び返すと、更に大きな笑いが起きた。

僕とシグナは二人とも、今年で十六になる。童と言われるほどには、もう、幼くはない。それに、学者志望の僕は置くにしても、自警団に入ってみっちり鍛えられているシグナは胸や脚が太く筋肉質になっていて、肌は日に焼けて浅黒く、顔だって童顔の僕よりずっと大人びていた。元から、背だって僕より高いし。

とはいえ、ジョッキを握って取り囲んでいる船乗りの男たちは、僕らと比べて十も二十も年上ばかり。そんな人たちから比べれば、そりゃあ、僕らは小童だ。

けれど、シグナはそう言われるのが嫌みたいで、キッと船長の方に視線を向け、言い返した。

「だから、小童じゃねえって言ってる――」

シグナが見せた格好の隙を狙うべく、僕は素早く一歩前に踏み込み、胸元めがけて木剣を突き出した。

「――っと」

けれど、シグナは瞬時に僕の動きに反応し、剣の腹で僕の一撃を軽々と受け止める。木剣同士がぶつかって乾いた音が甲板に響き、僕たちは交差させた剣を相手の方に押し込み合う。ようやく始まった試合に、観客が沸き上がる。

木剣をこちらに強く押しつけながら、シグナが笑いかける。右耳から下がる木彫り細工の耳飾りが揺れ、松明の明かりを反射した。

「こちらが脇見している間に攻めてくるなんて、つまんねえ事するようになったじゃねえか、ナユタ」

僕は、渾身の力で押し返しつつ、それでもなんとか笑顔を返した。

「そっちこそ、師匠の言葉を忘れたのかい、シグナ。剣を交えている時、よそ見をするのは死ぬのと同じだよ」

「へっ、俺に師匠の言葉を思い出させたかったら、一度でも俺に膝をつかせてみろってんだ、ナユタ！」

シグナが切った啖呵に、大人たちがジョッキを振り上げて乗ってくる。

「そうだ！　今夜こそシグナを負かしてやれ、ナユタ！」

「一度くらい勝ってみせないと、誰もお前に賭けなくなるぞ！」

また笑い声が響き合う。

言われてみれば、宴会の余興として恒例になっている、僕とシグナのこの模擬試合では、僕はまだシグナを負かしたことがなかった。

僕の顔から思いを読み取ったのか、シグナは楽しそうな顔をした。

「ナユタ、お前は弱くはない。覚悟が足りないだけだ。いつかは、俺にだって勝てるさ」

そう言うと、突然合わせている剣に重みが増した。

「けれど、それは今日じゃないけどな！」

一気に剣を押し込まれ、僕は堪らず後ろに飛ぶ。と言っても、半分はシグナに突き飛ばされたようなものだ。

体が宙に浮いた瞬間、顔が天を向いた。

漆黒の空にちりばめられた那由多ほどもある星の姿が視界一杯に広がる。
拳よりも大きく浮かぶ二つの青白い月が、今夜はやけに綺麗に見えた。
「うわっと!」
星空に気を取られ、着地に失敗しかける。もつれそうになる足をなんとか踏ん張って、剣を構え直した。
「おいおい、酒が入ってないのにナユタはもう足下がおぼつかないみたいだぜ!」
「いやいや、あれはもう勝利の美酒を呷った後なのさ! 勝つ気満々だな!」
大人たちが腹を抱えて笑っているのが視界の端に見えた。
シグナだけは笑わず、呆れた顔を僕に向ける。
「おいナユタ。よそ見をするのは死ぬのと同じじゃねえのかよ。星に見とれてる場合か?」
気にしない。気にしない。
戦いは、最後まで分からないんだから。
僕が無心で対峙していると、今度はからかうようにニヤリと笑う。
「それとも、故郷が近づいて気もそぞろか? アーサ姉さんとライラが待ってるもんな!」
半分図星だったけど、認めるのはしゃくだった。笑い返す。
「そういうことを言い出す方が、故郷が恋しいんじゃない? 師匠とクレハに早く会いたいんだろ?」
「はっ! 言うじゃねえか。今度はこっちから行くぞ!」
シグナが走り込んでくる。振り下ろされる一撃を頭上で受け、真横に打ち払う。
再び大人たちの喝采と野次に甲板が包まれる。
「まだまだあ!」
僕は叫びながら床を蹴った。
夜も試合も、まだ始まったばかりだ。

僕たちを乗せたこの帆船は、大陸の港町サンセリーゼから出港し、二泊三日をかけてシエンシア多島海に到着する。大陸から物資と人を山ほど積みこんでいて、多島海に浮かぶ島々を順繰りに巡って交易を行う定期船だ。
その島々の一つに「残され島」と呼ばれる小島がある。小さな村が一つだけあるその小島が、僕とシグナの故郷だった。そこには帰る家があり、帰りを待つ家族がいる。僕には姉が、シグナには妹と父親が。
シグナの父親はかつて大陸で剣豪と呼ばれた人で、僕らはその人から共に剣術や、心身の鍛え方を学んだ。だから僕にとってシグナは同門であり、親友だった。
十五になった去年、僕は学問の道に進む為に、シグナは自身の剣の力を活かす為に、大

陸に渡った。今は港町サンセリーゼに家賃折半で部屋を借りて暮らしている。僕は王立学院で天文学と歴史学を学んでいる。シグナは街の自警団でメキメキと頭角を現し、既に一目置かれる存在になっているようだ。

そして、年に数回お互いの休暇が重なる時、こうして一緒に定期船に乗り、残され島に里帰りしていた。

木剣同士がぶつかる乾いた音が、何度も甲板に響く。今の所、どちらも相手の攻撃を剣で受けるか流すかしている。

両手で木剣を前に向けた状態で、回るように歩きつつシグナが叫ぶ。

「そろそろ息が上がってきたみたいじゃないか、ナユタ！　勉強ばっかしてるから体がなまるんだよ！」

「そういうシグナこそ、汗をかきすぎているだろ！　訓練ばかりで実戦の感覚を忘れちゃったんじゃないの？」

二人の罵り合いに、大人たちがどっと笑う。もちろん、お互いに本気で思ってる訳じゃない。観客へ向けた余技みたいな物。

とはいえ、本当に息が上がりつつある僕には、この休憩の機会は有り難かった。

「しっかし、ナユタも腕をあげたな！　ほとんど互角じゃないか！」

「そうだそうだ！　前に見た時よりもずっといい試合になってるぜ！」

「クソッ！　俺もナユタに賭けておけば良かったか！」

大人たちが楽しそうに叫び、その度にジョッキを呷っている。

確かに、今の所勝負は互角だった。

けれど、それはシグナがそう演出しているからだ。

「おりゃあっ！」

シグナが斜め上から大振りに斬りかかってくるのを、内側から外側に向かって打ち返す。

硬い音がして、シグナの剣の軌道が逸れる。

体勢を崩したシグナに斬り込もうとするも、すんでの所で体ごと避けられ、今度は僕の剣が空を切った。

「おお！」

派手な打ち合いに、観客が驚き、喜ぶ。

この大振り、シグナはわざとやっている。本当はもっと小さく、速い動きが出来る筈だ。けれど、大きな技を繰り出した方が、大人たちのうけがいい。だから、敢えて隙は大きくなるけど派手な動きを繰り返している。

対して、僕にはそんな余裕はなかった。ずっと全力で戦っているつもりだ。

これが、僕とシグナの実力の差と言えた。
正直に言って、悔しい。これじゃまるで、手加減されてるみたいじゃないか。
多分、シグナにそんなつもりは無い。彼は単に、観客を楽しませようとしているだけだ。
けれど僕には、お前には隙を見せても負けないよ、と言われているように思えた。
シグナと目が合う。シグナは、笑っていた。
ふと、その笑顔が、彼の妹のそれと重なって見えた。長い銀髪の美しいあの子と。
その瞬間、胸のずっと奥の方から、勝ちたい、シグナに膝をつかせたい、という気持ちがむくむくと湧き上がってくるのを感じた。
確かに、実力では、僕はシグナに敵わないかもしれない。
けれど、それは毎回必ず負ける、という意味ではない筈だ。
師匠だって「勝負とは、最後には能力ではなく、勝ちたいと思う気迫によって決まる」と言ってたじゃないか。
勝つ。ここで勝って、島に帰った時に「船で君の兄さんを負かしたよ」と言ってやる。
すっと頭の中が締まり、意識が冴え渡る感覚を得る。いける。
シグナが上段に構えた剣を振り下ろそうとする。僕はこれまでと同じように打ち返そうと剣を傾める――と見せかけて、すっと体を引く。
「っ！」
突きだした剣を急に引くことは出来ない。シグナは空振りした剣を構え直す為に軸足を床から浮かした。
「今だ！」
通常よりずっと大きく踏み込んで、シグナの体半歩手前の足下に体を滑り込ませた。
文字通り、側に滑り込んだのだ。
「おおおっ!!」
決着が付きそうな気配に、大人たちの歓声が大きくなり、緊張感が甲板に満ちる。
シグナはしまったという顔をして軸足を戻そうとするが、その動きを邪魔するように、僕は中段から真横に剣を薙ぐ。シグナは片足を半分浮かせたまま剣を盾にして迎え撃った。
お互いの剣がぶつかり、乾いた音が甲板に響く。
シグナとしては僕の剣を払い飛ばしたい所だろうけど、重心が微妙に崩れている向こうに対して、走り込んだ速度が上乗せされたこちらの剣の方が、力で勝っていた。
「とおりゃあっ！」
叫びつつ、一気にシグナの剣と、シグナの体を斜め前に押し込む。ほとんど片足で応戦していたシグナは、堪らずよろけて、そのまま取り囲んでいる大人たちの方に、倒れ込むかのように体を傾けた。
「いけるか！」

誰かが叫んだ。僕も同じ気持ちだった。いける！

甲板を蹴り、シグナに向かって飛ぶ。空中で構え直し、体重を乗せて切っ先を一点に向ける。狙いは右の太腿、この一撃で勝つ！

と——

「——ま、こんなもんだろ」

よろけていた筈のシグナが急にくるりとこちらを向き、そして笑った。え？

驚く間もなく、シグナは観客の一人の手から木のジョッキを奪い取り、僕の顔めがけて投げつけてきた！

「ええっ⁉」

僕は反射的に、太腿から狙いを外し、飛んできたジョッキを木剣で叩き落とした。

しかし、その一瞬が勝負を決めた。

次の瞬間、シグナは体勢を立て直し、僕が床に着地したと同時に木剣を上段から振り下ろし、僕の右手をしたたかに打ち付けた。

「うあっ！」

痛みに思わず声が漏れる。僕は握っていた剣を落として、そして、膝をついてしまう。

「勝者、シグナ・アルハゼン！」

バップス船長が高らかに宣言し、歓声と怒声が夜の海に響き渡った。

余興が終わり、僕は誰もいない舳先のあたりで休んでいた。大人たちは夜通し酒盛りを続けるらしく、酔いの回った陽気な歌声が小さく聞こえてくる。

船縁から身を乗り出して風に当たる。海風が汗を冷やしてくれて、気持ちが良い。

海は暗く、空と海の境目は闇の中に溶けている。けれど、星々と二つの月の明かりを受けて、船の周囲は、ぼんやりと光を纏っているようにも見えた。時折高い波が立つと、水しぶきが白く輝いていた。

急に、頬に冷たい物が当たる。

振り向くと、大きな月の真下に、シグナが立っていた。片手で鉄のコップを二つ持ち、僕の頬に押しつけてニヤニヤ笑っている。もう片方の手は木剣を引きずっていた。

「お疲れ、ナユタ。骨、折れてないよな？」

僕は軽く痣が出来ている手をひらひら振った。

「大丈夫だよ、シグナ。でも、まだヒリヒリする」

海に背を向けて船縁に寄りかかり、シグナからコップを一つを受け取る。中身は水。一気に呷ると、冷たい感触が体中に染み渡った。

シグナも剣を立てかけ、隣で寄りかかる。体をうんと伸ばし、海風に全身を委ねる。

「なかなか良い試合だったじゃねえか」
ほとんど船縁に寝そべるような格好で夜空を見上げながら、シグナが言う。
「僕は微妙に納得出来ないけど」
コップの中に半分残った水を見ながら、僕はさっきの余興について文句を言った。
「ジョッキを投げるなんて反則だよ。木剣が真剣だったらどうするのさ。僕がジョッキを無視して、あのまま剣を突き刺していたら、シグナの右足は膝から下がなくなってたよ？」
体を起こしたシグナは、楽しそうに僕の顔を下から覗き込んだ。
「でもナユタはそうしなかっただろ？　ジョッキを意識しちまった時点で、お前は負けていたのさ」
「でも、シグナだって、実戦だったら、あんな戦い方しなかっただろ？」
「当然だ。俺だって、まだ右足は惜しい」
太ももを平手で叩く。僕はますます納得がいかない。
「じゃあ、やっぱりおかしいじゃないか」
「おかしくはないさ」
そう言って、シグナはニヤリと笑った。彼の真上にある月の明かりが、彼の顔と、円形の耳飾りをゆらゆらと照らした。
「酔っぱらい親父共の前でやる余興だろうが、魔獣と一対一での殺し合いだろうが、剣士

が剣を握った時、目指すべきは、常に一つしかない」
「なんだよ」
「勝つこと。勝って生き残ることだ」
「そんなの、当たり前じゃないか」
「いいや、ナユタ。当たり前なんかじゃない。お前は分かってないよ」
シグナは即答した。そして続ける。
「お前はジョッキを無視出来なかった。だから俺に負けた。顔に当たった所で痣が一つ出来るだけだ。それでお前は勝てた筈なのに。お前はあの時こう考えた。『せっかく明日島に帰るのに、顔に痣が残ってたらアーサ姉さんが心配する。ライラやクレハにも笑われるかも』ってな。だから構えを解いて、ジョッキを叩き落とした。違うか？」
言葉に詰まる。それは図星だった。
シグナは言いよどむ僕を見て微笑み、けれど、その瞳は静かに僕を見つめていた。
「あの時、お前は自分から勝ちを諦めた。余興だから、木剣だから、負けても死なないから。理由はなんでもいい。お前は勝利を捨て、俺がそれを拾ったんだ」
船の近くで、大きな魚が跳ねた。
「もし真剣を握っていたら、俺はあんな戦い方はしない。けどな、ナユタ。お前はどうなんだ？　お前は、生死がかかった勝負でも、ジョッキを叩き落としちまうんじゃないか？」

「そんな訳が――」
否定するのは簡単な筈だった。けれど、シグナがじっとこちらを見つめていて、僕は何も言えなくなってしまった。どうしてだろう。分からなかった。
シグナはぐいっとコップを呷り、大きく息を吐いた。酒の匂い。僕には水を渡しておいて、自分のコップには酒が満たされているようだ。
「重要なのは勝つこと。勝って生き残ることだ」
同じ言葉を繰り返す。
「その為なら、あらゆる状況を利用する。使える物はなんでも使う。反則だって？　知ったことか。規則を守って死ぬよりも、規則を破って生き残ることを剣士は選ばなきゃいけない。クソオヤジの言葉の中で、俺が従っている数少ない教えさ」
もう一度コップを呷った後、シグナは空になったそれを僕に突きつけた。
「いいか、ナユタ。お前はまだまだ弱い。剣技がどうこう言ってる訳じゃねえぞ？　あのクソオヤジの下で修行したんだから、下手な奴には負けやしねえよ。けどな、お前はどこか自分って物を大事にしていない所がある。自分と他人の命を天秤にかけた時、自分の方を軽く見積もってるきらいがある。俺にはな、それがとても危うく見えるんだ」
シグナは酔い始めているのか、いつもより饒舌で、けれど彼の言っていることが、僕にはよく分からなかった。星がシグナの背後を一筋流れ、周囲がぼんやりと青く光る。その

せいか、シグナは影になって暗く見えた。
僕の顔を見て、シグナはほんの少しだけ寂しげな表情になり、そして続けた。
「いいかナユタ。迷った時には戦えばいい。けれど、どんな事情を抱えていようが、剣を交えた以上は、勝って、生き残るんだ。このことを、忘れるなよ」
「……戦うことが、更に迷いを生むとしても？」
自分で口にしておいて、なんでそんなことを言ってしまったのだろうと驚いた。けれど、それはいつも僕が思っていることだった。
僕は剣士じゃない。僕が師匠から学んだ剣は、魔獣から自分と、大切な人を守る為の剣だ。練習や試合でなければ、人と剣を交えることはない。
だけど、いや、だからこそ、人間同士で命を賭けた戦いをしなければいけないとなったら、きっと僕は迷う。その迷いは、戦ったから、勝ったから消えるという物では、きっとないだろう。
シグナは僕の顔を見て、暫く黙っていた。二つの月が、僕らを見下ろしていた。
やがて、シグナは相好を崩した。
「そんな心配すんな。大丈夫だよ、ナユタ。その答えは――」
立てかけていた木剣を手に取り、空に掲げた。そして言葉を継ぐ。
「――その答えは、剣が決める」

そう言ってニッと笑った。
僕は肩をすくめるしかなかった。それじゃあ答えになってない。シグナはやっぱり酔っぱらっているようだ。
「シグナらしいよ」
「まあな」
自慢げなその言い方が面白くて、僕は思わず声を出して笑ってしまった。シグナはコップを握ったまま僕の肩に手を回し、一緒に笑ってくれた。二人の持ってるコップがぶつかって、ごちんごちんと音がして、それが楽しくて更に笑った。
その時、誰かが叫んだ。
「見ろよ！　星が降って来るぜ！」
僕とシグナは肩を組んだまま、舳先の上方を見上げた。
船の進む先、無数の光の穴が空いた漆黒の空に、まるで誰かが鉛筆で描き込んだみたいに、蒼白い光の軌跡が三本、斜めに横切っていた。
三本の切れ目はすぐ光を失い、暗闇に溶けて消えた。けれど、すぐに別の場所に、新しい線が浮かび上がる。一本、また一本と、星々の間を通り抜けるように、光の軌跡が生まれては、消えていく。
夜空に架かる橋、あるいは星々を渡る為の道、そんな風にも見えた。

いつの間にか、喧噪が収まっていた。海の男たちも、馬鹿騒ぎを中断して、夜空が織りなす演舞に目を奪われていた。
現れては消えていく無数の軌跡を眺めながら、僕はもうすぐ帰る故郷、シエンシア多島海の一番端にある小さな島のことを思った。
きっと、シグナも同じことを思ってるに違いなかった。僕は聞いた。
「綺麗だね。残され島の周りにも落ちるかな」
「あれだけ降ってりゃ一個や二個、大きいのが島の周りに落ちるかもな。帰ったらまた忙しいかもしれねえ」
「うん、そうだね」
今星空で起きているような光景を、僕たちは「星が降る」と言っている。文字通りそう見えるからだ。けれど、これは正確じゃない。降って来るのは遺跡なんだ。

〝大洪水〟が起きて以来、この世界では、時折、まるで星が落ちてくるみたいに、空から半壊した建造物が落ちてくるようになった。僕たちはそれを遺跡と呼んでいる。
この遺跡がなんなのかについては、未だによく分かっていない。ただ一つ分かっているのは、それらが〝大洪水〟よりも前に造られた建造物の破片であるらしいということ。

学者の中には、遺跡は一五〇〇年前に一夜にして消滅したレクセンドリア大陸の物だと主張している人もいる。
レクセンドリア大陸にあった都市が、火山の爆発によってバラバラになって空高くに吹き飛び、それが何百年も飛び回った上で、また落ちてきたというのだ。僕はその意見にはすこし賛成出来ないのだけど、遺跡が空から降って来るのは紛れもない事実だった。

なおも先が降り続く空を見ながら、僕は無意識に懐に手を伸ばし、その中にある物を取り出した。手のひらに収まる大きさで、見た目は水晶の原石に似ている。
「ん？　ナユタ、お前まだその〝星の欠片〟を持ち歩いてるのか」
「いいだろ、お守りなんだよ」
シグナにからかわれ、ちょっと拗ねた返事をしてしまう。
〝星の欠片〟。それは遺跡の中で時折見つかる工芸品だ。この中には〝大洪水〟よりも前の絵や音が記録されている。星片観測機という道具を使えば、その記録された物を確認出来る。
残念ながら、当時の技術を失っている今の僕たちには、〝星の欠片〟がどんな仕組みで絵や音を記録しているのかまでは分からない。星片観測機だって、遺跡の中から発見した物を使っているだけで、構造を理解している訳じゃないんだ。
「いい加減、そこに何が映ってるのか、教えてくれよ」
「駄目だよ。秘密だって言ったろ。それに、たいした物は映ってないよ」
僕は手の中のそれを見つめながら、ごまかすように言った。シグナは鼻で息をして、手を伸ばし、〝星の欠片〟を軽くこづいた。キインと、冷たくて心地よい音がした。
「まあいいけどな。〝星の欠片〟をお守りにするなんて、やっぱり変わってるよ、お前は」
「たいした物じゃないから、持っていたくなるんだよ。シグナだって、そのお守り、ずっと身につけているじゃないか」
シグナが身につけている耳飾りを見る。それは、彼の妹が作った物だった。僕は今のお返しに耳飾りに触ろうとして、すっと避けられた。
「これはいいんだよ」
そして笑う。僕も笑い返す。このやりとりは、僕ら二人にとって恒例の儀式みたいな物だった。特に意味のない、けれど、お互いの友情を確認しあう。そんな感じの。
〝星の欠片〟を夜空にかざす。光の軌跡が夜空に一筋浮かぶと、まるでそれが欠片の中に浮かび上がっているように見えた。
幻想的な光景を見つめながら、僕は言った。
「ねえシグナ、〝世界の果て〟の向こうには、何があるのかな」

「ああ？　まーたナユタの病気が始まったな。また〝失われた楽園〟なんて信じてるのかよ」

シグナは呆れた口調で言って、肩をすくめた。

「〝大洪水〟から一五〇〇年。沢山の冒険家が〝世界の果て〟の向こうを目指し、けれど、誰も帰って来なかった。〝失われた楽園〟なんて存在しない。世界の果ては滝になってて、みんなそこから落ちるだけさ。お前の両親だって――」

酔いに任せて言いかけて、シグナは急に口を閉じ、頭を掻く。

「――すまん」

「いいよ。気にするなよ。親友」

水面の先、暗闇で境目がよく分からない水平線に目を向ける。

そして、この親友の前でだけ、今まで何度も口にしてきた言葉を、繰り返した。

「僕は、〝世界の果て〟の向こうに行きたい。父さんと母さんが見ることの叶わなかった景色を、この目で見たいんだよ」

「……そうか」

シグナはそれ以上は何も言わなかった。そうして欲しい時には黙っていてくれる彼のことが、僕は好きだった。

もう一度、空を見上げる。光の軌跡は、まだ幾筋も空に刻まれていた。

子供の頃から、ずっと見慣れた風景。

星が降る場所には傾向があって、シエンシア多島海、特に僕らの故郷である残され島の周りに遺跡が落ちてくることが多い。

だから、この風景を見ると、「帰ってきたんだ」って思える。別に帰ったからって何か変わったことがある訳でもないのに、胸が弾んでくる。酒が入った訳でもないのに、頭がぼうっとしてくる。

だから、そんな風に夢中になって空を見上げている僕を、シグナが少し不安げに見つめていたことに、その時の僕は気づかなかった。



第2章

落ちてきた遺跡

NAYUTA NO KISEKI

Chapter 2

次の日も快晴で、良い風にも恵まれた。そうして、定期船は最初の停留地である残され島に到着した。

船は残され島から少し離れた場所に錨を下ろし、停泊した。残され島の周りは海が浅くて、帆船では桟橋まで近づけない。僕とシグナはバップス船長にお礼を言って、帆船から小舟に乗り移り、島に向かった。

「あれ、誰もいねえな」

見えてきた桟橋――小舟が二艘留められる程度の、小さなものだ――に目をこらして、シグナが微妙に不満げな顔をする。小舟を漕いでいた副船長のクラックがケラケラと笑った。

「『このシグナ様の凱旋に出迎えの一人もよこさないとはけしからん！』てか？」

からかう副船長に、シグナが言い返す。

「そんなんじゃねえよ！」

シグナはもう一度、誰もいない桟橋を睨んでから、僕を見る。

「何か、あったんじゃないか？」

定期船が近づいてくるのは、村のどこにいたって分かる。物資の受け取りもあるし、普通なら桟橋には人が集まってくる筈だ。

「確かに、ちょっと変かもしれない」

僕とシグナは頷き合い、小舟が接岸するより前に船縁を蹴って、桟橋に飛び乗った。

「おい！　船を留めんのを手伝いやがれ、小童ども！」

僕らが跳んだせいで大きく揺れた小舟から副船長の怒声が響き、同時に船留め用の縄が二本飛んでくる。僕らはそれを空中で受け取って、桟橋の柱に引っかけた。

「あとはよろしく！」

「おい、まだ終わってねえぞ！　待ちやがれ！」

怒鳴り声を背後に聞きながら二人で桟橋を走り抜け、村へ向かった。

残され島は、大人の足なら半日で一周出来るくらいの本当に小さな島だ。そして、島に唯一ある村も、人口が百人に満たない小さい共同体だ。

中央に広場があり、そこから東西に大通りが一本ずつ延びていて、商店や民家が一通り並んでいる。大通りから幾つか脇道も延びていて、畑や風車小屋、それに僕たちが到着した船着き場などに続いている。まあ、それくらいの小さな村なんだ。

桟橋を過ぎると、平らな石畳の場所に出る。陸揚げした物資や捕った魚を一時的に置く空間だ。いつもは誰かしらいるものだけど、今日に限ってここにも人影はなかった。

「とりあえず広場だ」

シグナは前を向いたまま、少し硬い口調で言って、前方にある石階段に向かって走る。僕も無言でついていった。

村の広場へと続くこの長い石階段は、島に入植した村人が造った物ではなく、落ちてきた遺跡をそのまま流用しているのだと、以前村長さんが言っていたのを思いだす。

広場に到着すると、そこには村の人たちが沢山集まっていた。ようやく人の姿を見つけて、小さく息を吐く。

みんなは、数人ずつで集まって、何やら話し込んでいた。少し、いつもとは違う雰囲気だ。

「何があったんだ？　……お、ライラがいるぞ」

シグナの視線の先に、僕らと同い年の女の子、ライラ・バートンがいた。村人と話し込んでいた彼女は、こちらに気づいて大きく手を振ってきた。

「あ、ナユタ！　帰ってたのね！」

ライラは小さな頃から一緒に遊んでいた女の子だ。村唯一の宿屋の子であり看板娘。襟元で切り揃えた赤毛の髪が、太陽を浴びて光って見えた。日に焼けた肌も、ライラの元気な性格に似合っている。胸元や袖に綺麗な紐を結んでいて、華やいで見えた。

ライラは話していた相手に二言三言言ってから、こちらに駆け寄ってきた。

「やあライラ。ただいま」

「お帰りなさい、ナユタ。久しぶりね」

そう言って笑顔を作るライラは、少し目を逸らしがちで、頬が赤くなっているように見えた。熱でもあるのかな？

「おいおい、こっちには「お帰りなさい」はねえのかよ？」

僕の肩に腕を載せ、シグナが言う。ライラは今初めて気づいたみたいに、

「あ、シグナいたの。お帰りなさい」

「俺はついでかよ……」

ガクリと肩を落とすシグナ。僕はライラに聞いた。

「何かあったの？」

「あ、そうなのよ！　昨日の夜、北の入り江の方に遺跡が落ちたの！」

興奮してまくし立てるライラに、シグナが呆れた顔をする。

「そんなの毎度のことだろうが。別に珍しくもねえ」

「違うのよ！　もの凄く大きいの！」

ライラは両腕を目一杯広げて、その大きさを示そうとした。とはいえ、よく分からない。

「村長さんも『あんな大きな遺跡が島の近くに落ちたことは、これまでになかった』って言ってたもの！」
「へえ……」
それには驚いた。サーベント村長は、この村で一番の長生きで物知りだ。その村長がそう言うのなら、よっぽどなのだろう。
「今ね、危険がないかどうか、オルバス先生が確認に行ってるの」
それを聞いて、僕はシグナを見る。
「シグナ！」
「皆まで言うな相棒」
お互いに笑顔で頷き合う。オルバス師匠が既に先行しているなら、僕ら不肖の弟子たちも後を追う理由になる。冒険に行ける！
嬉しそうな僕らを見て、ライラはやんちゃな弟でも見るような目つきになった。
「あんたたち、帰った早々遺跡探検に行くつもり？　ホント、男って冒険が好きなのね。いつまで経ってもお子様だわ」
呆れたように言うライラに、シグナは、
「そういう台詞はもっとお淑やかになってから言うんだな。もしくは――」
ライラの胸元を見て、ニヤリと笑う。
「――もっと出るべき所が出っ張ってからだ」
「なっ！」
ライラは顔を真っ赤にして両手で胸元を隠す。
「シグナのスケベ！　だからお子様だって言ってんのよ！　そりゃ、そんなに大きくないかもだけど、まだまだこれから――」
必死の抗議を無視して、シグナは僕に振り返る。
「ナユタ、準備が済んだら北の入り江に集合だ」
「了解！」
お互いに背を向けて走り出す。僕らの家は丁度反対方向にある。僕の家は大通りの東の端。シグナの家は西の端だった。
「って、無視すんな！　二人とも――！」
背中にライラの声が届く。走りかけた僕は、そういえば、と立ち止まって振り向いた。
「ライラ！　クレハは師匠と一緒に遺跡に行ったのかな？」
「ええそうよ！」
まだ顔を赤くしているライラは拗ねたように答える。
「悪かったわねクレハよりちっさくて！」
何を言っているのかよく分からない。

「ありがと、じゃあね！」
走り出そうとした時、今度はライラが呼び止める。
「あっ、ナ、ナユタ！」
「なんだい？」
「えっと、あのね、その……」
さっきに増して顔が赤くなるライラ。目をぎゅっとつぶって叫ぶ。
「な、ナユタに、話しておきたいことがあるの！　あ、後ででいいから！」
「うん分かった！　じゃあ、後でね！」
三度目の正直で、僕は広場を飛び出した。

村はずれの坂道を上ると、僕の家が見えてきた。木造二階建てで円筒型の家。屋上に置かれている大きな望遠鏡が目印なのだけど、今は布が被せてある。
自分の家を目にすると、しばらく島を離れていただけなのに、たまらなく懐かしい気分が湧き上がってくる。
村で一番の高台にあるこの場所は天体観測に最適で、家は母さんが、望遠鏡は父さんが設計した物だ。小さいけれど、大切な場所。家も望遠鏡も、僕にとっては両親の形見だった。

二人は三年前に『世界の果て』を目指して船に乗り、そして、帰ってこなかった。今、あの家にはアーサ姉さんが一人で暮らしている。今の僕の身寄りは、姉さんだけだ。
玄関の前の階段に足をかけた時、不格好な木のポストが目に入った。前にシグナが作った「便利屋依頼箱」だ。そういえば、休暇中は便利屋を再開するって、シグナ言ってたな。
そんなことを考えながら、木戸を開き、叫ぶ。
「ただいま！」
と言っても、姉さんは奥の部屋で寝ているので、返事はない筈——
「あら、お帰りなさいナユタ。もう着いたのね」
意外にもすぐに声が返ってきた。
居間の大机に置かれた星片観測機の横から、アーサ姉さんが顔を見せる。観測機が放つ赤と茶の光が、姉さんの綺麗な栗色の髪をぼんやり照らしていた。腰まである波打った髪は、光を受けると夕日が浮かんだ川のようだった。
僕は驚いて、大机を迂回して姉さんに駆け寄る。
「姉さん！　寝てなきゃダメだよ！」
「今日は調子がいいのよ。ずっと寝てても退屈だし」

と、すぐに姉さんは咳き込みだした。机にあった布を引き寄せて口にあて、更に強く咳き込む。

「ほら！　安静にしてなきゃ駄目だよ！」

「これくらいは、いつものことよ。まったく、ナユタは心配性なんだから」

そう言って、姉さんは布から顔を上げて僕に笑いかけ、そして、また、小さく咳き込んだ。

僕の姉さん、アーサ・ハーシェルは、『奈落病』という不治の病にかかっている。

『奈落病』は『大洪水』以来、生き残った人間を悩ませ続けている奇病だ。一度発症すると、病原菌が徐々に体を蝕み、それが免疫力を低下させ、最後には死に至らしめる。今の医学では、病気の進行を多少遅らせるのが精一杯で、根本的な治療法は見つかっていない。ただ一つの、特効薬を除いて。

それは「ユピナ草」と呼ばれる野草だった。

数百年前、ユピナ草から抽出した汁が『奈落病』を根治させる能力を持つことが発見された。人間は、ついに不治の病に打ち勝つ方法を見つけたのだ。

けれどユピナ草は、現在ではスケッチが残っているだけで、入手する方法は存在しない。絶滅したのだ。

ユピナ草の『奈落病』に対する効能が発見された当時、富裕層が相次いでその植物を買い求めた。結果、元々群生地が限られていた希少な植物である「ユピナ草」は、値段が一瞬にして高騰した。

需要ある所に供給は生まれる。生命と金への欲求の為に、奇蹟の薬草は乱獲された。そして、当然の帰結のように、ユピナ草は刈り尽くされ、この世界から姿を消してしまったのだ。それはつまり『奈落病』に対抗する唯一の手段が消失したということを意味していた。

このことは、『大洪水』後に人間が行った最も愚かな行為の一つとして知られている。

それ以来、人間はこの不治の病を、常に恐れながら生きていくしかなくなった。

どういう条件で『奈落病』が発症するのかについても、よく分かっていない。その昔は、『世界の果て』の近くに住む人たちだけがかかる風土病だと考えられていた。けれど、ここ数十年で発症例が確認される地域は徐々に広がり、世界を覆い尽くしつつあった。

患者の数も増大傾向にある。にも拘わらず、対抗策は数百年前に失われている。

刺激的な言説を吹聴して金を得る一部の占い師なんかは「争いを止めぬ人間にこの世界が絶望し、彼らを地上から取り除こうとしている」と街中で叫んでいる。多くの人はそんな言葉に耳を傾けたりはしないけど、心の中では、誰もが同じことを考え、怯えている。

このまま『奈落病』を根治する方法が見つからなければ、結果としては占い師の言う通

りの世界になるだろう。争いを止めぬ人間が、地上から取り除かれた世界に。

嘩が収まると、姉さんは布を脇に置いて僕に言った。

「それよりも、ねえナユタ。これ、見てご覧なさいよ。ちょっと凄いのよ」

ちょいちょいと星片観測機を指さし、椅子から立ち上がる。ごまかされた気がするけど、「凄い」というのが気になって、姉さんと入れ替わりに観測機の前に座った。

星片観測機は〝星の欠片〟に記録されている絵や音を読み取るための機械だ。〝星の欠片〟と同様に、空から落ちてきた遺跡の中で発見される物で、僕たちが作った物ではない。

台座の上に大きな半球が備えられ、その中心に〝星の欠片〟を嵌める為の穴が開いていて、姉さんがさっきまで見ていた欠片が嵌まっていた。半球の縁に沿って、石のツマミが幾つも並んでいる。

台座からは半球に沿うように棒が延び、弧を描いて欠片を嵌める穴の真上に至っている。棒の先端にはランタンに似た道具が取り付けられていて、実際僕たちはその部分をランタンと呼んでいた。

姉さんがツマミに触れ、慎重に回すと、ランタンから七色の光が放たれ、〝星の欠片〟に当たる。姉さんがツマミを回したり、押したり引いたりする度に、光の色の種類や強弱がくるくると切り替わる。これを調整して、欠片ごとに適した光の組み合わせになると、欠片の中に記録された絵や音が読み出せる。

説明するのは簡単だけど、〝星の欠片〟がどういう仕組みで絵や音を記録しているのか。そして、星片観測機がどういう仕組みでそれを読み出しているのかについては、〝大洪水〟後に生きる僕たちの技術水準では、残念ながら分かっていなかった。

それもあって、欠片ごとにツマミを操作し、必要な光の種類と強弱を発見するのは、経験と勘が頼りとなる職人芸と言えた。なので星片観測機を所持し、使いこなせる人は限られていて、星片観測士と呼ばれている。アーサ姉さんは、その星片観測士なんだ。

元は母さんの仕事だったのだけど、母さんが亡くなった後、姉さんがその仕事を引き継いでいる。遺跡から発見された欠片を預かり、中身を読み出す組み合わせを探し、その情報を欠片とセットで商人に買い取って貰う。これが星片観測士の仕事だ。

姉さんはとても筋が良いらしく、時折他の星片観測士が読み出すのを諦めた欠片まで、船を渡って届けられることもある。

「……ほら、出てきたわよ」

暫くツマミを弄っていた姉さんがそう言って、ゆっくり手を離した。

紫と橙が混ざった色の光に照らされた〝星の欠片〟が、その光の中に溶けるように姿を消し、代わりに、半球の面全体に、半透明の風景が、まるでそこに本当にあるかのように

浮かび上がってくる。
「わあ……！」
僕は思わず声を出していた。欠片が見せる絵はこれまで幾つも見てきたけど、これはその中でもとびきり美しい風景だった。
青空の下、色とりどりの花が咲き誇っている。庭園だろうか。石造りの壁が点在していて、そこにも蔓が絡みつき、小さな花が咲いていた。所々に水場があり、見たこともない鳥が羽を休めているのが見えた。
けれど、一番目を引いたのは、庭園の向こうに見える建造物だった。青空を貫くように、真っ白な塔が、空に延びていた。大陸の物でもない様式で造られたその塔は、雲よりも高く延び、その先は見えなかった。
見入っている僕に、姉さんが微笑む。
「どう？　綺麗でしょ？」
「うん……！」
その風景は、ただただ、美しかった。心奪われる何かがあった。僕は呟く。
「これが、〝失われた楽園〟なのかな……？」
「さあ、どうでしょうね。仮にそうだったとしても、ずっと昔の景色でしょうね。今どうなってるかは、誰にも分からないもの」

「……」
行ってみたい。
この景色を、〝失われた楽園〟を、この目で見てみたい。
それは、子供の頃からの、初めて〝星の欠片〟に納められた景色を母さんに見せて貰った時からの、僕の夢だった。
無意識に、懐に手を伸ばしていた。指先にお守り代わりの石の塊が触れる。あの時、夢を抱くきっかけになった〝星の欠片〟が。
「そういえば、ナユタ？」
咳をごまかしながら、姉さんがこちらを見る。
「何？」
「急いで帰ってきたみたいだけど、何か用事があったんじゃないの？」
「！　そうだった！」
あまりに綺麗な光景を見て何もかも吹っ飛んでいた！　シグナと待ち合わせしてたんだ！
椅子から飛び上がり、荷物を担いで階段を駆け上がり、自分の部屋に飛び込む。
そして、隅にしまっていた革の胴当てと愛剣を、大急ぎで身につけた。どちらもホコリ一つついてない。僕が留守にしていた間、姉さんが綺麗にしていてくれたのだろう。
準備を終えて、一階に駆け下り、そのまま外へ向かう。

「岬に落ちた遺跡に、シグナと探索に行ってくるよ！」
「気をつけるのよ！」
姉さんの心配そうな声を背中に聞きながら、僕は外へと飛び出した。

「とおりゃあっ！」
シグナが剣を一閃し、魔獣の体が上下に切り裂かれる。丸い体に大きな目を持った魔獣は、体から伸びる二本の触覚を振り回しながら最後の咆吼を上げ、溶けるように消え去った。
魔獣は、それが本当に生物なのかすら、よく分かっていない。動物を狩る時の常識は一切通用しない。ある程度の怪我を負わせると、勝手に消えていなくなる。
こちらが殺される前に、相手を切り刻む。魔獣との戦い方は、究極的にはこれだけだ。
「はあっ！」
僕も気合を入れて目の前の丸形魔獣に剣を振り下ろす。が、ひょいと横に逃げられ、逆に相手の間合いに飛び込んでしまった。長い二本の触覚が、待ち構えていたように僕の体に狙いを定めて思い切りしなる。やばいっ！
「ナユタ！」

シグナが返す刀で目の前の魔獣の体を薙ぎ、触覚は僕に触れる直前に消え去った。
構え直した僕の隣にシグナが並び、ニヤリと笑いかける。
「こいつらの触覚には毒がある。触れないようにしろよ」
「分かってるよ。ちょっと油断しただけさ」
精一杯強がってみせる。魔獣との実戦でも、シグナには敵わない。それがやっぱり悔しくて、でも、頼もしかった。
通路の前方からは、先ほどと同じ丸形の魔獣が三体並んで道をふさぎ、地面を跳ねてこちらに向かってきていた。
「いくぞ！」
「ああ！」
シグナの声に合わせて、二人で突進する。

〝星の欠片〟の景色に見とれていたせいで、北の岬にはだいぶ遅れての到着になった。遅刻をなじるシグナの小言を聞きながら、僕らは墜落した遺跡へと向かった。
遺跡が落ちた所は、島から少し離れた海の上だった。けれど、北の岬は遠浅の中に岩が幾つも海面に出ていて、それらを飛び移りながら割と近くまでは行けた。そこから少しの

距離を、装備をしたまま泳いで、僕たちは遺跡に到着した。よく考えたら小舟を一艘用意すれば濡れずに済んだのだけど、早く探検に行きたい僕たちはその思考に至らなかった。

遺跡は塔のように見えた。とても太く、高い塔だ。サンセリーゼの町で一番背の高い大聖堂よりもなお大きいかもしれない。確かに、こんな大きな遺跡が島の近くに落ちてきたのは、今まで見たことがなかった。

塔に入る時、「これは村が儲かるな」とシグナが笑った。

残され島の周囲には遺跡が落ちやすい。その為、大陸から冒険家や学者様が遺跡探索の為にシエンシア多島海に訪れた時、残され島が逗留地となることが多い。村にはそういう客の世話をするお店が幾つかあった。

ライラのお父さんがやっている宿屋の〈月見亭〉を始め、コルンパさんとエイダさんの武器屋、それに冒険に必要な装備を揃えてくれるサーシャさんの雑貨屋なんかもそうだ。

これだけ大きな遺跡が現れれば、しばらくはどのお店も繁盛するに違いない。

島外から来た人たちは村に逗留し、装備を揃えて、近海の遺跡に探検に行く。遺跡に残された貴重品目当てだったり、学術調査だったり、単にスリルを求めてだったり、目的は様々だ。ちなみに彼らが〝星の欠片〟を見つけた場合は、大抵は貿易商のアントリアさんを介して姉さんに解析が依頼される。

ただし、遺跡には多くの危険がある。一番の危険は魔獣の存在だ。空から落ちてくる遺

跡の大半は魔獣の巣窟になっている。遺跡の中に巣くっていた魔獣が、人間の匂いを嗅ぎとって、海を泳いで残され島に渡ってくることだってあるんだ。

これを防ぐ為に、島の近くに遺跡が落ちた時は、オルバス師匠や僕たちが先遣隊として遺跡に入り、魔獣を一通り倒しておくのが通例になっている。スリルを求めて島にやって来る旅人や、魔獣の調査をしている学者さんはがっかりするけど、村民の安全の方が、遺跡観光よりも優先事項なのだから、これはしょうがない。

一階ごとに探索し、時折現れる魔獣を薙ぎ倒すも、なかなかオルバス師匠たちに追いつけなかった。

「しっかし、クソオヤジたちはどこまで行ったんだ？」

塔の外壁に沿って螺旋状に続く石段を上りながら、シグナが忌々しげに言う。ただ、それは心配しているが故の口調だと僕は知っている。

「外から見た時の窓の数から言うと、この先が最上階だね」

「お、もうそんなに来たか？　思ったより手ごたえがなかったな」

石段は弧を描いている為、先を窺うことは出来ない。

その時、

「きゃああっ！」
上階の奥から、女の子の悲鳴が聞こえた。
「クレハだ！」
僕が叫ぶよりも早く、シグナは剣を構え直し、階段を駆け上がっていた。

塔の最上階は広間になっていた。壁に並ぶ菱形に切られた窓から陽光が差し込み、室内をぼんやりと明るくしていた。
部屋の奥に、師匠とクレハがいるのが見えた。魔獣に取り囲まれ、壁際に追い詰められている。僕たちは更に速度を上げてそちらに向かう。
師匠は、クレハを庇うように立ち、細身の刀を地面に垂直に構えている。相対しているのは、さっきも戦った、二本触覚の丸い奴だ。それが群れをなして二人の周りに幾重にも壁を作っていた。
クレハは怯えた瞳で、しかし、師匠にしがみついたりはせず、いつも持ち歩いている肩掛けの鞄をぎゅっと握り、壁に背中を付けている。背後の窓から斜めに落ちる光が、クレハの長い銀髪を照らしていた。
「師匠！　クレハ！」

僕が叫ぶと、二人がこちらに気づく。魔獣の一部も、こちらに触手を向ける。
クレハは一瞬泣きだしそうに表情を歪め、けれど、すぐに怒った顔に変わった。
「もう！　二人とも、来るのが遅いのよ！」
僕はシグナと一瞬目を合わせ、苦笑し、そして魔獣の群れに突っ込んだ。
「うおりゃあっ！」
「うおおおおっ！」
声を上げたのは、魔獣の注意をこちらに引き寄せる為。クレハを庇ったままでは師匠は戦いにくいので、あの包囲網を一旦切り崩さなきゃいけない。
最初にこちらに跳んできた球体を、シグナが師匠の武器と似た片刃の剣で真上から切り裂く。魔獣は音もなく消え去っていく。それに呼応するように、師匠たちを取り囲んでいた奴らが次々とこちらに向かって来た。
石の床を飛び跳ねて向かってくる魔獣を、シグナと分担して相手をしていく。特に言葉を交わしたりはしない。長年一緒に修行をしてきた仲なので、どれがどっちの獲物になるのか、シグナの呼吸を聞けば判断出来た。
「ハッ！」
そして、師匠が短い気合と共に、こちらに気を取られた魔獣を切り捨てる。魔獣が作っていた壁に隙間が生まれた。その隙間を駆け、師匠とクレハの側についた。

「師匠！」

豊かな髭を生やし、異国の装束を着た師匠、剣豪オルバス・アルハゼンは、魔獣から目を離さずに言った。

「すまんなナユタ。どう倒したものか考えていたのだ。株を踏んだら魔獣が突然現れてしまってな。判断力が鈍っているとは、もう年だ」

ちっとも本心では思っていないであろう言葉を口にした後、師匠は一歩前に踏み込み、刀を斜めに振り下ろして魔獣の丸い体を斬る。あまりの刃の鋭さに、球体の上半分が切断面を滑り落ちて地面に転がり、そして下半分と共に消えた。

「何が年だよクソオヤジ！　だったら家でおとなしくしてやがれ！」

シグナが複数の魔獣をまとめて切り裂きながら叫ぶと、師匠が眉根を寄せた。

「これシグナ！　敵を前にして意識を逸らすでない！　そんな剣は教えておらんぞ！」

お互いに魔獣を薙ぎ払いながら、軽口を叩き合っている。まったく、この親子は……。

師匠と居場所を入れ替わるようにして、クレハの前に立つ。

「クレハ、大丈夫？」

クレハは涙が滲んだ大きな瞳を僕に見えないように少しうつむき、言った。

「私が大丈夫じゃないとでも思っているの？」

いつものクレハの声。けれど、綺麗な瞳はいつも以上に白く見え、小さな肩がほんの少し震えているのが分かった。

「ごめんね、遅くなって」

途端、クレハは顔を上げ、潤んだ瞳でこちらを睨み付けた。

「そうよ！　ナユタはいつも遅いのよ！」

その言葉に苦笑しつつ、迫ってくる触覚に剣の腹を当てて左右にいなし、本体を突き刺す。もう魔獣の半分以上は倒されていた。

クレハ・アルハゼンは、シグナの妹だ。強がりな性格が兄とよく似ていると思う。ただ、もしそう言ったら、二人ともきっと怒るだろうけど。その辺が似ているのだ。

二人はオルバス師匠の家で暮らしていて、師匠を父親としてとても慕っている。けれど、師匠との血縁はない。

五年前の嵐の夜、不意に予感を得たオルバス師匠が海岸に向かうと、波打ち際にずぶ濡れで倒れている二人の子供を見つけた。まだ幼い男児と女児を師匠は両腕に抱えて真夜中の村を歩き、村唯一の医師、ハイドル先生の家の戸を叩いた。

幸いにも二人は外傷もなく、徐々に体力を回復し、話せるようにもなった。どこかの国の船が難破し、流れ着いたのだろうと思われたが、詳しい事情を聞くことは叶わなかった。

二人とも、漂着するより前の記憶を失っていたのだ。名前すら、覚えていなかった。身寄りを示す物は所持していなかった。着ていた服の装飾が、シエンシア多島海にも、大陸にも見られない様式だったので、一時期は「〝失われた楽園〟からの漂着者なのでは？」と噂にもなりかけたのだけど、師匠が「無用な詮索は避けよう」と提案し、下火になった。

やがて、二人は元気になり、村全体で彼らの処遇について検討することになった。その時、師匠が「見つけた責任を取る」と言い、二人を引き取る提案をした。村長が「オルバス殿にとっても、意義のあることでしょう」と、それを認めた。

そうして、オルバス師匠は、二人を養子に迎え、シグナとクレハと名付けた。

シグナもクレハも、僕と同い年くらいで、村には同年代の子供が僕とライラしかいなかった。だから僕たち四人はすぐに仲良くなり、毎日一緒に遊んでいた。

あれから五年。僕たちは成長した。あの頃はみんなで師匠の真似をして木の枝で剣士ごっこをしていたのに、本物の剣を握り、師匠に教えを請うたのは、僕とシグナだけだった。ライラは、宿屋の手伝いをするようになって、料理の腕がどんどん上がっていると姉さんが言っていた。クレハは博物学者のヴォランス博士の下で勉強するようになった。

あれから五年。

クレハは、とても綺麗になった。

最後の二匹を倒したのはシグナだった。見える範囲に魔獣がいなくなったのを確認してから、剣を鞘にしまう。同時に、強張った体から緊張が落ちていくのが感じられた。シグナが近づいてくる。

「ナユタ、無事か？」

「もちろん。そっちは？」

「誰に聞いてるんだ？」

シグナは笑って剣を演舞のように振り回し、無事を報せる。けれど、

「嘘」

ずっと壁際にいたクレハがそう言って、足下の瓦礫を避けながら、素早くシグナに駆け寄る。そして、素早くシグナの左手首を掴み、関節を逆方向に持ち上げた。

「あだだだ！」

「ほらやっぱり。ここ、裂けてるじゃない。触覚に切られたのね」

クレハの言う通り、シグナの左の脇腹の服が裂け、血がにじんでいた。

「包帯巻くから、座って」

「これぐらいどうってことねえよ」

「私は『座って』って言ったのよ、兄さん」
にっこりと笑うクレハ。思わず背筋がぞくりとなった。満月のように完璧な笑顔。あまりに完璧すぎて、有無を言わせない威圧感を隠し切れていない。端的に言うと、怖い。
気づけば、シグナは床にあぐらを掻いていた。彼は、僕以上に妹を知っているのだろう。
「よろしい」
クレハは隣に膝をつき、鞄から水瓶と布を取り出す。布に水を染みこませ、傷口をぬぐった。シグナが「くっ」と声を漏らす。眉が、痛みをこらえていた。
クレハは残され島に隔離された希少生物の博物館の館長、ヴォランス博士に師事している。博物館で働きながら動物学、植物学を学んでいて、その過程で薬草や応急処置についても詳しくなった。それもあって、オルバス師匠が遺跡探索をする際には、師匠のお手伝いと、自身の学術的興味から同行している。
クレハが小瓶から塗り薬を指に取り、傷口に触れると、シグナの体がびくりと跳ねた。
「いてえっ！　もうちょっとそっとやれよ！」
「男ならこれくらい我慢しなさい！」
「お前は何をやるにしても雑なんだよ！　もうちょっと女らしい淑やかさを持て！」
「なんですって！」
「いてえって！」

やりとりに思わず微笑んでしまう。物怖じしない、男勝りな気質はあの頃から変わっていない。
「ナユタ、今笑ったでしょ！　悪かったわね、ライラみたいに器用じゃなくて！」
なぜここでライラの名前が出てくるのだろう。
クレハに拗ねるように睨まれて、視線を逸らす。と、オルバス師匠が部屋の奥に立ち、石の壁を見つめていた。
「師匠、何を見ているんですか？」
駆け寄って聞く。師匠は腕を組んだまま「うむ」と答えた。
「さっきな、この壁に近づいた時に、床にあった仕掛け罠を踏んでしまったらしくてな、魔獣がまとめて湧いて出てきたのだ。何か大切な物なのかと思ってな」
「なるほど」
師匠の視線の先を僕も眺める。確かに、その壁だけ、他とは変わっていた。
その壁には大きな彫刻が彫り込まれていた。この塔の遺跡の他の場所では見られなかった物だ。周囲の壁から突き出るようにして、それはあった。
僕は思ったままのことを口にした。
「これは、門、でしょうか？」
師匠が暫く考えてから答える。

「うむ。扉のようにも見えるな」
石を積み上げて作った二本の柱が足下から伸び、僕の頭の上辺りで弧を描いて繋がっている。僕にはその彫刻が門の枠のように見えた。
けれど、門の内側にあたる所は、のっぺりとした一枚岩が嵌め込まれているだけだったので、師匠の言う通り、大きな扉のようにも見えた。今は年月を経てざらついているが、かつては美しく磨き上げられていたのかもしれない。
弧を描く石の柱にはなにやら細かい装飾が施されていて、それは文字のようにも見えたけど、僕の知っているどの言語の文字でもなかった。
門にせよ扉にせよ、この彫刻は何を意味するのだろう？
しばらく意匠を眺めているうちに、僕は奇妙な感覚にとらわれ始めていた。
「師匠、僕、これと同じ物を、どこかで見たような気が……」
師匠も困惑げに髭を弄った。
「ナユタもそう思うか。実はワシもそんな気がするのだが、はて、どこでだったかな……」
僕は好奇心にかられ、門に触れようと手を伸ばした。
と、その時、伸ばした手がぼんやりと照らされていることに気づく。窓の明かりではない。僕は光源を探した。そして、
「門が、光っている……？」

柱に刻まれた文字のような装飾の内側から、光がにじみ出しているように見えた。
「ナユタ、見ろ！」
師匠が門の内側の一点を指さす。まるで壁に穴が空いたように、そこが光っていた。まるで水が漏れ出すように、その穴から光がほとばしり、継ぎ目のない壁に沿って満ちていく。やがて、柱の内側は完全に淡く、温かな光に満ちた。それは、光の扉のように見えた。
「なんだ、これ……？」
僕は呆然とその光景を見つめていた。師匠に連れられて多くの遺跡を探索してきたけど、こんな物を見るのは初めてだった。
オルバス師匠を見る。と、その横顔はいつものそれと違っていた。驚きに満ちた表情は、しかし、緊張感に溢れている。
「何か、来る！」
短く師匠が叫ぶ。
門に満ちる光の奥から、小さな影がこちらに向かってきていた。
光の扉の真ん中あたりに浮かぶその小さな丸い影が、ふらふらと上下に揺れながら、徐々に大きくなっていく。
僕は瞬時に剣を構える。魔獣がやって来るのか!?
「気をつけろ、ナユタ！」

髄匠が叫ぶのと同時に、それが光の膜を抜けて、こちらに、僕の方に向かって飛び出してくる。
「えっ!?」
思わず叫ぶ。それは魔獣ではなかった。
最初、僕は、人形が飛んできたのだと思った。僕の頭くらいの大きさの、綺麗な、可愛らしい女の子の人形が。長い前髪に隠れて、顔はよく見えなかった。
綺麗な桃色の髪は、頭の上で左右にふた房に結び、その女の子の背丈よりも長く垂れている。異国の服を纏い、細くて長い手足は布に覆われていて、わずかに二の腕とふとももから、健康的な肌色が覗いていた。
髪の艶といい、生き生きとした肌といい、驚くくらいに美しく精巧な人形が、空中を回転するように飛んでいた。
人形は、自身の身の丈くらいの大きさの、円盤状の物を抱えていた。あれはなんだ?
と、その時、その人形が、顔を上げて、僕を見た。
髪の色と同じ、透き通った、可愛らしい桃色の瞳が僕を見つめる。そして、こちらに近づいてくるその瞳が、生気の宿った瞳が、驚きに見開かれた。
人形じゃない! この小さな女の子は生きている!
まるで、幼い頃に聞かされたおとぎ話に出てきた妖精のようだ、と、僕は驚く。

そしてその驚きを感じた直後、妖精らしき女の子は真っ直ぐこちらに飛び込んできて、僕の顔面にぶつかった。
ごちん。
勢いが止まらず僕はその子を顔に乗せた形で、地面に仰向けに倒れ込む。すぐ近くでカラカラと金属の何かが転がる音がした。視線を向けると、石床に、女の子が抱えていた円盤が転がっているのが見えた。
厚みのある円盤で、外見は石を綺麗に磨いた装飾品のように見えた。ただ、身につけるには大きさも重さも不釣り合いに思えた。何に使う物なのか、僕には思いつかなかった。
「ナユタ!」
クレハの心配そうな声。とはいえ、ちょっと鼻の頭が痛いくらいで、大事はなかった。
起き上がって周囲を見る。
顔にぶつかってきた女の子が地面に倒れている。苦しそうに息をしていた。確かに、生きている。よく見ると、服や腕が汚れていた。クレハが女の子の側に座って言った。
「この子……逃げてきたんじゃないかしら。必死そうに見えた」
「逃げるって、誰から？」
と、その時、また門が光り出した。
「今度はなんだ!?」

光の中に、影が、二つ浮かんでいた。こちらに近づいてくる。
僕にはそれが、光の中に黒い染みが広がっているように見えて、全身がぞわりと波打つ。
強い悪意が近づいてくるのを、肌が感じ取っていた。
漆黒の染みが、門に満ちている光の膜を飲み込んでいく。
やがて、光が全て黒に塗りつぶされた。空間が、すっと暗くなった気がした。
同時に、門の向こう、漆黒の中から、革靴のつま先が現れ、こちらの地面を踏んだ。
そして、薄褐色の肌をした壮年の男が、門から出てきた。
群青の法衣のような物を纏い、背丈よりも長い杖をついている。薄い小麦色の髪を長く伸ばし、赤い瞳が無表情にこちらに向いている。
その男に続いて、もう一人、僕と同い年くらいの若い男が現れる。
若い男は長い大剣を腰から下げていた。複雑な装飾が施された大きな仮面を被っていて、鼻から顎までを覆っていた。
門を出て数歩の所で二人は立ち止まる。仮面の下に僅かに見える瞳から、冷たい視線が漏れた。
「貴様らは……」
僕たちを見て少しだけ目を大きくする。やがて、少し興味深げな顔をした。
「となると、ここは、地の上か。そういうことも、あるか」
何を言っているのか、よく分からなかった。けれど、僕は僕の心が勝手に緊張感を高め、全身に伝えていくのを感じていた。
この二人は、強い。肌で、それが分かった。
杖の男は、倒れている小さな女の子を見た。
「ノイよ。管理者としての忠誠心はたいしたものだが、無駄だ。〝マスターギア〟は私の物だ」
ノイ、というのがこの小さな女の子の名前だろうか。〝マスターギア〟ってなんだろう？
杖の男は横を向き、横に立っていた剣士に言った。
「セラムよ、〝マスターギア〟を回収しろ」
セラムと呼ばれた剣士は小さく顎を引き、前に出た。そして、床に転がっている円盤に向かう。あれが、〝マスターギア〟？
「だ……め……なの」
その時、小さな女の子が、目を閉じたまま口を開く。
「マスター……ギア……を、……渡し……ちゃ、……ダメ……な……の」
苦しそうに漏れ出るその声を、杖の男は一喝する。
「黙れ」
大剣の剣士が円盤の前に立つ。円盤を掴もうと手を伸ばし、体をかがめようとする。
と、その時、

「よっと」
　いつの間にか近づいていたシグナが、さっと円盤を拾い上げ、それを僕に向けて投げた。僕はそれを片手で受け止める。杖の男はシグナを睨み、ゆっくりと言う。
「……邪魔をするのか」
「ちっちゃな子供をいじめちゃいかんな」
　クレハが女の子をそっと抱き上げて、後ずさった。杖の男はそちらをちらりと見て、そして、さきほどよりも大きく、薄い目を開いた。
「お前は……」
　杖の男はクレハを見つめたまま、暫く黙っていた。やがて、剣士の方を向く。
「セラム、〝マスターギア〟を回収しろ」
　次の瞬間、オルバス師匠が叫んだ。
「ナユタ！　剣を抜け！」
　師匠の言葉を受け、僕は反射的に持っていた円盤を床に捨て、剣を鞘から引き抜いた。
　次の瞬間、構えたばかりの僕の剣が、ギリギリの間合いで大剣を受け止めていた。遅れて強い衝撃が両腕に伝わり、筋肉が悲鳴を上げる。必死に足を踏ん張り、大剣を押さえる。
　目の前に、仮面の剣士が迫っていた。僕には、その動きが見えなかった。師匠の言葉に反応するのが少し遅れていたら、僕の頭上に落ちていただろう。

「だあっ！」
　渾身の力で大剣を押し返す。仮面の男は素早く後ろに下がり、構え直してこちらを睨む。
　この男は、強い。
　あれだけの速度で動きながら、重量のある剣を軽々と使いこなし、迷いのない動きで斬り込んでいる。シグナやオルバス師匠と同格、いや、それ以上かもしれない。
　——僕に、勝てるのか？
　一瞬、頭に浮かんだその迷いが、僕の判断を鈍らせた。
　けれど、その一瞬は、剣士が命を落とすには十分な時間だった。
「ナユタ！」
　クレハの言葉が遠くに聞こえる。
　真横に迫る大剣は、まっすぐに僕の首を狙っていた。その剣の動きがやけにゆっくりに見えた。避けなければと思うのだけど、僕の体はそれ以上にゆっくりにしか動かない。
　——殺される。ここで死ぬ。
　死への恐怖は僕の体を硬直させたりはしなかった。逆に、思考を活性化させ、なんとかしてこの窮地を脱出する方法を考え、必死に体を動かそうとした。
　けれど間に合わない。大剣が、腕一本分の距離まで迫る。
「諦めるなナユタ！」

声と同時に硬質な音が響く。
見ると、オルバス師匠が、異国の刀で大剣の動きを止めていた。僕の体と迫り来る大剣との僅かな隙間に、自身をねじ込んだのだ。刃同士がこすれ、耳障りな音が続いた。
「どけ！　お前にはこいつは倒せん！」
そう叫び、細身の刀で大剣を押し返す。仮面の男は体勢を保つ為に体を引かざるを得ず、そこに師匠が間髪を入れずに攻撃を繰り出す。
「きいえええっ！」
仮面の男の大剣が力で斬る剣だとすれば、師匠の刀は速度で斬る剣だった。一度斬りかかっては瞬時に刀身を返して次の攻撃に移る。
仮面の男は反撃の隙を見つけられず、間断なく繰り出される師匠の刀を防ぐことしか出来なかった。徐々に後退していく中、一文字に結ばれていた唇が、僅かに歪んだ。
と、その時、足下が、がくんと揺れた。
「なんだ⁉」
シグナが叫ぶと同時に、もう一度、今度はより大きな揺れが部屋全体を襲った。天井から細かな石の欠片が降り注ぐ。
石床に大きな亀裂が走り、そして割れた。石が階下に落ち、大きな割れ目が生まれた。
「崩落かっ⁉」

どうやらそのようだった。なおも強い振動が床から伝わってくる。
床に出来た亀裂は零れた水のように広がり、刀を交わしている師匠の足下に届いた。
「なっ⁉」
亀裂によって生まれた段差に師匠が足を取られ、耐えきれず体勢を崩してしまう。
仮面の男はその一瞬を逃さず、大剣を真横から師匠に斬りつける。師匠はなんとか刀身を当てて勢いを減じようとするけれど、踏ん張りきれず、刀もろともその体を薙ぎ飛ばされた。
「父さんっ！」
クレハが叫ぶ。宙を飛んだ師匠の体は壁に激突し、床に落ちた。僕は駆け寄って、師匠を助け起こす。
「大丈夫ですか、師匠！」
「馬鹿……者、敵に背を、向ける剣士が、どこに、おるか……」
苦しそうに、それでも僕を叱咤した師匠は、地面に転がった自身の刀を取ろうと立ち上がろうとして、苦しげな声を上げた。
「ぐあっ‼」
再び倒れかけた師匠を、抱きかかえるように支える。
「師匠！」

「どうやら、折ってしまったようだ。ふがいない……」
見れば、師匠の左足の膝が関節のない箇所で曲がっていた。それに、右腕も。
師匠を抱えたまま、僕は振り返る。仮面の男は、剣を構えたまま僕たちを見つめていた。
「ナユタ、クソオヤジ。こいつは俺に任せろ」
シグナがそう言って、仮面の男の前に立ち、剣を構えた。床の亀裂が広がり続ける中、二人は対峙する。
「初対面の相手に悪いんだけどよ。なあんか、お前、気に入らないんだわ」
そう言って一歩右に動く。仮面の男も、シグナの動きに合わせて歩を進める。二人は、円を描くように距離を取り合う。また、塔が大きく揺れた。
「それに、ナユタを殺しかけた分と、クソオヤジを痛めつけてくれた分の借りは、きっちり返しておかないとな」
シグナの声は冷静だし、少しだけ笑ってもいた。けれど、それは怒りの裏返しであることが、僕には伝わってきた。
「いくぞっ！」
すっと頭を下げ、シグナが突っ込んでいく。仮面の男は斜めに構えて初撃を受け止めた。そこから、二人の激しい打ち合いが始まる。
シグナはオルバス師匠と同じ、速度で斬る剣を得意としている。使っている愛剣も師匠から譲り受けた異国の片刃剣だ。ただし、ここぞという時には、その細身の刃に体重を乗せ、力でねじ伏せるような戦い方もする。どちらかというと、そちらの方がシグナの性格に合っていた。
何度も刃がぶつかり、周囲に火花を散らす。床に転がった瓦礫も、亀裂が作る段差も、二人はさして気にした風もなく、けれど的確に避け、剣技の応酬を続けた。
二人の剣士が近づき、ぶつかり、そして離れる。二人の技量は互角だった。あまりにも互角過ぎて、僕は予め繰り出す技が決まっている演舞を見ているような錯覚に陥る。
舞踏のように息の合った動きで、二人は剣を交え続ける。それは、シグナが鏡に映った自身と戦っているようにすら、思える程だった。
と、その時、塔が大きく揺れた。シグナの剣が初めて空振りする。脇に避けた剣士は、真横から大剣を薙ぐ。
「シグナっ！」
剣で受ける余裕はなかった。シグナは膝を目一杯曲げて、両足で背後に跳ぶ。大剣の先端がシグナの頬をかすり、前髪の端を切り取る。日に焼けた髪の毛と、丸い耳飾りがちぎれて宙を舞った。
「ちぃっ！」
舌打ちして構え直す。切られた頬に、血の筋が滲んでいた。

その時、二人の戦いを無言で見つめていた杖の男が、自分たちが出てきた門の方を向いて「むう」と唸った。

「いかん、〝転位門〟の力が失われようとしている」

見ると、先ほどまで眩しいほどに門から放たれていた光が、明らかに弱まっていた。杖の男は、シグナと睨み合ったまま微動だにしない仮面の剣士に呼びかける。

「セラム、戻るぞ」

「なっ!?」

途端、剣士の男はシグナが目の前で構えているにも拘わらず、剣を納めて背を向けた。

シグナは呆気に取られた後、目を怒らせて、門に向かう剣士の背中に怒鳴りつけた。

「てめえふざけるな！　まだ勝負はついてねえぞ！」

しかし、剣士はシグナの言葉に反応する素振りすら見せず、杖の男の元に戻る。

「聞いてねえのかよ！」

シグナが駆け寄ろうとする。すると、杖の男が身の丈より長い杖を振り上げた。

途端、杖の先端から稲妻がほとばしり、幾筋にも分かれてシグナの眼前に降り注いだ。

シグナは間一髪で横に避ける。稲妻が落ちた床が、衝撃で大きく割れ、階下に落ちていった。音と地響きが伝わる。

稲妻によって作られた巨大な穴によって、広間は二分された。門がある側の床に立っているのは、杖の男と、仮面の剣士だけだった。

杖を下ろすと、杖の男はこちらに、見下すような笑みを向けた。

「我が大願は間もなく叶う。〝マスターギア〟は、暫く貴様らに預けておこう」

そして、視線を横にずらし、クレハを見る。クレハはうずくまって、あの男がノイと呼んでいた小さな女の子を抱きかかえていた。

男の顔から笑みが薄れ、そして、呟くように言った。

「──お前も、しばし、預ける」

「どういう意味だ！」

僕の叫びに返事をすることもなく、杖の男は背を向け、門に足を差し入れる。光に溶けるように、その体が壁の中に飲み込まれていった。仮面の剣士が後に続き、姿を消した。

僕たちは、二人が消えていく様を、呆然と見つめていた。

その時、今までよりも大きな衝撃が、部屋全体に生じた。天井にも大きなひびが入り、拳大の石が幾つも落ちてきた。

オルバス師匠が痛みをこらえながら言った。

「遺跡が、崩れるかも、しれん。早く、外に出なければ……」

振動が更に大きくなっていく。このままでは危険だ。シグナに向かって叫ぶ。

「シグナ！　一度下りよう！」

けれど、シグナは床に開いた穴の縁で、光が弱まっていく門を、じっと睨んでいた。
そして、
「ちくしょうっ！　待ちやがれってんだ！」
穴を一気に飛び越え、そのまま門に突っ込んでいく。
「兄さん！」
クレハが叫ぶよりも早く、シグナの体は弱々しい光に溶けて、壁の中に消えた。
その直後、門が纏っていた光が完全に消え、ただの壁に、戻った。
呼応するように、遺跡の振動が一段と大きくなり、天井が崩れ始めた。門にも大きな亀裂が入り、割れた。
「師匠！」
「うむ、一度戻るぞ！」
師匠が立ち上がる。僕は座り込んだままのクレハの肩を掴んだ。
「クレハ！　立つんだ！　これ以上ここにいたら危ない！」
「兄さん！」
二つに割れた門に向かって、もう一度クレハが叫ぶ。僕は無理矢理クレハを立ち上がらせ、引っ張るように階段へと向かった。
崩れかける遺跡から脱出する間、クレハはずっと「兄さん」と、呟いていた。

「うん、ナユタ君の方は、特に大きな怪我はないようだね」
そう言って、医師のハイドル先生が微笑む。後ろに立っていたアーサ姉さんが、胸に手を当て、ふうと息をついた。
「じゃあ、私は下にいるわね」
そう言って、姉さんは階段を下りていった。とはいえ一人減っても、ハーシェル家の二階、僕の部屋は人で溢れていた。
ハイドル先生は椅子に座ったまま、既に処置を終えていたオルバス師匠の方を向く。
「オルバスさんは、右腕と左足を骨折されてますね。剣が握れるようになるまでは、暫くかかるでしょう」
「剣士が利き腕を壊すとは、我ながら情けない……」
添え木で固定された利き腕を見下ろし呟く師匠の手を、処置を手伝っていたライラがそっと触れた。
クレハは、椅子に座り、寝台で眠っている小さな女の子をじっと見つめていた。
女の子は、ずっと眠っていた。戸惑いながらも診察してくれたハイドル先生も「疲労から気絶したんだろう」と言っていた。

光の向こうに消えたシグナたちの手がかりは、今はこの女の子だけだった。クレハは、この子が目覚めるのをじっと待っていた。

その手には、シグナが落としていった、丸い耳飾りが握られていた。指が白くなるほど、強く握られていた。

陽はまだ高く、窓際の机に光を注いでいる。机の上には、僕があの時床に捨てた円盤があった。オルバス師匠が拾ってくれていたそうだ。

「う……うん……」

寝台の中で身じろぎした女の子が、ゆっくりと目を開ける。

「こ……ここは……？」

「残され島よ」

クレハが冷静に答える。

「あなた、自分の名前が言える？」

「ノイ……」

そういえば、杖の男もこの子のことをノイと言っていたことを思いだす。

ノイは、ゆっくりと視線を巡らし、クレハを見た。

「……クレハ……様？」

ノイの言葉に、クレハの目が大きくなる。

「そうだけど……、あなたどうして、私の名前を？」

その途端、ノイは驚いた顔をして、寝台から跳ね起きた。掛けていた薄い布団がクレハの膝の上に落ちて、ノイはその上に飛び乗ってクレハを見上げる。

「クレハ様！　どうしてこんな所に!?　今までどこにいらしたんですか!?」

「え？　え？　ちょ、ちょっと待って」

クレハは戸惑って、僕の方を見る。とはいえ、僕にも訳が分からない。

「ねえ、君は――」

ノイは僕に声をかけられて、初めてこの場にクレハ以外の人がいることに気づいたらしく、驚きに目を丸くする。

「きゃっ！　人間が沢山いるの！　どうして!?」

そして、クレハの膝の上で縮こまり、両手で顔を覆おうとした。と、今度はその両手をまじまじと見て、開いたり閉じたりした後、叫ぶ。

「『マスターギア』がないの！」

僕は警戒させないように優しく言った。

「君が持っていた円盤なら、そこにあるよ」

机を指さす。するとノイは

「あった！」

と叫び、クレハの膝の上からぴょんと飛び上がった。ノイの体が空中にふわりと浮かぶ。
「飛んだ……！」
本当に、おとぎ話に出てくる妖精のようだった。寝物語に聞いた妖精には羽があって、空を自由に飛べたのだ。
けれど、ノイの背中には羽は見えなかった。
加えて、寝台から机まで、少し距離があった。そして、
「あ、あれ？」
ノイは空中で少しジタバタした後、そのまま落下した。どうやら、飛べないらしい。
「おっと」
床に着く前に受け止めて、寝台に戻す。ノイは目をくるくる回しながら呟いた。
「浮遊機能が働かないの……どうして……？」
ノイを寝台に寝かせる。まだ体が疲れているのか、抵抗されなかった。クレハが言った。
「ねえ、ノイ。あなたのことを教えてくれない？　ここにいる人たちはあなたを傷付けたりしないわ。あなたの力になりたいの」
ノイは、クレハと、周りの僕たちを交互に見てから、やがて呟いた。
「クレハ様がそう言うなら、信じるの……」
「あなたの言う『クレハ様』は、私のことじゃないと思うけど……」

クレハは戸惑いつつも、まずノイがこの部屋に連れて来られるまでのことを説明し、それから聞いた。
「あなたと、あの二人の男は何者なの？　シグナ、私の兄はどこに消えてしまったの？」
寝台に横たわったまま、ノイが答える。
「私はノイ、管理者なの」
「管理者？　それは何？」
「ええと、人間の言葉では、『人形』が近いのかな？　ノイはご主人様に作ってもらって、〝庭園〟という場所の管理を任されてるの」
「君は人間じゃないんだね？」
「当然なの！」
僕が聞くと、ノイは横になったまま胸を張った。
「さっきは飛ぼうとしたのかな？　ノイは飛べるの？」
「もちろん飛べるの！」
更に胸を張る。
「……でも、さっきは上手くいかなかったの……」
今度は急にしょんぼりする。
「多分、ここは〝星の力〟が弱いから、上手く飛行機能が働かないのだと思うの……」

〝星の力〟がなんの事なのか気になったけど、今はシグナの行方が先だ。
「あの二人のことを教えてくれる？」
クレハの質問に、ノイは頷く。
「杖を持った男の方はゼクスト、仮面の剣士はセラムって言うの。私は〝テラ〟という所で、〝庭園〟を管理し、〝テラ〟に四つある〝マスターギア〟を監視する立場にいるの。けれど、突然あの二人が〝マスターギア〟を奪い始めて、私はその一つを持ち出して逃げてきたの。でも、追いつかれそうになったから、〝転位門〟に飛び込んだの」
「〝転位門〟？」
そう言えば、ノイの言うゼクストという男も、同じ言葉を使っていた。
「それって、あの壁に彫られた門のことよね？　あの門は、なんなの？」
「〝転位門〟は、離れた二つの場所を繋ぐことが出来るの」
想像はしていたことだけど、改めて聞かされて、僕は驚く。壁に彫られた門が、別の空間に繋がっているなんて、それこそ、おとぎ話の中でしか聞いたことがなかった。
ノイは沈んだ顔で続ける。
「ゼクストもセラムも、それにシグナって人も、きっと今は〝テラ〟に戻ってるの」
「〝テラ〟には、どうやって行けるの？」
「ここからは、〝転位門〟を通ってしか、行けないの」

「だが、あの門は、崩れてしまったぞ」
オルバス師匠が口を挟むと、ノイが困った顔をする。
「大割りなの。このままでは、〝テラ〟に帰れないの……」
「それって、兄さんもこちらに戻ってこられないってことよね……」
考え込むクレハ。ハイドル先生が、彼女の肩に手を触れる。
「一通り聞きたいことは聞けたんだろう？　ノイ君はまだ疲れているみたいだ。これ以上質問攻めにするのも可哀想だし、少し休ませてあげないか？」
「……分かりました。すみません、先生」
クレハが立ち上がり、階段へ向かう。僕たちも続いて部屋を出た。

思い詰めたクレハの顔を見ているのがつらくて、僕は一階に下り、夕食の準備をしている姉さんの背中を素通りして外に出た。
玄関の前の階段に座って、ぼんやりする。
僕の家は村で一番高い所に建っているので、玄関に座ったままでも、木々の向こうに、さっきまで探索していた遺跡の先端を望むことが出来た。崩壊は一段落したらしく、外見はほとんど変わっていなかった。

対して、僕たちの方は、随分変わってしまった。島に戻ってからまだ半日も経っていないのに、様々なことがあった。ノイと出会い、師匠が傷付き、シグナは——

数刻前、仮面の剣士、セラムと対峙した時のことを思い出すと、手がじっとりと汗ばむ。

シグナはどうなったのだろう。あの二人を追いかけて、戦っているのだろうか。

考えていると、最悪の事態が浮かんでしまう。シグナは、あの二人に負けて——

「ナユタ」

急に声をかけられて驚く。頭の中にあった、考えちゃいけない想像を振り払って声の方を見る。目の前にライラが立っていた。僕は慌てて立ち上がる。ライラは心配そうに僕の顔を覗き込んだ。

「怖い顔してる。大丈夫？」

「ああ、うん。ライラは、どうかした？」

「え？　あ、うん、あのその、あのね」

僕が聞くと、急にライラは顔を赤くして、両手の指先をもじもじと動かし始める。

「さっき、話があるって言ってたでしょ？」

「ああ……」

そういえば、島に戻った直後に会った時、そんなこと言われたっけ。すっかり忘れてた。

「後にした方がいいのは分かってるんだけど、私も早く言わないと、決心がにぶっちゃいそうだから、やっぱり、今言おうと思って」

「決心？」

ライラの顔がますます赤くなる。やっぱり熱があるんじゃないかな。

「あのね、次にナユタが島に戻ってきたら、絶対言うって決めてたことがあるの」

「へえ、なんだい？」

「ええと、あのね。わっ、私ね」

ライラはそこで言いよどむ。そして、目をぎゅっと瞑り、決心したように口を開いた。

「私、ずっと前から、ナユタのことが——」

「あーっ！」

ライラが最後まで言う前に、頭上から叫び声が聞こえた。この声は、ノイだ。

見上げると、二階の窓が開き、そこからノイが体を乗り出していた。僕は声をかける。

「ノイ！　どうしたの？」

「『転位門』なの！」

そう言って、ノイは窓から外に飛び出した。そして、空中で少しの間ジタバタした後、そのまま僕の頭上に落ちてきた。

どちん。

ノイの体は軽いけど、この距離で落ちてくると、それはそれで痛かった。

「そうだった……。飛行機能が働かないんだったの……」
頭の上でノイがぶつけた頭をさすりながら呟く。
「〝転位門〟がどうしたって？」
「はっ！　そうなの！　あっちに〝転位門〟があるのが窓から見えたの！　あれを使えば、〝テラ〟に帰れるの！」
「ホントかいっ!?」
それがあれば、シグナを連れ戻せる！
「ああもう、飛べないのがこんなに不便だなんて思わなかったの！」
頭の上で叫ぶノイに、提案する。
「連れて行くよ！　どこ!?」
「ホントに!?　あっちなの！」
ノイが指さしたのは、僕の家よりも更に村から離れた所、大きな樹のある広場の方だった。僕はすぐに走り出す。
「ごめんライラ！　話はまた後で！」
「え、えーっ!!　ちょっとナユタ！　乙女の一大決心をなんだと思ってるのよ！　ナユタのバカー！！」
なんだかよく分からない怒りの叫びを背中に聞きながら、僕は広場を目指した。

今はどこも土と草に覆われているけど、残され島の海から上に出ている所のほとんどは、実は空から落ちてきた遺跡で構成されている。つまり、残され島の人たちは、遺跡の上に家を建て、そこに暮らしているんだ。
元々は名もない小さな無人島だった場所に、たまたま大きな遺跡が幾つも落ちてきてそれなりの大きさになったので、大陸から人が入植してきたんだって、以前サーペント村長に聞いたことがあった。
長い年月が経って土が積もり、今では元の無人島と遺跡の境目は分からなくなっているけど、島の三分の二は、地面を掘ればその下に埋まっている遺跡が顔を覗かせる。
東西に伸びる村の、東側の突き当たりの広場は、地面から遺跡の一部が突き出ていて、そこに根をからみつけた大樹が一本伸び、木漏れ日が周囲の地面に落ちていた。昔、シグナやクレハ、それにライラと遊び回った場所だ。
「あそこなの！」
根と遺跡がからまった一角をノイが指さす。僕はそこに近づいた。
「あ、ホントだ！」
そこにあった石壁は、確かに遺跡塔で見た門と同じ装飾が施されていた。

「だから僕も師匠も、見覚えがあると思ったんだな……」
「あのあの、もっと門に近づいて欲しいの。ええと、ナユタ・ハーシェル……？」
ノイが自信なさげに言うので、僕は微笑んだ。
「ナユタでいいよ。よろしくね、ノイ」
「……うん。よろしくなの。ナユタ」
〝転位門〟の前に近づき、ノイが見やすいようにしゃがむ。
「これでいいかい？」
「うん」
ノイが頭から身を乗り出し、〝転位門〟の縁に触れる。
すると、あの時遺跡の最上階で見たのと同じように、門の装飾が光り出し、同時に、内側に光が溢れ出し、膜を作り上げた。
「ちゃんと動いてるの！」
ノイが嬉しげに叫ぶ。僕はごくりと唾を飲み込んで、聞いた。
「この中に入れば、〝テラ〟に行けるんだね？」
「そうなの！　これで帰れるの！　良かったの！」
大喜びのノイに、僕は告げた。
「よし、行こう！」
僕が言うと、頭上でノイが慌てる。
「えっ⁉　ナユタも行くの⁉」
「もちろん。僕も〝テラ〟に行くよ」
ノイは頭の上から身を乗り出して僕の顔を覗き込み、慌てたように手を振った。
「ダメなの！　〝テラ〟は人間が来て良い所ではないの！」
そんなことを言われても、僕はノイを一人で帰すつもりは全くなかった。
「またゼクストとかって奴が襲ってくるかもしれないだろ？　一緒に行った方がいいよ。それに、僕はシグナを連れて帰らなきゃいけないんだ」
「ううう……」
ノイは困った顔をして、しばらくの間悩んでいた。やがて、
「……分かったの。でも、そのシグナって人を見つけたら、ナユタはすぐに帰るの。約束してなの！」
「分かった。約束するよ」
「それじゃあ、出発なの！」
頭の上で、ノイが元気よく叫ぶ。僕は恐る恐る、門の内側に満ちている、光の中に足を踏み入れた。



第3章

庭園

NAYUTA NO KISEKI

Chapter 3

水面に顔をつけたら、その中に空気があったような、そんな不思議な感覚を全身で受け止めながら、光で出来た薄い膜を通り抜けて、〝転位門〟の向こう側の地面に足を置いた。

そこは石畳の庭園だった。真っ青な空の下に、色とりどりの花が咲き乱れる空間が広がっていた。道の左右に広がる花壇に、知らない種類の小鳥が飛んできて、羽を休めている。チチチ、と可愛らしい鳴き声が聞こえた。

「うわぁ……」

あまりに綺麗な光景に、思わず声が漏れる。けれど、同時に不思議な気分を感じていた。

「この風景、どこかで、見たことがあるような……？」

と、急に頭が軽くなる。見上げると、さっきまで僕の頭に乗っていたノイが、今は空中をふわふわと浮いていた。

「やっぱりここなら飛べるの！　故障じゃなくて良かったの！」

ノイは嬉しそうにその場でくるりと回った。桃色のふた房の髪がふわりと浮き上がる。

「本当に飛べるんだね！」

「〝星の力〟があればこれくらい余裕なの！」

空中で誇らしげに胸を張るノイ。そして周囲を見回す。僕はノイの姿を目で追って――

「――あぁっ!?」

遠くにそびえ立つ巨大な塔が目に入る。ようやく、見覚えがある理由に気づいた。

大陸にもない様式の高い高い塔。その足下に色とりどりの花が咲いた庭園が広がっている。

「〝星の欠片〟に映っていたあの景色だ！」

それが意味することに気づき、瞬時に僕の体は興奮に熱くなる。

「ここは〝失われた楽園〟なんだ！　凄い！　実在したんだ！」

父さんと母さんが目指し、けれど、辿り着くことの出来なかった場所に、今僕は立っている。どういう仕組みか分からないけど、〝転位門〟を抜けて、やって来たんだ！

体中から、かつて感じたことのない昂揚が湧き上がってくる。風景を目に焼き付けるように見渡しながら、もう一度、到達した場所の名を呼ぶ。

「ここが、〝失われた楽園〟……」

するとノイが僕の目の前に飛んできて、不思議そうな顔をした。

「人間はそんな言葉で呼んでいるの？　私達は、この世界を〝テラ〟と呼んでいるの」

「〝テラ〟？　そう言えばさっきもそう呼んでいたね。〝テラ〟か。古い言葉にそんなのがあった気がするな」

学院での歴史の授業を思い出す。
「……確か『大地』って意味だったと思うんだけど。どうかな？　君の使う言語に——」
「そんなことはどうでもいいの！　早くゼクストを探さなきゃ！」
おっとそうだった。興奮しすぎた意識を若干落ち着かせてから、ノイに聞く。
「どうすればいいんだい？」
「〝ヘリオグラード〟に行くの！」
ノイは遠くにある塔を指さす。
「あの塔が、〝ヘリオグラード〟？」
「そうなの！　あの中に、この〝テラ〟の世界を観測できる〝アストロラーベ〟があるの。あれを使えば、ゼクストがどこに向かったか分かるの！　ついてきて！」
「分かった！」
飛んでいくノイを追いかけて、僕は天へと続く塔〝ヘリオグラード〟へと向かった。

「これが、〝アストロラーベ〟なの！　〝テラ〟の監視と全体の管理を司っているの！」
「凄い……！」
視界一杯に広がる機械の巨大さ、そして荘厳さに、僕は圧倒された。



〝ヘリオグラード〟と呼ばれる塔の一階、巨大な広間の中央に、〝アストロラーベ〟はあった。それは、僕の家と同じくらいの大きさはある、本当に巨大な機械だった。

機械は無数の歯車、無数のクランク、無数の用途も分からない部品から構成されていて、それらの部品は、僕が今まで見たことのあるどんな道具よりも複雑な動き方をしていた。時折、各所に取り付けられたパイプから勢いよく蒸気が噴き出していた。

中央に人が座る椅子があり、それを取り囲むように、これまた無数の突起やツマミ、前後に動かすのであろう棒、それに鍵盤にしか見えない物などが並んでいた。

何もかもが見たことのない技術だった。けれど、ここが〝失われた楽園〟だというのなら納得出来る。〝大洪水〟が起こる前は、今とは比べものにならないくらい高度な文明があって、科学も工学もずっと進んでいたらしい。ノイみたいな存在を作る事だって出来たのだろう。

そのノイは、椅子の側に辿り着くと、宙に浮いたまま移動して、幾つかの突起を押し込んだり、棒を動かしたりし始めた。恐らく、〝アストロラーベ〟を操作しているのだろう。

「少し待っててなの」

手伝えることもなさそうなので、僕は言われた通り待つことにした。

そこで初めて、塔の中にいるのに、この広間がとても明るいことに気づいた。しかも、明かりは真上から落ちている。ふと顔を上げて、僕はまた息を呑んだ。

〝アストロラーベ〟の上空に、黄、青、赤、緑の四色の光の粒が、まるで河の流れのようにたゆたっていた。その光が、下まで落ちていたのだ。光の河は、一方は〝アストロラーベ〟に飲み込まれ、もう一方は吹き抜けの塔の中をどこまでも昇っていた。

突起を押したり引いたりしているノイに、興奮気味に尋ねる。

「ノイ、あそこに浮かんでいる四色の光は、なんなの？」

すると、ノイは動きを止めてこちらを見て、目を輝かせた。

「〝星の力〟なの！」

まるで自分のことを自慢するみたいに、胸を張って言う。そして空中を流れる光の流れを指さした。

「〝星の力〟は万物の力の源なの。生物が生物である為に必要な要素なの」

「星の、力……」

聞き慣れない言葉を、頭の中で繰り返す。生物が生物である為にそんな物が必要だなんて知らなかった。空気みたいな物だろうか？

「それって、僕たち、人間にとっても同じなの？」

「もちろんなの！　あらゆる生命には、〝星の力〟が必要なの！」

ノイは空中でくるりと回った。

「それに、私がこうやって飛べるのも、〝テラ〟が〝星の力〟で満ちているからなの」

「なるほど……。水を沸騰させる為に火が必要、みたいな事かな……」
頭の中でなんとなく〝星の力〟がどういう類いの物なのかを考えていると、ノイがちょっと不思議そうな顔でこちらを見る。
「ん？　ノイ、どうかした？」
「ナユタって、変わってるの」
「え、なんで？」
「自分の知識や常識の中にない物を、すんなり受け入れているの。人間は、もっと疑り深い生物だと思っていたの」
「ううん、まあそういう人もいるかもしれないけど」
学院の頑固な教授たちのことを思い出し、僕は思わず苦笑してしまう。
「世界にはまだ解き明かされていない不思議な物が沢山あるだろうから、僕の想像を超えた物があっても、それをすぐに否定しようとは思わない」
「ふうん……」
ノイは分かったような分からないような顔をして、説明を続けた。
「〝テラ〟にはこの庭園を中心に四つの大陸があるの。〝アストロラーベ〟からそれぞれの大陸に〝星の力〟を供給して、〝テラ〟の均衡を保っているの」
「四色あるのはその為か……。あれ、でも」

僕は四つの光の河のうち、青色の物を指さした。
「あれだけ、輝きが大きいね？」
さっきは圧倒されて気づかなかったけど、よく見ると、青色の光の河は帯も太く、強い輝きをもって流れているのに対し、他の三色は流れが細く、所々が途切れてすら見えた。
「あれは、そういう違いがあるの？」
すると、ノイはその小さな体の小さな肩を落とし、しょんぼりとした顔になる。
「ゼクストに〝マスターギア〟を奪われてしまったからなの……」
「どういうこと？」
ノイはくるりと回って無数の鍵盤を操作する。すると、空中に巨大な地図のような物が浮かび上がった。中心に小島があり、それを四つの大きな大陸が取り囲んでいた。
「真ん中にある島が、今私たちがいる庭園なの。そして、その周りにあるのが、〝テラ〟を構成する四大陸、オルタピア、リズヴェルド、ハインメル、ラ・ウォルグなの」
当然ながら、僕がこれまで一度も見たことがない地図だった。少なくとも僕の住んでいた世界に、こんな場所はなかった。
これが、〝世界の果て〟の向こう、〝失われた楽園〟なのか……！
更にノイが鍵盤の一つを押し込むと、四つの大陸それぞれに、赤い点が灯った。
「それぞれの大陸には、神殿があるの。この、赤い光の所」

「神殿？」
　ノイは頷いて続ける。
「神殿は、〝アストロラーベ〟から送られてくる〝星の力〟を受け取って、その大陸の隅々に星の力を再配分する為の施設なの。でも、それをするには、神殿に〝マスターギア〟が正しく安置されていなければならないの。その〝マスターギア〟を突然ゼクストが奪ってしまったので、〝アストロラーベ〟からの〝星の力〟の供給が上手く出来ないの」
　頭上の細い光の帯を見ながら、ノイが悲しそうな顔をする。
「四つある〝マスターギア〟のうち、二つはもう盗られちゃって、三つ目の〝マスターギア〟が奪われる直前に、私が先にそれを神殿から取り外して、〝転位門〟で逃げたの。そうしたら、たまたまナユタ達の世界に行っちゃったの」
「ああ、なるほど……」
　それでノイは〝マスターギア〟を持って僕らの前に現れたのか。
　状況は分かった。けれど、次の疑問が生まれる。僕は聞いた。
「〝マスターギア〟によって星の力が大陸に行き渡ってるって話だけど、それが出来なくなると、何が起きるの？」
　現に、二つの大陸では既にその状況になっている筈だ。ノイはつらそうに答えた。
「〝星の力〟の供給が滞ると、その大陸における〝星の力〟の均衡が崩れるの。そうなると、大陸の気候が■■から外れてしまうの」
「■■出来ないと、どんなことが起こるのかな」
「ええと、ええと……」
　ノイはこめかみに指を当てて考える。
「気候が大きく変わってしまって、そこに住む動物や植物が弱ってしまうの。最悪、絶滅しちゃうかも。あと、均衡が崩れることで魔獣も発生するようになるの。これも、植物や動物にとって脅威なの」
　聞いていると、少し不思議な気分になる。それはまるで、僕たちが住んでいる世界の話みたいだ。僕らの世界もそこら中に魔獣が出現して、〝奈落病〟という死の病に人々は脅かされている。僕は言った。
「大陸を滅ぼすことが、ゼクストのやりたいことなのかな？」
「ううん、多分違うの。あのね、〝マスターギア〟にはもう一つの使い道があって、それは■■■が――」
　突然、ノイの言葉が途切れ、その口からざらざらとした、聞いていて不快になる雑音が漏れた。けれど、それに一番驚いていたのはノイ自身だった。
「あ、あれ？　今の何？　あのね、〝マスターギア〟のもう一つの使い道は■■■■■■■■■■■■■■■――」

まただ。ノイは唇を大きく動かしているのに、その口からは雑音が漏れ出るだけ。
やがて、ノイははっとした顔になって僕を見た。
「あ、分かったの！　これは、人間には話してはいけない機密指定なの。だから、私が話そうとしても言葉にならないの。これは私を作った人の意志だから、私にはどうしようもないの」
ノイはしゅんとした顔で僕を見る。
「ごめんなさい、ナユタ……」
謝らせるつもりなんか全くなかったので、僕は慌てて「気にしないで！」と答えた。
「僕たちに話したくても話せないことがある訳だね。それが分かっただけでもいいさ。あと一つ聞いてもいいかな？」
「なんでも聞いてなの。今みたいに答えられないかもしれないけど……」
「うん。あのね。〝アストロラーベ〟から各大陸に〝星の力〟を送り出しているってのは分かったけど、そもそもの〝星の力〟はどこから来るのかな？　〝アストロラーベ〟が、生み出しているの？」
「ううん。〝アストロラーベ〟の役割はあくまで〝テラ〟の管理だけなの。〝星の力〟の源は■■の■■■■にある、■■■■■■■■■■■■■■――」
ノイの言葉は徐々に雑音に包まれ、やがて何も聞こえなくなった。

「……ごめんなさいなの、これも説明出来ないみたい」
「気にしないでよ。ありがとう、ノイ」
ノイは少し照れた顔をして、ふわふわと浮いた後、またはっとした顔をした。
「こんな話をしている場合じゃなかったの！　ゼクストを追いかけなきゃー！」
「そうだった！　ノイ、ゼクストがどこにいるのか、分かるのかい？」
ノイはアストロラーベに取り付いて、ツマミや突起を次々と動かした。その度に空中に浮かび上がる地図がいろいろな形や色に変わっていく。やがて、こちらに背を向けたまま言う。
「ゼクストは四つ目の〝マスターギア〟を手に入れる為に、大陸オルタピアに向かっている筈なの」
「きっと、シグナもゼクストを追いかけてその大陸にいる筈だ。ノイ、オルタピアにはどうやって行けばいいんだい？」
「〝転位装置〟っていう瞬間移動装置があるの。それを使えば、庭園からオルタピアまで瞬時に移動出来るもの」
「それは〝転位門〟みたいな物？」
「もうちょっと簡易的な物。〝テラ〟では標準の移動手段で、そこら中に〝転位装置〟が置かれていて、大陸内でも大陸間でも自由に移動出来るの」

「凄い技術だな……」
「ただ、設備が老朽化していて、オルタビアの神殿のすぐ近くの〝転位装置〟が動くか分からないの。今調べるから、ちょっと待ってて」
「分かった」
ノイが再び〝アストロラーベ〟の操作を始める。僕は少し下がって、見守ることにした。
と、その時、背後から視線を感じた。気づかないうちに、誰かが塔に入り、僕たちの側まで来ていたようだ。
シグナかもしれない、と一瞬思った。けれど、そうでない可能性もある。頭の中に、あの仮面に開いた穴から覗く冷たい瞳が浮かんだ。
瞬時に振り返り、叫ぶ。
「誰だ！」
「ちょっ、ちょっと待って！　私よ！　私！」
そこにいたのは、見慣れた女の子だった。僕は呆けた声を出してしまう。
「……クレハ？」
「クレハ様！」
続いて、ノイも驚く。クレハはため息をついた後、意志の強い瞳で僕を見返してきた。
「そうよ。ナユタたちが突然姿を消しちゃったから、もしやと思って追いかけてきたのよ。まったく、私はともかく、ライラさんやアーサさんにも一言もなしにいなくなっちゃうとかどういうつもりなのよ！」
……いやちょっと待て。クレハのおしかりはごもっともなのだけど、なんでクレハが〝庭園〟に来られるんだ？
「ねえ、ノイ。〝転位門〟って……」
「……閉じるの忘れてたの。今閉じたの。ごめんなさいなの……」
徐々に声が小さくなっていくノイに心の中でため息をつく。そして改めてクレハを見た。
「僕たちの話、どこまで聞いてた？」
「とりあえず、これからオルタビアって所に行くってことは分かった」
ほとんど聞かれていたらしい。気づかれないように息を吐き、クレハに言う。
「うん。だから、クレハはみんなの所に戻っていて。ライラと姉さんにも事情を説明してくれると助かるから――」
「私も行く」
一瞬、何を言われたのか分からなかった。思わず、間抜けな声が漏れてしまう。
「……え？」
「私も行くって言ってるの。兄さんを連れ戻すんでしょ？　だったら当然ついて行くわ」
ようやく、クレハがとんでもないことを言っていると気づき、僕は慌てて手を振った。

「駄目だよクレハ！　ここは僕らの世界とは違う。どんな危険があるか分からないし」
「それはナユタだって同じじゃない。それにね」
クレハは言葉を切り、ニヤリと笑った。
「どうせナユタは考えなしにここに来たから、なんの準備もしていないんでしょ？」
そう言って、クレハはくるりと背を向けた。大きな背負い袋を担いでいる。ぶら下がっている鉄のコップや薬草の袋から、野営装備が山ほど詰まっていることが分かる。
「あと、これも」
クレハは背負い袋を床に下ろし、その上に載せていた物を両手で持ちあげた。
「あなたの肩当てと剣よ。ナユタ、丸腰で、知らない場所に冒険に行くつもりだったの？」
そう言われて、初めて、剣も持たずに〝転位門〟に飛び込んだことに気づいた。恥ずかしさに体を熱くしながら、クレハから装備を受け取る。
「あと、〝マスターギア〟だったかしら？　これも机の上に置いてあったわよ」
「わわわわ忘れてたの！」
ノイが叫ぶ。僕は苦笑しながら〝マスターギア〟をクレハから受け取り、懐に入れた。
「ナユタ、ノイ。あなたたちって、何もかも先走りすぎ。計画性がないのよ。二人で兄さんを追いかけさせても不安なだけ。だから私もついて行くわ。何か問題はある？」
クレハはそう言い切った後、にっこりと笑った。満月のような完璧な笑顔。
命に代えて守った〝マスターギア〟を忘れてくる失態をしたノイと、クレハの一度こうと決めたら決して変わらない強情さを知っている僕は、これ以上彼女を説得する気にはなれなかった。
「分かったよ。でも、危ない真似はしないでくれよ？　クレハ」
「それはこっちの台詞よ。私が手当て出来る程度の怪我で済ませてよね、ナユタ？」
その時見せてくれたのは、いつものクレハの、柔らかな笑顔だった。
そういえば、島に帰ってから、初めてこの表情を見られたな、と、僕は思った。



第4章

シグナとの再会

NAYUTA NO KISEKI

Chapter 4

「これが〝転位装置〟？」
「そうなの！」
庭園の中央にある台座の上で、ノイがくるりと回る。そこに〝転位装置〟はあった。
初め、床に石で作った水鏡が置いてあるように見えた。僕が寝そべられるくらい大きな水鏡だ。ただし、水が張られている訳ではない。複雑な意匠を施された真円の枠の中は綺麗に磨かれていて、青と緑に光っていた。
水鏡の外側には一回り大きな、石造りの円環が置かれていた。同じ装飾が施されているので、水鏡と対になっているように見える。
「さあ、乗ってなの。外側の円環は踏まないようにしてなの」
言われるままに、僕とクレハは円環をまたいで、〝転位装置〟に立った。青と緑の光が急に強まる。
「きゃっ」
クレハが小さく悲鳴を上げ、僕の服の裾をぎゅっと握った。そしてすぐにそれを離し、
「別に、怖いとかじゃないのよ？」
と、そっぽを向いた。頬が少し赤くなっているのが見えた。
「じゃあ、起動するの」
宙に浮いていたノイが僕の足下に下り立ち、小さく何かを呟く。
途端に、外側に置かれた円環が、強い光を放ち、そして、ゆっくりと持ち上がった。
「な、何これ……!」
クレハが怯えた声を出す。
「心配しなくていいの。転位は瞬時に終わるの」
石造りの円環は、ゆっくりと回転しながら、僕たちを包み込むように上昇していき、僕の頭より二つ分高い所で停止した。
その瞬間、視界が光に包まれる。眩しさに一瞬目を瞑った。
次に開いた時には、景色が一変していた。
「到着したの。問題なく動作して良かったの」
ノイが言いながら宙に浮き上がる。僕は呆然としつつ、〝転位装置〟から一歩外に出た。
さっきまでの美しく造成された〝庭園〟とは打って変わって、僕たちは鬱蒼とした森の中にいた。葉っぱが空を覆い、その隙間を縫って強い太陽の光が降り注いでいる。年輪を重ねた木々はびっしりと苔むし、枝という枝に蔦が絡みついていた。足下も草が生い茂り、地面を覆い隠している。

〝転位装置〟以外には、文明を感じさせる物は何もなかった。
景色を認識した途端に、急に体が熱に包まれた。肌からじわっと汗が出る。端的に言って、暑い。重なり合う葉の間を通って落ちてくる太陽の光は僅かなのに、それが肌を焦がした。
「ここが、オルタピア？」
僕が聞くと、ノイはくるりと回って「そう！」と答えた。
「オルタピアは密林の大陸とも呼ばれているの。森が大陸全土を覆ってるの」
〝転位装置〟から一歩外に出る。装置の周囲は小さく開けていて、その一角から、道が森の中に延びていた。道は途中で曲がり、木々が作る暗闇の中に消えている。
「この道の先に神殿があるんだね？」
「そうなの。人間の足で、丸二日くらいなの」
ノイはそう言ってからしょんぼりする。
「本当はもっと神殿の近い位置にも〝転位装置〟があるのだけど、壊れてるみたいで動かなかったの……」
「まあいいさ。とにかく進もうか、クレハ。……クレハ？」
返事がないので振り向くと、いつの間にかクレハは少し離れた場所にしゃがみ込んでいた。近づいて声をかける。
「どうしたの？」
クレハはそこに群生している橙色の花を見ているようだった。開いた手のひらほどもある大きな葉を両手で掴み、ぐっと顔を近づけている。
「信じられない……！」
葉を見つめたまま呟くクレハの顔を覗き込むと、驚きに目を見開いているのが分かった。
「珍しい植物なの？」
植物学を勉強しているクレハは、葉を指し示して興奮気味に僕を見上げる。
「この花、とっくに絶滅した種よ！　……あっ！」
顔を上げて何かに気づいたらしく、立ち上がって側に聳える大木に駆け寄る。
「この木も、あの花も！　どれも〝大洪水〟で絶滅したって言われてる植物よ！」
クレハはそれぞれの植物の学名らしき物を口にしながら、うっとりと周囲を見渡した。
「凄いわ。〝失われた楽園〟には、〝大洪水〟以前の生物が存在するのね……！」
「〝ロストヘブン〟じゃなくて〝テラ〟なの」
ノイが訂正する。
最初は目を輝かせて植物を見つめていたクレハは、やがて眉根を寄せ、難しい顔をする。
そしてまたしゃがみこんで、さっきとは違う、困惑した表情で葉を見つめた。
「クレハ、どうかしたの？」

「この植物、どれも弱っている。このままだと枯れてしまうわ」
言われてみれば、クレハが触れている葉はその緑がだらしなくしおれているように見える。葉の間に咲いている橙色の花も、色は綺麗なのに咲き方に元気がなかった。
「確かに、弱っているかも……。でも、どうしてだろう？」
クレハは顔を空に向け、天を指さした。
「太陽の光が強すぎるんだと思う。この辺りにある植物は亜熱帯で育つ種類の物ではあるけど、それでもこの気候は暑すぎるわ」
確かに、背の高い木々の合間を縫ってここまで降り注いでいる太陽の光の強さは灼熱と言っても良く、さっきから汗がだらだらと止まらない。
訝しげに頭上を睨んでいたクレハがこちらを向く。
「ねえ、ノイ、この気候は一体どういう――」
その時、僕はクレハの肩越しに、木々の隙間の暗闇に二つの目が煌めくのを見た。動物か、魔獣か。目を凝らして判断するよりも先に、その目の下辺りにぼっと炎がともった。
「クレハ！」
反射的にクレハに飛びかかって、その体を地面に押し倒す。
「きゃっ！　突然何するのよナユタ――」
クレハに覆い被さるように伏せる。寸前、暗闇から炎の塊がこちらに飛んでくるのが見えた。
頭上を何かが通り過ぎる。遅れて、熱波が体を包み込み、直後、背後で爆発するような音が轟いた。
顔を上げると、さっきまで僕が立っていた場所の、背後の木が大きく抉れ、その抉れた部分が燃えていた。
「火球だ！」
「魔獣なの！　ナユタ気をつけて！」
起き上がり、剣を抜いて構える。木の間から、のそりと、魔獣が太陽の下に出てくる。僕たちの世界で言う、四足の竜種の系統に見えた。ただ、全身が赤茶けた鱗で覆われ、背中に黒い羽が生えているこの獣は、学院の図鑑でも見たことがなかった。〝テラ〟の固有種って所か。ささくれだった尻尾を含めて全長は僕の背の二倍はある。けれど、竜種としては小型だ。
先ほど暗闇で煌めいた黄金の瞳がじっと僕との距離を測っている。火球を放った口には尖った歯が二重に並び、その端から炎がちろちろと漏れていた。
「クレハ、下がって！」
叫び、威嚇するように大きく一歩を踏み出す。すると、小竜は長い首を縮めるように曲げ、距離を取るように斜め後ろに下がった。思った通りの動きを確認してから、僕は剣を

上に構え、一気に走り出す。
竜種の共通する習性として、火球を吐いた直後は体を思うように動かせなくなるというのがある。奴らにとって火球は一撃必殺の技なんだ。おまけに、火球を短時間で連続で放つことも出来ない。
つまり、今この瞬間が、小竜を倒す絶好の機会だった。僕はなおも苦しげに首を曲げている小竜と二歩の所まで近づき、剣を振り上げる。
と、その時。
「ナユタ、危ないの！」
ノイの叫び声が聞こえたのと、急に小竜の首が持ち上がって僕の方を向いたのは同時だった。
二重に牙が並んだ口が大きく光ると、その奥から赤い炎が膨れあがるのが見えた。本能的な恐怖を感じて、僕はとっさに地面を横に蹴り、無理矢理地面に体を転がした。
轟音。
先よりも強烈な熱波が体を襲う。直後に地響き。視線の端で、巨大な火球が大樹の根元に激突しているのが見えた。僕はそれを本当にすれすれで避けていた。ノイの言葉がなければ、今頃人形の炭が出来ていただろう。
助かった。けれど、あり得ない状況に頭は混乱していた。

「どうして!?　竜種が連続で火を吐ける筈がないのに！」
地面に倒れたままの僕に向かって、クレハが叫ぶ。
「馬鹿ナユタ！　ここは私たちの世界と違うのよ！　繁殖している植物が違うように、竜だっていろんな種類がいる筈！　私たちの常識は通用しないのよ！」
しまった、そうか。考えてみれば当たり前だ。そんなことにも気づかなかったなんて！
慌てて立ち上がると、今度は小竜が目の前に迫っていた。
持ち上げられた巨大なかぎ爪が、僕ののど元を掻き斬ろうと振り下ろされ——
「——《李の閃光》！」
突然、桃色の光の塊が視界の端から飛び込んできて、目の前に迫ったかぎ爪に衝突した。小竜にとっては小石を投げつけられた程度の威力のようだけど、そのせいで狙いが外れ、腕が空を切った。
「ナユタ、今なの！」
ノイの声より速く、体が動いていた。剣を腰に溜め、半円を描くよう一気に真上に振り上げる。剣の軌跡の先に小竜の首があった。
「うおおおぉっ！」
雄叫びを上げて、剣に力を乗せる。鱗と、肉と、骨を切る感触が手にめりめりと伝わってくる。やがて、感触がふっと失われ、血を吸った剣が空を薙いだ。

小竜の首が地面にどさりと落ちる。まだ口の中には炎が残っていた。胴体がゆっくりと地面に倒れ、そして、首もろとも姿を消した。

肩で息をしながら、僕は構えを解いた。

「ナユタ！　大丈夫!?」

駆け寄って来るクレハに、僕は「大丈夫」と答え、そしてノイを見た。

「ノイ、今の桃色の光は君がやってくれたんだよね？　あれはなんだったのかな？」

「〝魔法〟なの」

「〝魔法〟？」

聞いたことのない言葉。

「そう。〝星の力〟を力に変える技なの。〝星の力〟をぎゅーっと集めて、塊にするの！」

「凄い！　そんなことが出来るんだね！」

「ノイは万能管理者なの！」

自慢げにそう言って、ノイはくるりと回った。けれど、すぐにしゅんとなる。

「ホントはもっといろんな〝魔法〟が使える筈なんだけど、今は〝星の力〟の流れがおかしなことになってるから、これくらいしか出来ないの。あと、多分一日一回くらいしか使えないの」

「いやでも、おかげで助かったよ。本当にありがとう」

すると、ノイは「どういたしましてなの！」と笑った。

「あ！　ナユタ怪我してるじゃない！」

クレハが近づいて来て、僕の左腕を持ち上げた。見ると、二の腕の服が裂け、血が滲んでいた。

「さっき転んだ時、枝でも刺さったんだよ。魔獣に付けられた傷じゃない。たいしたことないよ」

「駄目よ！　消毒して布をあてるから、服を脱ぎなさい。出発するのはその後よ」

「はいはい……」

一度言ったら聞かないことを知っているので、僕は逆らわない。道にはみ出している大樹の根に座って、片腕を服から抜いた。クレハが手際の良い動きで水筒の水で布を湿らし、傷口を拭いていく。

水が染みると、思ったより痛かった。気を紛らすためにじりじりと肌を焦がす太陽を見上げる。

「それにしても、暑いね、ここは」

「あ、そうそう、それもあったわ。ねえ、ノイ」

「はいなの」

クレハは傷の処置をしながら、ノイに聞く。

「この土地に育っている植物と、気候が全然合ってないのはどうしてなのかしら？　それも、〝星の力〟のせいなの？」

「多分、そうなの……」

ノイは空中で肩を落とし、うつむいた。

「まだオルタピアの〝マスターギア〟は奪われていない筈だけど、〝テラ〟全体の〝星の力〟の均衡が崩れているから、ここの気候もおかしなことになっちゃってるの。魔獣が出てきたのだって、多分そのせいなの」

「〝星の力〟の均衡が崩れているから、魔獣が……？」

それは前にもノイに聞いた話だ。けれど、何か、ひっかかる物があった。魔獣は僕たちの世界にも生息している。歴史書によれば、〝大洪水〟の後から現れたそうだ。でも、つまり、それって、どういうことなんだろう？

頭に浮かんだ疑問について、それが何故疑問なのかが分からない、というふわふわした感覚。思考がまとまる前に、ノイが何かを思いついたという風に顔を上げた。

「……あ、ちょっと待っててなの！」

そう言って、手を広げ、両手を前に伸ばす。すると、たちまちノイの周囲に、半透明の文字や図が幾つも浮かび上がった。先に〝アストロラーベ〟の前で見たような光景だ。ノイが両手を動かすと、その動きに合わせて浮かび上がっている絵が切り替わっていく。

「私は〝アストロラーベ〟を遠隔操作出来るの。大陸全部は無理だけど、一部分くらいなら、気候を元に戻せると思うの。……これで、よし、と」

急に、肌を焦がす日差しが弱まったような気がした。見上げても、別に太陽が雲で陰ったとかではなかった。ただ、照りつける光が、先よりも優しくなった気がする。

「気温も調整出来るの」

ノイが右手をちょんと動かすのと同時に、すっと、暑さがやわらぐのを感じた。汗が引いていく。クレハが巻いてくれる包帯の上を乾いた風が通りすぎて、気持ちが良かった。

僕はノイを見上げる。

「凄いよノイ！　こんなことが出来るなんて！」

「えへんなの！」

小さな胸を目一杯張るノイ。けれど、すぐに困った顔になる。

「でも、これはあくまで一時的な処置なの。ゼクストから全ての〝マスターギア〟を取り返さないと、いずれは〝テラ〟の全ての生物が滅んでしまうの……」

そう言って肩を落とす。包帯を巻きながらクレハが憤った。

「こんな貴重な種を絶滅させてしまうなんて、絶対に許せない！　そうでしょナユタ！」

「そうだね。こんな美しい世界を壊させる訳にはいかない。シグナを探すのは当然として、なんとかゼクストから〝マスターギア〟を取り返せないか、考えてみよう」

ノイはハッと顔を上げ、目を大きくして僕とクレハを交互に見た。
「クレハ、ナユタ……ありがとうなの！」
「ま、お礼は上手くいってからね。さ、ナユタ、もう良いわよ」
包帯の端を縛ったクレハが、確かめるように僕の腕を軽く叩く。僕は服を着直して、立ち上がった。
「よし、じゃあ改めて、出発しよう！」

ひたすら歩いて、すぐに夜が訪れた。
僕は丸太に座り、たき火の明かりをぼんやりと見つめていた。煙が木々の間を抜けて、頭上に僅かに見える夜の空に向かって立ち上っていた。
小竜を倒した後は、特に問題も起こらず、ひたすら森の中に続いている道を進んだ。時折野生動物の群れを見かけたくらいで、魔獣とも遭遇せずに済んだ。道はほとんど使われていないらしく、どこも雑草に覆われ、所々倒木が塞いでいたりもしたけど、どちらに進んで良いのか分からなくなるという程ではなかった。
日が暮れる前に、道から外れて木々の中に入り、野営の準備を始めた。今日はここで休む。ノイによれば、このあたりで旅程の半分くらいとのことだった。
完全に日が沈んでしまうと、森は暗闇に覆われる。頭上には星の瞬きがあるけど、その明かりは木々に吸いこまれ、地面までは届かない。それが森の暗さだ。
この暗闇の中では、夜明けまで燃やし続けるたき火だけが、唯一の明かりになる。それに、強い火の近くには、動物も魔獣もやって来ない。
「ナユタ、どうかしたの？」
声に振り向くと、思いの外近くに、クレハの顔があった。隣に座ってこちらを見つめている。ちろちろと揺らめく炎が、彼女の頬を赤く染めていた。
そんなに長く会っていなかった訳でもないのに、やっぱり、前より綺麗になったように思えた。
「ん、何？」
怪訝な顔をしたクレハに、僕は慌てて取り繕う。
「ああ、いや、ちょっとぼんやりしてただけ。ノイは？」
「小さなハンモックを作ってあげたら、喜んで飛び乗って、すぐ寝ちゃった」
「寝ちゃった？　管理者って睡眠が必要なのかな？」
「そういえばそうね……。でも、塔の遺跡では気絶してた訳だし、それだけ人間そっくりに作ってあるってことじゃないかしら」
そう言って微笑む。炎に照らされた顔はハッとする程、艶を感じさせた。クレハは不思

議そうに、
「さっきからナユタ、急に黙るわね。なんなの？」
「ええと、なんだかクレハは、〝テラ〟に来てから生き生きとしてるように見えるなって」
「何よそれ。いつもはそう見えないってこと？　いつもは怒ってばかりって言いたいの？」
上目遣いで睨まれる。けれど、すぐに小さく息を吐き、上空を見上げた。
「でも、そうね。この世界にまだこんな場所があった。絶滅した筈の植物や動物も生き残っていた。植物学者の卵としては、興奮するなって方が無理よ」
「いや、そういうことじゃなくて——」
そこで言いよどむ。
「じゃなくて？」
クレハが顔を覗き込んでくる。大きな瞳に炎が映り込んでいた。その煌めきは、普段の彼女よりも活力に溢れていて、吸い込まれそうになる程に美しかった。
僕はなんだか体が熱くなって、何を言いたかったのかもよく分からなくなってしまった。
無意識に、クレハが夕飯前に包帯を巻き直してくれた二の腕に手を当てた。
すると、クレハが心配そうな表情になる。
「傷が痛むの？」
「あ、いや、そんなことはないよ。もう痛みもほとんどないんだ」
それは本当だった。僕が笑うと、クレハも表情を和ませた。
「〝テラ〟では、傷が早く治るみたいね。〝星の力〟が私たちの世界よりも強いのかも」
上手く話題が逸れてくれた。
あのまま、クレハに見つめられ続けていたら、僕はとんでもないことを口にしてしまっていたかもしれない。それがなんなのかは、よく分からないのだけど。
包帯に触れたまま、頭に浮かんだことを口にする。
「でも、考えてみると、なんだか不思議だね」
「何が？」
「体が傷を負っても、いつのまにか元に戻るだろ。剣の刀身が折れたら、それが勝手に直るなんてあり得ないじゃないか。これって、不思議だなって」
クレハは目をまたたいてから、少し楽しげに答えた。
「それはね、自然治癒力って言うのよ」
「自然治癒力？」
クレハは人差し指を伸ばして、包帯が巻かれた僕の腕をそっとなぞった。
「人間の体はね、自分自身が本来どういう形をしている物なのかってことを知っているの。それで、体の一部が傷ついたり、壊れたりした時、元の形に戻ろうとする力が働くのよ」
「へえ……」

「まあ、限度はあるわよ。切り落とされた胸がまた生えてきたりはしないしね。それに」
「それに？」
すると、それまで楽しげに話していたクレハが、急に責めるような目つきに変わる。
「自然に治るからって、体を傷付けていい訳じゃないのよ。馬鹿兄貴もナユタも、自分の体を大事にしないから、そんなに簡単に怪我を負っちゃうのよ！」
また雲行きが怪しくなってきた。次の話題を探そう。
「ええと、そういえば、さっきノイと何を話してたの？　僕が火を起こしている時、話し込んでただろ？」
「話を逸らそうとしてるわね……。ま、いいけど」
小さく息を吐いた後、クレハは丸太の上で膝を抱え、頭を乗せた。そして、物憂げに炎を見つめる。
「〝テラ〟の四つの大陸のどこかに、ユピナ草が群生していないか、調べてもらったのよ」
「ユピナ草だって!?」
思わず丸太から腰が浮き上がった。
「そう。これだけ沢山の希少種が残っている〝テラ〟なら、ユピナ草の生息地もあるんじゃないかと思って、ね」
ユピナ草は、姉さんや世界中の人たちが患っている不治の病〝奈落病〟の特効薬の材料になる。僕らの世界では絶滅した種だけど、もし〝テラ〟にそれがまだあって、持ち帰ることが出来れば、沢山の人を、何より姉さんを救うことが出来る！
興奮を抑えきれない僕に対し、たき火を見つめるクレハの瞳は、物憂げなままだった。
恐る恐る聞く。
「なかった、の？」
「ノイに〝アストロラーベ〟を経由して調べてもらったら、名前は違うけど、恐らくユピナ草だろうと思われる植物の記録があったの」
「じゃあ！」
「でもね」
クレハは短く言葉を切った。
「何百年も前に、絶滅していたのよ。自然淘汰によって」
体から力が抜けるのを感じた。やっぱり、駄目か。
「……そうか」
「ごめんね」
申し訳なさそうにするクレハに、僕は力の入らない笑顔を作って手を振った。
「いや、クレハが謝る必要なんてないよ」
クレハは軽く僕を見上げた後、たき火の方に顔を向け、疲れたように大きく息を吐いた。

風が少し吹いて、たき火の炎が大きく揺れた。

「私たちの世界では、ユピナ草は愚かな人間の乱獲によって絶滅した。〝テラ〟では、それがなかったのに、やっぱり絶滅した。ユピナ草は、自然の摂理によって世界から消える運命にあった植物なのかもしれない」

クレハの言葉は、たき火の周りを通って木々の間にはびこる暗闇に吸い込まれていく。

「私たち人間も、〝奈落病〟を克服することが出来ずに、自然の摂理としてこのまま世界から消え去る運命にあるのかしら。ユピナ草のように……」

声は小さくなり、最後は囁いているかのようだった。

炎に照らされる伏し目がちの濡れた瞳を見て、思わずクレハを抱きしめたい衝動に襲われる。僕は動きそうになる体を押しとどめて、敢えて茶化した風に声をかけた。

「珍しいね。クレハがそんな弱気な言葉を口にするのは」

クレハは視線だけこちらに向けた。少し、寂しそうな瞳をしていた。まるで、僕が抱きしめなかったことを責めているようにも見えたけど、それは気のせいだろう。

やがて、クレハは小さく笑った。

「そうね。私らしくないかも。ちょっと疲れたのかな」

クレハは立ち上がり、大きく伸びをした。

「先に寝るわ。おやすみ、ナユタ」



「ああ。おやすみ」
クレハが毛布の所に向かい横になる。僕は頭上を見上げた。
木々の隙間から、僅かに星空が見える。残され島から見えるのとは、ところどころ星の位置が違って見えた。
「これが、〝失われた星空〟の星空なのか……」
父さんと母さんがずっと見たがっていた星空を、今僕は見ている。けれど、やらなければならないことが沢山あるせいか、今は、あまり昂揚感を感じなかった。
狭い視界の範囲には、二つある月のどちらも姿を見せていなかった。今日は新月ではなかった筈だけど、月の満ち欠けは観測する場所によって変わる。
「それとも、〝テラ〟では月は見えないのかな？」
遠くで、梟に似た鳴き声が、静かに響いた。

「大丈夫？」
「簡単よ。私を誰だと思ってるの？　よっと」
クレハは、川の中に点在する石から石へと軽快に飛び移り、対岸で待つ僕の方に近づいてくる。岸の側は流れが強く、水の中を歩くのは危険だった。
「あっ！」
最後に足を着いた石がぐらりと動き、クレハの体勢が崩れる。
「クレハ！」
「だから大丈夫って言ってるでしょ！」
一瞬体をかがめたクレハは一気に石を蹴り、僕の方に飛び込んできた。慌てて、クレハの体を受け止める。軽くて柔らかな体を胸に抱いて、体がかっと熱くなるのを感じた。
ゆっくり地面に下ろすと、クレハは口元を綻ばせて僕を見上げた。
「ね、私にだって出来たでしょ？」

一夜明けた次の日も、大きな障害はなく、僕たちは先へと進んだ。途中、甲虫が巨大化したような魔獣や、植物に擬態していた魔獣と遭遇したりもしたけど、基本に忠実に戦い、倒していった。
昼食を終えて午後、道が大きな川にぶつかった時、問題が発生した。ノイが言うにはここには本来橋が架かっている筈なのだが、その橋がなかったのだ。両岸に残骸のような物がひっかかっていたので、大水で流されたか、木が朽ちたのだろう。
僕一人ならともかく、クレハを連れて川を渡るのは危険だと思い、別ルートをノイと検討していたら、クレハが言い出した。

「私だって川くらい渡れるわよ。ナユタがきっちり補佐してくれるんでしょ？」と。

それで、ようやく今、川の反対側まで渡ってこられたという訳だ。道はまだまだ続いていて、森はますます鬱蒼と茂っている。

「少し休憩しよう。濡れた服も乾かした方がいい」

岩の上を選んで渡ってきたとはいえ、所々は川の中を通るしかなく、僕もクレハも太ももから下がびしょ濡れだった。

「そうね……」

クレハは体をひねって足回りに怪我をしてないか確認してから、こちらを向く。

と、その目が驚愕に見開かれ、震える指を僕の背後に向けた。

「ナユタッ！　あそこ！」

「!?」

振り返ると、そこに、それがあった。

木々の隙間から、巨大な二つの瞳が、こちらを見つめていた。魔獣か!?

「クレハ、後ろに！」

反射的に構えを取り、剣の柄を握った。クレハが背中にしがみつく。

それは顔だった。僕の身長の二倍はありそうだ。こちらを見下ろす真っ黒な双眸も、片目だけで僕の頭より二回りは大きい。裂けたように開いている口には四角い歯がずらりと並び、その一本一本が刃のように光って見えた。

こんな大きな生き物を、僕は生まれてこの方、見たことがなかった。勝てるのか？

体中が緊張感に満ちていく。ゆっくり剣を鞘から抜き、切っ先をその顔に向ける。

けれど、巨大な顔はさっぱり動く気配がなく、それに魔獣特有の気配もしなかった。

「……なん、なんだ？」

すると、ノイがふわふわと僕の前に飛んできて、バタバタと手を振った。

「ナユタ！　大丈夫なの！　あれは魔獣ではないの！」

「え？　どういうこと？」

「あれは大陸の守り神であり、神殿を守る神像なの」

「神……像？」

「……あれ？」

言われてから目を凝らし、ぼんやりとしか見えていなかった巨大な顔を見直す。

僕の身長の倍はありそうなその顔は、小さな石を積み重ねて作られていた。真っ黒な目は、単にそこに穴が開いていただけだった。歯が動いて見えたのは、並んだ歯に絡みついた蔦が、風でなびいているのを見間違えたようだ。

「なんだ、人形なのか……」

緊張感が解け、どっと疲れが体にかかる。背中にしがみついていたクレハが、そっと離れ、少し顔を赤くして横を向いた。

「ただの人形じゃないの！　ね、こっち来て！」

ノイがそう言って道を外れ、神像とやらの方に飛んでいく。僕たちは後に続いた。

近づくと、巨大な顔の背後に、さらに巨大な胴体が横たわっているのが分かった。胴体も石を積み重ねて作られていて、その大きさに合った鎧を着せられている。胴からは、一つの岩から切り出した長い長い腕が伸び、地面に横たわっている。三日月のように弓なりに尖ったその腕は、人間の骨が剥き出しで転がっているようにも見えた。

「腰から下がないね」

「元々そういう構造なの。この神像の名前は〝双たる巨岩〟。望まれない侵入者を排除するのが役割なの」

巨大な顔の前で、ノイが説明する。

「侵入者を排除だって？　じゃあ、これは動くの？」

「そうなの！」

「でも、これは、動いてないわよね？」

僕の後ろを警戒しながらついてきたクレハが言う。

確かに、目の前に横たわる巨大な人形は、生きているようには見えない。恐らく、何十年もの間、ここに横たわっていたのだろう。首の付け根や腕の関節には土が詰まり、胴体に装着された鎧は全体が苔に覆われていた。

「〝双たる巨岩〟は双子の神像なのだけど、こっちの方はずっと昔に壊れてしまったみたいなの」

「え、つまり、こんなに大きいのがもう一体いるってこと？　そっちは動いてるの？」

「わからないの。もう一体も、今は壊れてるかも」

「見てみたいな……。これが動いているところを」

僕は巨像に目を奪われながら呟く。

やっぱり〝テラ〟の技術は凄い。こんな巨大な人形を自由に動かすことが出来るのだから。まあ、まかり間違ってもこれと戦うのは正直勘弁してもらいたいので、遭遇しないに越したことはないけど。

もう少し近くで構造を観察したいと思い、草に分け入って神像に近づこうとした。

その時。

「きゃあっ！」

クレハの叫び声に瞬時に振り向く。

立ち尽くすクレハの視線の先、十歩ほどの距離の草むらが割れ、そこに黒い塊が現れる。魔獣だった。両手で抱えられるくらいの大きさ。全身が堅そうな甲羅で覆われ、二つの瞳

がこちらをじっと見つめている。クレハは、魔獣を凝視したまま動かない。
やがて、甲羅の後ろ半分が膨らみ、その下から四枚の羽が現れ、広げられる。羽が細かく羽ばたき、魔獣は空中に浮かび上がる。
魔獣は、人の肩ほどの高さまで浮かび上がった後、長く尖った嘴をクレハの方に向けたまま、力を溜めるように羽の勢いを上げた。僕は思わず叫んだ。
「逃げろ、クレハ！」
駆け出しながら叫ぶのと、魔獣がクレハに飛びかかったのは同時だった。
クレハは恐怖の為か、その場で動けずにいた。
剣を振り上げ、地面を蹴る。けれど、空を飛ぶ魔獣の速度の方が遥かに上だった。
硬直したままのクレハの眼前に魔獣が迫る。間に合わない！
「クレハッ！」
思わず名前を呼んだその時、頭上の木々がガサリと音を立てたかと思うと、いつの間にかクレハの目の前に、片刃の剣を持った男が下り立っていた。
直後、剣が一閃する。鋭い音と風圧が一気に広がり、僕の所まで届いた。
魔獣はクレハに辿り着く直前に真っ二つになり、片方ずつ地面に落ち、消えた。
剣の主は、刃に付いた血を払い、こちらを向いた。
「大事な物を守るのに、まだまだお前は弱い。ナユタ」

それは、よく知る顔だった。
「シグナっ⁉」
「よお、久しぶりだな」
シグナはそう言って笑顔を見せた。服が多少汚れていたけど、ゼクストたちを追いかけて〝転位門〟に飛び込んだ時と、何も変わらないシグナがそこにいた。
「無事だったんだね！」
「あったりめえよ。俺が誰かに倒されるとでも思ってんのかよ」
剣を鞘にしまいながらこちらに歩いてくるシグナ。と、後ろからクレハが叫ぶ。
「こんの、馬鹿兄貴！　今までどうしてたのよ！」
「……ナユタ、なんでこいつまで連れてきたんだ？」
シグナはクレハに少しだけ目をやり、微妙に困った顔をして頭を掻いた。
「まあ、色々あって……」
「ゴチャゴチャ言ってんじゃないのよ！　まったく心配かけて！」
言いよどんでいるうちに、クレハが駆け寄り、腰に手をあてて怒りだす。
シグナは呆れた顔を妹に向けた。
「お前、今俺が助けてやったんだって、分かってんのか？」
「それはそれ、これはこれよ！」

さっきまで恐怖に囚われていた顔が、シグナを見た途端にいつものクレハになっていた。僕とシグナは思わず笑ってしまう。

「な、何よ！　なんで笑ってる訳!?」

「いや、お前らしいなと思ってな」

柔らかい表情をクレハに向けるシグナ。あまり、彼が見せない表情だなと思った。そして、クレハの銀髪の上に大きな手を乗せた。

「心配かけて、悪かったな」

クレハの瞳が一瞬大きくなる。そして、慌てたように後ろを向いた。顔が隠れる寸前、目尻に涙が浮かんでいるのが見えた。

「もう、知らないわよ馬鹿兄貴！」

怒っているその声は、けれど、涙を堪えているのだと分かった。僕とシグナはちらりと視線を交わし、気づかなかったフリをすると決めた。

シグナが僕の体を眺めて大げさに言う。

「それにしても、お前ら、服がびしょ濡れじゃねえか」

「ああ、川を渡ったから」

「とりあえず、乾かした方がいいな。つもる話はその後だ」

僕が火を起こしている間、クレハはノイと一緒に川に水を汲みに行った。魔獣が出る気配もないし、距離も離れていないからそれほど心配する必要はないだろう。

あたりの枯れ木が少し湿っていて、なかなか火種が枯れ木に燃え移らない。

「ねえ、シグナも火付け手伝ってよ」

枯れ木と格闘していた僕が顔を上げると、シグナは向かい側の木の根元に腰掛け、森の奥の方をぼんやり見つめていた。

「なあ、ナユタ。〝マスターギア〟は、誰が持ってる？」

「え？　〝マスターギア〟を、知ってるの？　シグナ」

「まあ色々あってな。あいつらを追いかけてる間に、色々分かったんだよ。あいつらが何をしようとしているのか、とかもな」

「ホントかい!?」

顔を上げてシグナを見る。シグナは、視線だけを僕に返し「ああ」と答えた。

それは、ノイが喋れず、僕が知りたかった情報だ。ゼクストたちの目的が分かれば、それを止める方法も分かるかもしれない！

「教えてよ！　あいつらの目的を！」

「その前に〝マスターギア〟の本物を見せて欲しいんだ。誰が持ってる？」
「僕だよ。ちょっと待って」
懐に手を伸ばし、丸い円盤を取り出す。
「ほら――」
差しだそうとした時、〝マスターギア〟はすっと僕の手から引き抜かれた。
いつの間にか、シグナがすぐ側に立っていた。円盤を持ったまま、僕を見下ろしている。
僕はなかなか火種が燃え移らない枯れ木と、シグナの顔を交互に見た。
「シグナ？」
鋭く静かな瞳を向けていたシグナは、円盤を手に乗せて、それを見つめた。
「こいつはな、鍵なんだよ」
「鍵？　なんの？」
「〝星座球〟への道を開き、それを起動させる為のさ。ゼクストの狙いはそれなんだ」
シグナが急によく分からないことを言い出した。枯れ木はまだ火がつかない。別の枝に変えようか。あれ、どうしてシグナはゼクストの名前を知ってるんだ？
積んであった枝を漁りながら、僕は聞いた。
「〝星座球〟ってなんだい？　それに起動って？　起動すると何が起きるんだい？」
沈黙。返事がない。枯れ木から顔を上げると、シグナの姿がなかった。

「シグナ？」
「それはな――」
声はすぐ後ろから聞こえた。振り返ると、シグナが僕の真後ろに立っていた。太陽を背にしているせいで、シグナの顔がよく見えない。けれど、二つの瞳が怪しく煌めいて見えた。
シグナは短く言った。
「――『再創世』が、起きるのさ」
直後、首筋に強い衝撃を感じる。剣の鞘が打ち付けられたのだと気づいた頃には、もう体が動かせなかった。
視界が白く染まっていくのを感じながら、組み上げた枯れ木の中に倒れ込む。まだ火が付く前で良かった、と、どうでも良いことが頭に浮かんだ。
遠くで、シグナの声が聞こえた。
「元の世界に戻れ、ナユタ。もうお前に出来ることは、何もないのだから――」
どういう意味だ、と聞き返したかった。けれど、唇も動かせなかった。
やがて、考えることも出来なくなり、意識は真っ暗な海に落ちていった。

「――ユタ、ナユタってば！　ねえしっかりしてよ、ナユタ！」
肩を強く揺さぶられて、まぶたを開けた。ゆっくりと視界が戻ってくる。
泣きだしそうなクレハの顔が真上に見えた。
「……クレハ」
「ナユタ！　良かった……！」
木の根元に寝かされていたようだ。クレハの手を借りて起き上がりつつ、まだぼんやりとした頭で、何があったのかを考える。
徐々に気絶する直前のことが思いだされ、気分がずん、と重くなった。
「……シグナは？」
僕が聞くと、クレハは「いないのよ！」と叫んだ。
「私たちが戻ってきたら、兄さんはいなくて、ナユタが枯れ枝に頭から突っ込んでたの！　ねえ、何があったの？　喧嘩でもしたの？」
喧嘩の方がまだ良かった。心配そうに僕を見ているノイに言った。
「ごめん、ノイ。シグナに、〝マスターギア〟を持っていかれた」
「ええっ⁉」
ノイとクレハが同時に叫ぶ。クレハがまた僕の肩を掴んだ。
「どうして⁉　どうして、兄さんがそんなことを⁉」
「わからない。シグナなりの理由があるのか、あるいは――」
自分でも、それを口にするのは[redacted]だった。
「――シグナは、ゼクストの[redacted]についたのかも」
「そんな……！」
クレハの手から力が抜け、僕の肩からずり落ちていく。顔が青ざめていた。
「ノイ。シグナが、ゼクストは『再創世』をするつもりだって言ってた」
「『再創世』⁉　ホントなの⁉」
あまりに驚いたのか、ノイは一瞬飛ぶのを忘れて地面に落ちかけた。僕が手を差し出して受け止める。
「ごご、ごめんなの。でもでも、信じられない……」
「『再創世』ってなんなんだい？」
「ええと、『再創世』は[redacted]を一度[redacted]して、[redacted]を[redacted]と[redacted]することなの。それによって[redacted]は[redacted]になって全てが[redacted]――」
駄目だ。全然聞き取れない。
暫く必死に叫んでいたノイは、肩をおとしてしゅんとなった。
「ごめんなさいなの。これも人間には教えられない情報みたい……」
「なんでもいいんだ。直接説明しなくてもいい。『再創世』によって何がもたらされるのか

とか、話せることはないかい？」
　ノイは目をぎゅっとつぶって「ええと、ええと……」と考えた。そして僕を見る。
「それはとっても良くないことなの！　『再創世』が行われたら、もしかしたら、〝テラ〟も、ナユタたちの世界も、滅んでしまうかもしれないの！」
「滅んで、しまう？　〝テラ〟と、僕たちの世界が？」
「そうなの！」
　ノイは力強く頷くけど、僕にはなんのことやら分からなかった。
「ゼクストは、世界を滅ぼそうとしているっていうのか？　その為に〝マスターギア〟が必要なのか？　でも、どうして滅ぼすんだ？　一体、なんの為に？」
　それに、もしそうだとしたら――
　僕が口にしなかった言葉を、クレハが代わりに言った。
「その世界を滅ぼす『再創世』に、兄さんが協力してるってことなの？」
　ノイは言いにくそうに目を伏せる。
「そういうことに、なるの……」
「信じられないわ、そんなの……」
　力なげに呟き、うつむくクレハ。僕はクレハの肩に手を置いた。クレハは顔を伏せたまま、その上に自分の手を重ねる。

　僕は、シグナの言葉を思い出していた。
　――元の世界に戻れ、ナユタ。もうお前に出来ることは、何もないのだから――
　下ろしている手をぐっと握りしめる。あんな言葉、聞いてなんかいられない。
「……確かめなきゃ」
「え？」
　顔を上げるクレハを見つめる。
「僕は信じない。シグナがそんな恐ろしいことに手を貸してるなんて、思えない」
「ナユタ……」
「シグナは僕たちを元の世界に帰したがっていた。きっと、僕たちを危険なことに巻き込まないようにするためだ。僕には分かる」
　当然だ。何年親友やってると思ってるんだ。
「確かにシグナは今、ゼクストに協力しているのかもしれない。けれどきっとそれは、シグナなりの考えがあってのことなんだ。そうじゃなきゃ、ゼクストに操られてるんだよ。世界を滅ぼすなんて、そんなことにシグナが手を貸すはずがない。僕はそう信じてる」
　クレハの両手が、助けを求めるように、力なく、持ち上がる。僕はそれをしっかりと握

りしめた。クレハの手は冷たくて、震えていた。僕は続ける。

「僕は、シグナを連れ戻すまで、帰るつもりはない。クレハ、付いてきてくれるかい？」

クレハの瞳からは、今にも涙が溢れそうだった。けれど、僕の言葉に、ぎゅっと目をつぶり、こくんと、頷いてくれた。

「ありがとう。休憩を終えたら、出発しよう」

先に進むほどに木々の密度が増し、森はより深く、暗くなっていった。太陽の光も、葉の隙間を僅かに伝ってくるだけになり、心許なかった。道も、はみ出た木や草に覆われ、もはや道の役割を果たしていなかった。ただ、ノイによれば、神殿まではあと少しなので、迷わず行けるだろうとのことだった。

ノイは、横を歩くクレハととりとめもない話をしていた。ノイは最初クレハを「クレハ様」と呼んでいたし、どうもクレハのことが気になるようだった。

そしてクレハも、黙っているとシグナのことを考えてしまうのだろう。出来るだけ快活に、ノイの質問に答えていた。

今はクレハとシグナが残され島に来た経緯を話しているらしい。ノイが言った。

「じゃあ、二人は漂流して来たの？」

「ええ、五年前よ。どこかで船が難破して、私たち二人だけが残され島に流れ着いたんだろうって島の人は言ってる。まあ、覚えてないから、分からないんだけどね」

「覚えてないって、どういうことなの？」

「あのね、私もシグナも、残され島に流れ着くより前のことを、なんにも覚えてないの。記憶喪失ってやつ」

「ええっ！」

ノイはとても驚いたらしく、一瞬飛ぶのを忘れて落下しかけ、慌ててまた浮かび上がる。

「島とも大陸とも違う装飾の服を着てたから、もしかしたら〝失われた楽園〟から流れてきたのかも、なんて言う人もいたらしいわ。結局、父さんが私と兄さんを引き取って、今日まで育ててくれたのよ。だから父さんには、一生かかっても返せない恩があるの」

クレハは、右手に視線を落とした。木彫りの耳飾りが握られていた。それはいつもシグナが身につけていたお守りだ。塔の遺跡でシグナが仮面の剣士と戦った時に床に落ちた物を、クレハはずっと持ち歩いていたようだった。

急に、クレハは声を荒げた。

「あの馬鹿兄貴！　なんなのよ！　世界を滅ぼすですって⁉　父さんへの恩はどうしたのよ！　残され島の人たちがどれだけ私たちを支えてくれたのか分かっているのかしら！　何をどうしたら、滅ぼそうなんて考えられるのよ！　見つけたら説教してやらなきゃ！」

耳飾りを握った手が強く締まる。僕は苦笑しながら呼びかけた。
「強く握ると折れちゃうよ。クレハが作った物だけど、シグナのお守りなんだから」
「そうよ！　わざわざあの馬鹿兄貴の為に旅のお守りを作ってあげたのよ。なのになんで私が持ってるのよ！　ああもう許せない！」
なんだか怒りの矛先が色々な方向に向いているらしい。でも、さっきまでは憔悴しきっていたので、怒れるくらいには気力が戻ってきたのかな。僕は言った。
「シグナには、シグナなりの考えがあるんだと思う。信じてあげようよ」
すると、クレハは耳飾りを見下ろしていた瞳を上げ、不満げに僕の方を見た。
「ナユタは、なんであの馬鹿兄貴を、そんなに信頼できる訳？　不思議だわ」
そんな質問が返ってくるとは思わなかった。歩きながら考える。
「うーん、そうだな」
自然と頭の中に浮かんできたのは、あの時のことだった。僕は話し始める。
「三年前、父さんと母さんは〝失われた楽園〟を目指す探索隊の船団に参加して、帰って来なかった。船団の残骸が発見されたから、多分嵐に飲まれたんだと思う」
ノイにも分かるように、はじめから話す。
「突然両親を失って、僕の心はからっぽになった。毎日岬にある二人の墓の前に座って、日が暮れるまでじっとしていた。他のことは何もしなかった。いや、出来なかった。からっぽの心は、僕に何もさせようとはしなかった」
今でも、思い出せる。
潮騒の音を聞きながら、二人の墓をただ見つめている。あり得ないと分かっているのに、墓の脇から二人が笑いながら現れるんじゃないかと思いながら、ただじっと、そこに座っていた。
「その、僕のからっぽの心を救ってくれたのが、シグナだったんだ」
「兄さんが？」
クレハはこの話を知らなかったらしい。僕は頷き、続けた。
「いつものように岬でぼんやりしていると、そこにシグナがやってきた。そしてこう言ったんだ――」
「いつまでもオルバス師匠の言いなりになるのはうんざりだ。俺は自立に向けて金を稼ぐことにした。便利屋を開業する。ついてはナユタ。俺の仕事を手伝え。魔獣退治や力仕事は俺が担当するから、それ以外のめんどくせえ依頼はお前に任せる。たった今から開始だ。これから村を回って便利屋の宣伝をするから、お前も一緒に来い。ナユタ、言っておくがな、お前に選択権はないぞ」

「――ってね。ひどい話だろ？」

僕のシグナの物まねはなかなか似ていたようだ。クレハは思わず吹き出して、暫く笑っていた。今日初めて、クレハが笑顔を見せてくれた。

「兄さんが言い出しそうなことだわ。きっと、また父さんと喧嘩でもしたんでしょうね。いつもそうなんだから」

「多分ね。でもそれはシグナの動機の半分なんだよ」

「半分？」

怪訝な顔をするクレハに、僕は頷いた。

「便利屋だからね、なんでもやったよ。スクルプさんの所の牛小屋の柵を直したり、村長さんの腰を朝昼晩揉んであげたりとかさ。グルズさんに『宿屋の新メニューを作るから珍しい食材を見つけてこい』って言われて、三日三晩沖釣りしたこともあったっけ」

毎日、目が回るような忙しさだった。休む暇なんかなかった。

「シグナが調子に乗って次から次へと依頼を引き受けてさ、そのくせ自分は魔獣退治の依頼だけ引きうけて一人で森に入っちゃうから、村の中のことはほとんど僕が対応したんだ。料金も小遣い程度で、たいした儲けにもならなかった。でも――」

「でも？」

「毎日体を動かして、村の人と接しているうちに、僕のからっぽの心が少しずつ、みんなの優しさで満たされていく気がしたんだ」

道に転がる石を乗り越えながら、僕は言った。

「そしてね、それこそが、シグナの狙いだったんだよ」

立ち止まり、驚いた顔を見せるクレハ。僕は微笑む。

「あの時、シグナが僕を便利屋に誘ってくれなかったら、きっと僕は何年でも岬の墓の前に座っていた。シグナが、あそこから僕を引きはがしてくれたんだ」

もしかしたら、村の人たちも、シグナの意図を知っていて、僕を元気にする為に色んな依頼を寄越してくれていたのかもしれない。

「おかげで、僕は両親の死から立ち直ることが出来た。シグナとみんなのおかげさ。島に戻った時に、今でも便利屋を続けているのは、その時のお礼のつもりなんだよ」

「そうだったんだ……」

僕はクレハの前に立ち、「だからね」と言った。

「シグナは、人の心が分かる優しい奴なんだ。世界を滅ぼそうとしているゼクストの言いなりになんかならないよ。何かシグナなりの考えがある筈なんだ。僕はそう信じてる」

昼間も言ったことを、僕は繰り返す。

クレハは、耳飾りを両手で優しく触った。

「……私も、兄さんを信じる」

「うん」

空を見上げると、そろそろ日が暮れようとしていた。もう少し進んだら、野営の準備をしよう。

星が出る程暗くはなっていなかったけど、月が一つ、大きく浮かんでいるのが見えた。



第5章

『再創世』の真実

NAYUTA NO KISEKI

Chapter 5

一夜明けた次の日、太陽が一番高い所に来た頃、僕達は神殿に到着した。

「これが、神殿か……」

「大きな建物ね……」

僕たちは思わず、目の前に建つそれを見上げた。

残され島の近くに落ちたあの塔の遺跡だって十分に大きかったのに、石造りの神殿はその更に一回りは大きな建造物だった。

オルタピア大陸の神殿は、まるで大樹のような形をしていた。中央に太い幹が聳え、そこから枝が伸びるように小さな円筒の建物がくっついている。所々に瓦を敷いた三角屋根が置かれていて、枝の先に葉っぱの塊が載っているように見えた。

もしかしたら、かつてはその大樹に模した姿に合わせて、外壁は美しく塗装されていたのかもしれない。けれど、神殿は長い年月を風雨にさらされていたようで、その面影はなく、見えるのは天まで続く外壁の白色と、所々に見える瓦の茶色だけだった。大樹は、枯れていた。

目の前には長い石段があり、その先、随分と高い所に、入り口があるのが見えた。

「綺麗……」

クレハが、頭上の神殿を見ながら呟く。

空の彼方から、青い光の帯が神殿の頂上に下りてきている。庭園から送り込まれている"星の力"なのだろう。ここからでも見えるのだから、相当の太さだ。

見張り塔が幾つか、神殿に張り付くように置かれている。けれど、そこに誰かが立っていたのは遥か昔のことなのだろう。今は、人の気配はない。

神殿を構成する石はどれも長年の風雨で削れ、汚れていて、もの悲しく見えた。

「ノイ、あそこは、昔は人が住んでいたのかな？」

「いいえなの。ナユタたちが来るまで、"テラ"に人間が足を踏み入れたことはこれまでなかったの」

ん？　ノイの言っていることが分からない。

「でもさ、あの建物は人が住む為の物だよね？」

「？　ナユタの言葉の意味が分からないの。"テラ"には人間はいないの」

今度はノイが不思議そうに首をかしげる。どうも会話が噛み合わない。

すると、クレハが話に入ってきた。

「前から疑問だったんだけど、ノイは、今まで人間と会ったことがないのよね？」

「そうなの。あなたたちが初めてなの」

「じゃあ、ノイを作ったのは誰なのかしら？　ノイだけじゃなくて、あの神殿や〝デストロラーベ〟は、誰が作ったの？」
「あっ、なるほどなの！　意味が分かったの！」
ノイは顔を輝かせてくるりと回り、自慢げに胸を張った。
「ノイを作ったのは〝ミトスの民〟なの！」
「〝ミトスの民〟？」
クレハが首をひねる。僕も聞いたことがなかった。
「それは人間ではないの？」
「違うの！　見た目はあなたたちと同じだけど、人間とは違うの！」
「じゃあ、なんなの？」
「それは[redacted]、[redacted]なの！」
「またそれなのね……」
クレハが呆れたようにため息をつく。どうやら〝ミトスの民〟とやらも、人間には教えられない情報らしい。
「とにかく行こう。ゼクストも、シグナも、きっと中にいるよ」
「ええ」
僕は逸る気持ちを抑えて階段に向かい、最初の段に足を伸ばした。

その時。
「待て」
冷たい声が、頭上から響く。
同時に、猛烈な殺意が一直線に向かってくるのを肌が感じ、反射的に後ろに飛ぶ。
直後、たった今まで僕が立っていた場所に、背丈ほどもある長い大剣が突き刺さった。
衝撃と共に、剣先によって砕かれた階段の石が欠片になって周囲に飛び散る。その幾つかが体に当たるも、僕は動けない。死の恐怖が、体を支配していた。
地面に刺さる、磨き上げられたその刃に、唖然とする僕の顔が映り込んでいる。
「ナユタ、あそこ！」
クレハの声で我に返り、階段の上方を見上げる。顔の半分を覆う仮面をつけた男が、そこに立っていた。いつからそこにいたのか、いつ剣を投げつけてきたのか、僕には見えていなかった。
「……セラム」
僕が呟く。塔の遺跡で、ゼクストと一緒にいたあの剣士に間違いなかった。
セラムは階段を一歩ずつ、ゆっくりと下りてくる。その度に、肌が相手の持つ殺意を感じて、熱くなった。
仮面の下の口が開く。

「何故、その名を知っている」
「私が教えたの」
ノイが気丈に答える。
「こんなことはおかしいの、セラム――」
「黙れ、ノイ」
ノイは硬直したように喋るのを止める。セラムは僕たちの側まで下りてきて、地面に深々と刺さった大剣を造作もなく引き抜いた。そして、まるで城を守る門番のように、自身の前に剣を構えた。
そして、仮面の隙間から僅かに覗く冷たい瞳が、僕を見下ろす。
「神殿は、〝ミトスの民〟のみが立ち入りを許されている。人間はここより先には進めない。これは警告だ。死にたくなければ、帰れ」
冷たく、心に突き刺さるような声。でも、ここで引き下がる訳にはいかない。
「友達が、この中にいる筈なんだ。僕たちは、彼を連れ戻さなきゃいけない」
「警告は行った」
セラムは階段を数歩上がり、距離を取って構える。反射的に僕も剣を抜いた。
凍りついたように動かない瞳が僕を見据え、そして言った。
「我が名はセラム。ゼクスト・ジ・キュリアス・ドミナドールの息子、セラム・イル・オルディーン。〝ミトスの民〟の使命を果たすべく、参る」
名乗り終えると同時に、セラムは階段を蹴って跳び、大剣を上段から振り下ろす。僕は下段から振り上げ、垂直に刀身をぶつける。耳障りの悪い金属音が、周囲に響き渡る。
「えっ!?」
その瞬間、僕は思わず声を漏らした。大剣と刀身を合わせたその瞬間、体の中で何かがざわつくのを感じた。
交差する剣を押し合いながら、今の感覚がなんだったのかを考える。考えてしまう。その一瞬、思考が目の前の剣士から逸れた。
次の瞬間、仮面の下の口元が怒りに歪んだ。まるで、思考を逸らした僕を責めるように。
「うおぉっ!」
セラムが叫び、大剣の重みが一気に増していく。このままここに立っていたら、剣もろとも真っ二つにされかねない。
僕は渾身の力を込めて剣を斜め上に押し返して大剣の軌道を逸らし、反対側に跳んだ。振り下ろされた大剣がまた階段に激突し、薄氷が砕けるように、石が割れる。
休む暇など与えられなかった。すぐに剣を持ち直したセラムが二撃目、三撃目を放ってくる。
階段の上という、ギリギリの間合いでそれを打ち返していく。足場の悪い所で戦っているにも拘わらず、セラムの動きには一切の迷

いがなかった。
　左右の足を別の段に置いているのに、剣に最大の重みがかかるように重心を維持し、剣を振るう度に立ち位置を変え、常にこちらの視界の外から斬りかかってくる。
　対する僕は、不慣れな場所での戦いに主導権を取れず、防御に回るしかなかった。地面に下りれば多少は不利が減るとも思うのだけど、セラムの攻撃が激しすぎて、僕は立ち位置を動かすことすら許されなかった。
　剣士は、斬り合いの中で相手の力量を推し量る。それは「勝てないと分かっている戦いはするな」というオルバス師匠の教えの一つだった。
　セラムの剣は、速度で斬る剣だった。あれだけの重量を持つ大剣を振りながら、力に任せて振り回すのではなく、最小限の動きで間断なく攻撃を繰り返し、反撃の隙を与えない。
　とても繊細な剣捌きだった。
　その時。先と同じざわつきが、体の奥の方から湧き上がってきた。前に会った時、セラムはこんな戦い方をしていたか……？
　より激しく繰り出される剣に、僕の疑問はかき消される。そして同時に、この仮面の剣士の実力を把握する。
　強い。この剣士の力量は、僕よりもずっと高い所にある。
　それは、負けるということだった。今はなんとか相手の攻撃を防いではいるけれど、何か一つでも間違えれば、こちらの命が失われるということだった。
　けれど、勝負を諦めて逃げるという選択肢は、不思議と思いつかなかった。
　背後にはクレハとノイがいる。この階段の先には、シグナがいるかもしれなかった。ここで諦めることは、僕には出来ない。その為には、攻めるしかなかった。
「とりゃあぁっ！」
　幾度目かの剣を受け止めた直後、重心が崩れるのを無視して剣に体重を乗せ、一気に押し返す。セラムは僕の行動を予期していなかったのか、堪らず一歩引いた。けれど、引いた足を置いた所は石段が崩れていて、セラムの体勢がわずかに崩れる。
　今だ！
　僕は大上段に剣を構え、セラムに向かって振り下ろした。勝った！
　――しかし。
「ちっ」
　その時、セラムは僕に向かって、確かに舌打ちした。
　直後、両足で崩れかけた石段を蹴り、僕の方に飛びかかる。同時に神速で振り上げられた大剣が、僕の渾身の一撃を、剣もろとも弾き飛ばした。
　空中を飛んでいく愛剣を目で追う余裕などなかった。目の前まで迫ったセラムが、振り

回した大剣の生む遠心力で自らを回転させ、僕の腹を蹴り飛ばした。

「ぐはっ！」

腹部に入った強烈な痛みで、息が止まる。

「ナユタ！」

クレハの叫び声。

体に力が入らず、蹴られた勢いのまま、階段から飛ばされ、地面に落下する。

背中に衝撃が走る。

すぐに起き上がろうとするも、セラムが僕の体の上に飛び下りて、両腕を踏みつけた。

「ぐああっ！」

僕の上に立ったまま、剣を真っ直ぐに下ろし、のど元に突きつける。

殺される。

けれど、僕はそれでも、セラムを睨み続けた。体をひねり、抜け出そうとあがいた。

仮面の下の瞳が、僕をまっすぐに見つめる。僅かに、それが揺らめいた気がした。

やがて、セラムは言った。

「……お前は、俺には勝てない。お前は、何も守れない。諦めて元の世界に帰れ」

ゆっくりと剣を引き、鞘に戻す。僕の腕から足を離し、背を向けた。

「それでも、諦められぬと言うなら、上ってこい。今度こそ、殺してやる」

そして、素早く階段を上ってゆく。

腕が自由になったのに、僕はセラムが神殿の中に消えるまで、地面に倒れていた。

「ナユタ！　大丈夫⁉」

駆け寄って来たクレハの手を借りて、僕は起き上がる。

「ありがとう、大丈夫だよ。それより、急ごう」

「え、でも……」

セラムが立ち去った方向と僕とを、不安そうに交互に見る。

地面に転がった剣を拾い上げ、鞘に収めながら、僕は今の戦いのことを考えた。

剣を合わせている時、湧き上がってきた感覚は、なんだったのだろう。戦いの最中セラムが見せた苛立ちは、なんだったのだろう。何より、何故、セラムは僕にとどめを刺さなかったのだろう。

——ある一つの思いが、僕の中に浮かびつつあった。それを確かめなきゃいけない。

その為には、ここで立ち止まっている理由なんて、一つだってなかった。

「ここまで来たんだ。あんな言葉くらいで諦める訳にはいかない。行こう、クレハ」

クレハは両手をぐっと握り、頷いた。

神殿の中の階段を幾つも上り、僕たちはようやく、目的地に辿り着いた。

「この先が屋上なの」

鉄の扉の前でノイが説明する。息を整えながら僕は聞いた。

「そこに〝マスターギア〟があるんだね？」

「そうなの！　屋上には台座があって、そこに設置してあるの」

「よし、行こう」

閂は既に外されていた。鉄の扉を押し開くと、太陽の光が差し、風が吹き込んでくる。まだ開ききらない扉の隙間からノイが屋上に飛び出していき、僕らもあとを追った。

屋上は大きな円形の広場になっていた。外に出るなり、僕は違和感に気づく。

「ノイ、〝星の力〟が、消えてるよね？」

「え？　……は、本当なの‼」

下から見上げた時、屋上に降り注いでいたあの青色の光の帯が、屋上のどこにも見受けられなかった。

広場の中央は石舞台になっていて、更にその真ん中に、大きな石の台座が置かれていた。台座の側に、男が二人いた。ゼクストとセラムだ。ゼクストは、両手で円盤のような丸い石を抱え上げていた。セラムは既にこちらに気付いていて、大剣を抜いていた。

「〝マスターギア〟なの！　台座から外したから〝星の力〟の供給が止まっちゃったの！」

「くそっ！」

僕は一気に駆け出し、鞘から剣を抜いた。距離は約三十歩。セラムがこちらに剣を向けたまま、ゼクストに何かを呟く。ゼクストが振り向き、褐色の顔をにやりと歪ませる。そして、傍らに置いていた杖を手に取り、天にかざした。

急に、辺りが暗くなる。僕は瞬時に空を振り仰いだ。

空に、巨人が、浮かんでいた。

石造りの人形だった。腰から上しかないものの、その背丈は大人の五人分は優にあると思えた。

「神像〝双たる巨岩〟なの！」

ノイが叫ぶ。確かに、森の中で見たのと同じ姿形をしていた。神像は神殿を守る双子の存在だと、ノイは言っていた。

突然空中に現れた神像は、ゼクストが杖を一振りすると同時に屋上に落下してきた。

轟音。土煙が立ち上る中、神像は石の床にめり込んだ両腕を持ち上げ、僕たちの方に広げた。まるで剥き出しの骨が繋がっているようにも見える腕は鞭状に長く、その腕の先には四本の、セラムの大剣ほどもある長く巨大な爪が伸びていた。

「ゼクストが神像を操っているの！」

確かに、神像たちがゼクストに近づくのを邪魔するように両腕を広げている。僕の

両腕を広げたよりもまだ大きそうな口ががばりと開き、目の位置にある二つの穴からは、邪悪な赤い光を放ち、こちらを威嚇している。
ゼクストは杖を下ろし、台座の向こうに姿を隠す。セラムもそれに続いた。
「待てっ！」
追いかけようとしたその時、神像が長い腕を高く持ち上げ、近づこうとする僕の頭上に振り下ろしてきた。広げられた四本の爪が眼前に迫る。
「って、うわっ！」
慌てて横に飛び退く。鋭く尖った爪が床に激突し、石畳を砕き、大きな溝を作る。もしあれを直接体で受けていたらと思うとぞっとする。
地面にめり込んだ手が再び持ち上がるよりも速く、僕は斜めに剣を構えて突進した。
「うおおぉっ！」
横に回り込んで、神像の腕に剣を叩き付ける。が、想像以上にその腕は硬かった。ガキンと音が響いた後、反動で剣が跳ね返され、それに体が持っていかれる。そこに、もう片方の腕が空間を薙いでくる。
「うわあっ！」
堪らず地面に転がると、拳一個分上を四本の爪が通り過ぎていくのが見えた。
そのまま一回転して起き上がり、戦法を考える。

神像の動きはそれほど速くはない。だから、注意していれば攻撃は避けられる。けれど、剣が効かないのでは倒しようがなかった。
「ナユタ！　神像の核を狙って！」
クレハと共に扉まで下がっていたノイが叫ぶ。
「口の中に赤い石があるの！　それが核なの！」
神像を見上げ、目を凝らす。四角い歯が並ぶ、真っ黒な口の奥の方で、不気味な赤色が揺らめいているのが見えた。
「あれか！」
勝つ方法は分かった。けれど、まだ戦法は定まらない。僕の身丈二つより上にある神像の口の中に剣を差し入れるのは簡単ではない。
交互に薙いでくる巨大な腕の攻撃を避けながら、僕はどうすればいいかを考える。
普通に考えれば、あの距離は届かない。だから普通じゃない方法を考えなきゃいけない。剣を投げるか？　駄目だ。仮に当たったとして、一撃で壊せる保証がない。もし倒せなかった場合、手元に剣がないのは自ら生を放棄するような物だ。
真下まで行けば、ギリギリ届くんじゃないか？　神像は四本の爪を地面に叩き付ける時、上体が大きく前に傾く隙があった。あの瞬間を狙えば、口に剣が届くかもしれない。よし、これでいこう。

右腕の攻撃をやり過ごしてから、直線距離で顔の真下に走り出した。

途端に、神像の左肘から先が僕の邪魔をするように進路を塞いだ。壁のような高さの腕に阻まれ歩みを止めると、すぐに右手の爪が迫ってきて、僕は慌てて後ろに下がる。

「向こうも、自分の弱点を分かってるってことか！」

神像の攻撃は緩慢ではあるけれど、僕の進路を的確に阻んでいた。このままではいつまで経っても近づけそうにない。この手も駄目だ。

どうする。考えろ。何か手がある筈だ。考えろ――

「……待てよ」

ふいに、森で見た、この〝双たる巨星〟の双子の片割れが頭に浮かんだ。蔓に絡まれ、関節に土が詰まり――

――そうだ！

「ノイ！」

背後に向かって叫ぶ。クレハに抱かれて扉の陰に隠れていたノイが驚く。

「なっ、何⁉　ナユタ！」

「〝アストロラーベ〟を使って、ここの気候を変えてくれ！　雪を降らすんだ！　吹雪を！」

一瞬ぽかんとしたノイは、けれど、すぐに目を見開いた。僕の意図が伝わったようだ。

「や、やってみるの！」

ノイは空中に浮かび上がり、目を閉じて両手を広げた。ノイの周りに光が集まる。

たちまち半透明の絵や文字が浮かび上がり、ノイはその中で複雑に手を動かした。ノイの動きに合わせるように、絵や文字が次々と切り替わっていく。

「管理者権限施行、規制設定解除、限界突破許可！　制御範囲をこの神殿屋上のみに設定！　ありったけの寒波を呼び起こすの！」

ノイがぼんやりと赤く光る。そして両手を天に掲げ、叫んだ。

「気候変動！　実行なのっ！」

ノイとその周りが眩しく光る。

変化は、すぐに起きた。

さっきまで青に染まっていた空に、染みが広がるように灰色の雲が湧き上がってくる。急に空気が冷たくなり、体がぶるりと震える。

構えた剣の上に、ちらり、と雪の粒が落ちた。直後に強い風が吹き始め、瞬きの後には視界が吹雪に染まっていた。

神像が吹雪の中で両腕を大きく振る。自らの体に降り積もる雪を払いのけようとしているのだろう。しかし、吹雪の勢いの方が強く、神像の体が徐々に白に染まっていった。

そして、やがて、僕の期待していたことが起きた。

なおも振り回している神像の両腕の動きが、徐々にぎこちなくなってきたのだ。

肩や肘の関節に、雪が詰まり始めている。あれが邪魔で、腕が上手く動かないのだ。無理に動かすと雪を突き固めることになる。そして空いた所に更に雪が入り込んでくるので、腕の動きはどんどん緩慢になっていく。

ついに、ほとんど動かすことが出来なくなった腕が、石畳の上に投げ出された。床に降り積もっていた雪が、ぱっと飛び散った。

「今だ！」

僕は神像のだらしなく垂れた爪に飛び乗り、それが動き出すよりも早く再度跳躍して、長い腕に着地した。そして、その上を一気に走り出す。

「ナユタ！」

クレハの声を背中に受けながら、腕の上を駆け上る。神像の顔がこちらを向く。大きく開いた口の奥。不気味に光る赤い石が見えた。

二の腕の付け根で跳躍、神像の口の中に飛び込む。そのまま、自分の速度を全部剣に乗せて、赤い石に突き刺した。

堅い手応えが、剣から両腕に伝わる。剣先から拳二つ分まで赤い石に突き刺さった。神像が大きく体を捻り、僕を振り落とそうとする。

「無駄だっ！」

渾身の力を込めて、剣を押し込む。めりめりと、妙に生々しい感触を伴って、剣が赤い石の中にめり込んでいく。

「うおりゃあっ！」

最後の一突きで、石を貫通した。

赤い石が、その割れ目から一瞬光を放ち、そして、粉々に砕け散った。

「やった！」

途端に、神像が、がくん、と体を前に傾ける。そして、糸の切れた操り人形のように、そのまま全身を倒していった。

僕は神像の口から飛び出して雪に覆われた腕に着地し、そのまま腕の上を滑り落ちて、肘の辺りから地面に飛んだ。

地響きを立てて、神像が地面に倒れ込む。もう、動き出すことはなかった。

「ナユタ！」

クレハとノイが走り寄ってくる。ノイが操作したのか、吹雪は止まっていて、もう、雲の隙間から陽光が一筋差し込んでいた。僕は二人に言った。

「ゼクスト達を追おう！」

「う、うん！」

森にいた片割れと同じようにもう動かない〝双たる巨岩〟を回り込むように屋上を走り、ゼクストが消えていった台座の向こう側に回る。

台座に隠れるようにそこにあったのは、僕たちがこのオルタピアにやって来るのに使った〝転位装置〟だった。ノイが近づいて、観察する。

「これは〝ミトスの民〟だけが使用を許されている〝転位装置〟なの。行き先は〝ヘリオグラード〟の最上階」

「〝ヘリオグラード〟？　あの庭園にあった塔のこと？」

「そうなの。最上階は、〝ミトスの民〟が、〝テラ〟を統治する場所なの」

「ゼクストたちは、そこにいるんだね？」

「間違いないの！」

ノイが触れると、〝転位装置〟から青と緑の光が浮かび上がった。

「動かせるの！」

既に〝マスターギア〟は三つ奪われてしまった。シグナがどこにいるのかも分からない。僕たちには、ゼクストたちを追いかけるしか、選択肢がなかった。

「よし、行こう！」

僕は戦闘の疲れも気にせずに、〝転位装置〟に乗り込む。クレハとノイが隣に並ぶ。

円環が回転しながら持ち上がり、視界が光に包まれた。

光が途切れると、急に強い風が体に吹き付けてきた。

僕たちは、大きな円形の空間の一角に転位したようだった。屋根も壁もない。〝ヘリオグラード〟の最上階、というより、屋上と言うべきか。

外に目をやると、上方に青空が、下方に雲海が、どこまでも広がっていた。この場所がどれだけ高い位置にあるのかが分かる。他に見えるのは、照りつける太陽だけだった。

また、強い風が吹いた。

石の床には複雑な文様が幾重もの円を描くように施されていた。その円の中心、すなわちこの空間の中心に、背の高く、巨大な石の椅子があった。

それはまるで、この場所から〝テラ〟の全てを見下ろす為に作られた、玉座に見えた。

細かな装飾が彫り込まれたその玉座に、褐色肌の男が座っていた。

「ほう、人間風情に神像が倒せたか。なかなか、やりおる」

ゼクストは、興味なさげに、あるいは退屈そうに、僕たちを見てそう言い、そして両手を広げた。

「ようこそ、〝ヘリオグラード〟の最上階へ。歓迎するつもりはないが、それなりの敬意は示してやろう」

この広い空間に存在するのは、〝転位装置〟を除けばゼクストが座っている玉座だけだった。太陽の強い光が玉座を照らし、長い影を床に落としている。

そして、その影の中に、セラムが立っていた。
「……！」
反射的に、剣に手をかける。と、ゼクストが片手を挙げた。
「無益な殺生をこれ以上繰り返す必要はない。我が大願、『再創世』は間もなく叶う」
ただ、片手を挙げただけなのに、ゼクストから伝わるあまりにも大きな威圧感に、僕は剣を抜くことが出来なかった。
それでも、なんとか体を前に進め、ゼクストと相対する。
「ゼクスト、大願とはなんだ。『再創世』とは、なんなんだ！」
僕が叫ぶと、ゼクストは少しだけ不思議そうな視線を向けた。
「ノイから聞いていないのか？　……おお、そうか。人間相手には喋れなかったか」
ゼクストは、喉の奥でくっくっと笑った。それは、何も分かっていない僕のことをあざ笑っているように聞こえた。
「いいだろう。本来は、人間風情に説明する必要などないのだが、ここまで辿り着いた褒美として、教えてやろう」
玉座に立てかけてあった長い杖を取り、立ち上がる。
「見るが良い――」
そして、杖を天に掲げた。
「――〝テラ〟の、目を覚ませ」
杖の先端がぼんやりと輝きだし、その先が天に向かう。僕はつられて空を見上げた。
「……なっ⁉　こ、これは一体⁉」
自分の見ている物が信じられない。
「空が、めくれているっ⁉」
まるで、果実の皮をつまんで剥がしているかのように、空の一部がめくれ、そこに真っ黒な穴が開いた。その部分にだけ、夜があった。
一枚、また一枚と、青空の皮は剥がれ、その度に、空に黒い領域が生まれた。
やがて、透き通った青い空は消え、全てが、黒に染まった。
「〝テラ〟の空は、全周天候投影装置に映し出された、仮初めの物なのだ。今見ている物こそが、本物の空だ」
「本物の、空……」
視界一杯に、星空が浮かんでいた。漆黒の闇の中に、とても数え切れない数の星が浮かんでいた。
突然夜になった訳ではない。あたりは明るく、お互いの顔がよく見えた。にも拘わらず、空には太陽が浮かんでいない。とてもおかしな感覚だった。空は確かに夜なのに、昼間のように明るい。

もう一度見上げる。上空には無数の星と、大きな二つの月が——
「——月じゃ、ない？」
一つは確かに月だった。けれど、もう一つは違った。いつも見ている月とは、明らかに色が違っていた。
見たことのない天体。見たことのない星だった。
けれど、何故だろう。それを眺めていると、体の芯が熱くなってくるのを感じた。
その星は、青かった。球体の大部分が、青く塗られていた。
それが海の青さなのだと、どうしてだか、僕には分かった。
所々に緑色の塊があった。絵の具を散らすようにうっすらと白くなっている所があった。
緑は大陸だ。白は雲だ。どうしてだか、僕には分かった。
一度も見たことなどない筈なのに、あの星がなんなのか、僕には分かっていた。
「……あれは」
見ているだけで涙が出そうになる。それくらいに、青と緑の星は、美しかった。
僕は、涙を堪えて、呟いた。
「あれは、僕たちの住む世界だ」
背後でクレハが息を呑む音が聞こえる。
「その通りだ。あれはお前たち人間が生きている星だ。誰の許しもなく、な」

ゼクストは悲しげにそう言い、杖を抱えたまま玉座に座ると、語りだした。
「この〝テラ〟は、あの星の周囲を回り続ける衛星基地なのだ。お前たちからは、夜空に浮かぶ二つ目の月として見えていただろう」
「ここが、二つ目の、月」
「そうだ。現在は〝転位門〟を通ってのみ、星と行き来が可能だ」
自分たちの星を目の前にした時点で分かっていた筈なのに、いざ聞かされて、僕は相当気を落とした。
「〝失われた楽園〟じゃなかったんだ、ここは……」
ゼクストは杖を僅かに揺らす。すると、青と緑の星がゆっくりと回りだした。
いや違う。星が回っているんじゃない。僕らのいる方、〝テラ〟が動いているんだ。
地図で見たことのあるのと同じ形の大陸が見えてくる。僕とシグナが暮らしているあの大陸だ。帝国の領土を真の意味で俯瞰したのは、もしかしたら僕が初めてかもしれない。
大陸が過ぎると、青の中に無数の緑の粒が集まっているのが見えた。シエンシア多島海だ。無意識に残された島を探したけど、小さすぎて見えなかった。
星は更に回り、シエンシア多島海の先の姿を見せようとする。
けれど、その先は何がある？
その先は〝世界の果て〟だ。

〝世界の果て〟の向こうに、何がある？

見たくない。今なら分かる。そこに〝失われた楽園〟など存在しない。

見てはいけない。頭の中で誰かが叫ぶ。そこには、きっと何もない。

けれど、僕は目を逸らせなかった。逸らす訳にはいかないと思った。

「さあ、見るがいい。これが、お前たちの――」

ゼクストが、憎しみの籠もった言葉を紡いだ。

「――人間の、罪だ」

やがて、ゆっくりと、〝世界の果て〟の向こうが、姿を現した。

海が、そこで終わっていた。

「……嘘、……！」

クレハが小さく叫び、両手で口を覆う。僕は、目を見開いて、それを見つめていた。

星に、穴が穿たれていた。

果物を一口囓ったみたいに、星の一部が削り取られていた。

〝世界の果て〟と呼ばれていた海域の内側は、歪に、乱暴に、抉り取られ、星の中心あたりまで続く深い穴になっていた。

穴の表面は茶とも深緑ともつかない色に染まっていて、見ているだけで吐き気を催す醜さを感じさせた。

あの美しい青と緑の星に、こんな醜い傷があるなんて、信じられなかった。

「これが……、僕らの星の、姿なのか……？」

「そうだ。そしてお前たちの罪の証だ。あの抉れた部分の中央を見ろ」

穴の底に、赤黒く光っている物があった。

星の中心あたりに、とてつもなく巨大な石の塊があって、それが光を放っていた。

「あれは〝星核〟だ。星が星である為の要であり、〝星の力〟を生み出す源でもある。万物の力の源、星と共に生まれ、そして死ぬ。全ての始まりにして終わりだ」

ゼクストは、そこで初めて表情を歪めた。苦々しげに〝星核〟を睨む。

「見ろ。〝星核〟は死にかけている。もはや〝星の力〟を生み出す力も失い、自重に押し潰されようとしている。〝星核〟が死ぬ時、その星は滅ぶ。お前たちの星は、今、滅びの時を迎えようとしているのだ」

〝星核〟は、所々がへこみ、ゆがみ、歪な形をしていた。石から放たれる光は弱々しく、活力に欠けていた。あれが、僕たちの星が放つ〝星の力〟だと言うのか？

ゼクストの声が、呆然と立ち尽くしている僕とクレハに降りかかる。

「覚えはないか？　〝星の力〟が弱まれば、そこに生きる生命の力も弱まる。魚が捕れなく

なっているのではないか？　牛の乳の出が悪くなっているのではないか？　治らぬ病がはびこっているのではないか？」
息を呑む。魚も牛も、残され島で実際に起きている現象だった。そして――
「――〝奈落病〟！　あれは、〝星の力〟が弱まっている為に起きているのか！」
「そうだ。そしてそれこそが、お前たち人間の罪なのだ」
「人間の、罪……？」
「少し、長い話になる」
褐色肌の顔は無表情のまま、しかし、声が少し掠れて聞こえた。
「ミトスとは〝翼を有する者〟という意味だ」
玉座に座りながら、ゼクストはゆっくりと語った。
「我々〝ミトスの民〟は、自らの内に持つ翼の教えに従い、星から星へ旅をする移民種族だ。奇蹟の技をいくつも持ち、大地を宙に浮かべ、それを星々を渡る船とした。この〝テラ〟もその応用に過ぎん」
「〝テラ〟が、船……」
「我々は幾つもの船団に分かれて旅を続け、高度な知性を持つ生物のいる星を探し求めた。彼らに知識と技術をもたらすのが我らの役割からだ。この星にはお前たち人間がいた。人間は極めてミトスの民と姿形が似ており、我らが与えた物を元に、たちまち優れた文明を繁栄しはじめた。それは、ミトスの民から見ても、驚くような速度だった。人間は〝ミトスの民〟を『神』と呼び、長い長い共生が続いた」
ゼクストは、「しかし」と言って、言葉を切った。
「人間は、ある時、陰りを見せた。自分たちが培った技術を用いて、〝星核〟を制御し、その力を意のままに操ろうとしたのだ。それは〝ミトスの民〟にとっては禁忌の術だった。しかし、その頃には人間は、自分たちの方が〝ミトスの民〟よりも優れた生命体だと考えるようになっていた。〝ミトスの民〟の制止を聞かず、自分たちが作った道具を作動させ、そして、失敗した」
空を見上げる。削りとられ、醜い姿を晒している星。剥き出しになった〝星核〟。
「制御に失敗した〝星核〟は暴走し、当時人間の文明が最も栄華を誇っていた大陸レクセンドリアを吹き飛ばした。暴走はそれだけでは収まらず、全ての海が荒れくるい、多くの土地が海に没した。動物も植物も、多くの種が絶滅した。お前たちが〝大洪水〟と呼んでいる現象だ」
「そんな……！　人間は、自らの手で、自分たちの星を滅ぼしかけたって言うのか……!?」
玉座に座った男は無言で頷き、「さて」と、続けた。
「人間の愚かな所業により〝星核〟の暴走が確実になった時も、〝ミトスの民〟は、星と、星に生きる生命を見捨てるつもりはなかった。何者も、間違いは犯す。我ら〝ミトスの民〟

が星々を放浪しているのも、原初には、住んでいた星を自らの過ちの為に失ってしまったが故のことだ。過ちは、繰り返しはせん。滅びゆく星を救う為に、我らは自分たちが乗ってきた星を渡る船を用いることにした。つまり、この〝テラ〟をだ」
「〝テラ〟を？」
「そうだ。植物や動物をこの〝テラ〟に一時的に待避させ、そして滅びかけている星を、『再創世』によって元の美しい世界に戻す。これが〝テラ〟の役割であり、そして、この星を司ると決めた〝ミトスの民〟の使命なのだ」
クレハが息を呑む。
「だから、〝テラ〟には〝大洪水〟で滅んだ筈の動植物が存在するのね！」
そうか。〝テラ〟は〝失われた楽園〟ではなかった。けれど、〝大洪水〟の前の世界の姿を残しているという意味では、同じなんだ。
「『再創世』というのは、なんなんだ、ゼクスト！」
僕の質問に、ゼクストは、静かに答えた。
「星の死と、再生だ」
「死と……再生？」
「そうだ。この〝テラ〟には、〝ミトスの民〟が造り出した〝星座球〟が搭載されている」
〝星座球〟、シグナが言っていた物だ。〝マスターギア〟は、〝星座球〟への道を開くと。

「〝星座球〟は、〝星の力〟を生み出す力を持っている。言わば〝星核〟の代替品だ。現在は、〝テラ〟の各大陸に〝星の力〟を供給する役割を担っているが、それは副次的な機能に過ぎん。〝星座球〟は本来、『再創世』の為に造られたのだ」
杖を持ち上げ、ゼクストは指し示す。赤黒く光る、死にかけた〝星核〟を。
「『再創世』では、あの〝星核〟を破壊し、そこに〝星座球〟を嵌め込む。〝星核〟が失われることで一時的に星は死ぬが、〝星座球〟が引き継ぐことによって、星は本来の機能を取り戻す。この星は、〝大洪水〟が起きるよりも前の、緑豊かな、生命力の溢れた星に戻る。その上で、〝テラ〟で保護していた生物を地上に下ろす。それが我らの計画だ。今、星にいる生命は滅ぶが、世界は再生されるのだ」
ゼクストが、まるでなんでもないことのように放った言葉に、僕は絶句した。
「なっ、なんだよそれ！　今、星にいる生命が滅ぶ⁉」
「そうだ。〝星核〟を完全に破壊すれば、星が星を維持する力を失い、地表は全て崩れ落ちるだろう。〝大洪水〟の比ではない。何十年も続く天変地異によって、生命は死滅する」
「何言ってるんだよ！　あの星には沢山の人間が生きているんだ！　その人たちはどうなるんだ！」
「その人間が、あの星を駄目にしてしまったのだっ！」
ゼクストがもの凄い剣幕で僕を睨み、叫んだ。

「人間が驕り、慢心し、我らの忠告に耳を貸さなかったから、"星核"は再起不能な状態にまで傷ついてしまったのだ！　『再創世』後の世界に、人間は必要ない！　この星は、動物と植物の永遠の楽園となるのだ！」

僕は最後まで聞いていなかった。ゼクストがやろうとしていることは、何があっても受け入れられない、受け入れてはならないことだった。

「『再創世』など、させはしない！」

剣を引き抜き、ゼクストに向かって突進する。玉座に座るゼクストは、微動だにせず、こちらを見つめていた。

と、その時。

「動くな！　ナユタ・ハーシェル！」

「きゃあっ！」

「!?」

叫び声に振り返る。いつの間にか、クレハの後ろにセラムが回り込んでいた。クレハの体を片腕で強く締め上げ、首筋に短刀を当てていた。僕は思わず足を止めた。

セラムが僕を見つめ、もう一度言った。

「動くな。ナユタ・ハーシェル」

僕は剣を構えたまま、セラムを睨み付ける。

「セラム、こちらへ来い」

「はっ」

ゼクストの声に従い、セラムがクレハを押し出すようにして歩きだす。短刀を当てられているクレハは抵抗出来ない。ノイが僕の横に飛んできて、不安げにセラムとクレハの背中を見つめた。

「汚いぞ！　セラム！」

背中に投げかけるも、仮面の剣士は答えなかった。

二人が玉座の横に立つと、それまで無表情だったゼクストが、唇の端を吊り上げる。それは笑みだった。

「人間風情にはもったいないが、お前には感謝をしても良いと思っている。ナユタよ」

「感謝、だと？」

「そうだ。クレハを我が元まで連れてきてくれたのだからな」

「何っ!?」

それを聞いて、唐突に、遺跡塔でのゼクストの言葉が頭の中を駆け巡る。

――お前も、しばし、預ける――

僕は、あれはノイを指しての言葉だと思っていた。そうじゃなくて、クレハだったということなのか？　けれど、何故？

クレハは、驚きの表情を浮かべたまま立ち尽くしている。ゼクストは立ち上がり、セラムが拘束しているクレハの前に立った。

「お前はクレハ・レム・オルディーン。我、ゼクスト・ジ・キュリアス・ドミナドールの、娘だ」

クレハの目が見開かれる。そして、すぐその表情が怒りに変わり、叫ぶ。

「嘘よ！　そんな馬鹿な話がある訳ないわ！」

「我も、まさか我が娘が人間風情の世界で生きながらえているとは想像していなかった。どうやら記憶を失っているようだが、お前も〝ミトスの民〟の生き残りなのだよ」

「嘘よ！　そんな……」

もう一度叫ぶ。けれど、その声は力を失っていた。ゼクストは続ける。

「お前はもう気づいている筈だ。この〝テラ〟の風景を見た時、懐かしさを感じたであろう？　それは正しい感覚だ。お前にとっては、〝テラ〟こそが真の居場所、真の故郷なのだから」

クレハは、驚いた顔をゼクストに向け、そして、うつむいた。ゼクストは笑った。

「顔を見れば分かる。お前は思い出しかけている。自分の出自を、自分の本来の役割を」

「分からない、分からないわ……」

前髪が顔にかかり、クレハの表情が見えなくなる。ゼクストは満足そうに頷いてから、僕の方に振りむく。

「さあ、これでお前の役目は終わりだ。ナユタ。だから――」

杖を翳し、その先端で真っ直ぐに僕を指す。

「――死ね」

突然、全身に激痛が走り、僕は絶叫した。

「があああっ!?」

轟音と共に、ゼクストが構える杖の先から幾筋もの稲妻が放たれ、それが僕とノイの体の中に流れ込んでいた。

「きゃあああっ!!」

すぐ側でノイの、苦しみを帯びた悲鳴が聞こえた。

まるで、稲妻が爪の隙間から入り込んで、体の中をずたずたに引き裂いているようだった。そして、その痛みは徐々に強くなっていく。

「ぐあああっ!!」

稲妻は延々と僕の体を蹂躙し続ける。悪意が練り込まれた痛みが、体中を苛む。なんとか逃れようとしても、間断なく襲いかかる激痛で体の自由が利かず、首を動かすことすら

出来ない。
視界に見えるのは、愉悦に顔を歪めるゼクストと、クレハを拘束したままじっとこちらを見つめているセラム、そして、クレハだった。
「ナユタ！　ノイ！」
叫ぶクレハ。泣き出しそうな顔でこちらを見つめている。全身が切り裂かれるような痛みの中で、ああ、またクレハにあんな顔をさせてしまった、と、どこか冷静に考えている自分がいた。
駆け巡る痛みで意識が薄れそうになるなか、なんとか声を絞り出す。
「ク、クレ、ハ――」
「ナユタっ！」
クレハはセラムの腕の中でもがきながら、ゼクストに訴える。
「やめなさい！　お願い、やめて！　二人を助けて！」
ゼクストは笑みを張り付かせたまま、答える。
「何を言う。これは褒美だ。ここで死ねば、この者たちにとってこれ以上つらい場面を見ずに済むのだからな」
「ふざけないでっ！」
クレハの叫びに、ゼクストは「ふむ」と呟いた。
「分かった。では、さっさと殺すとしよう」
「やめてぇっ！！」
ゼクストが杖を強く握る。先端からほとばしる稲妻が色を増し、同時に、体の中に入り込んでくる痛みが数倍にも増した。
「ぐああああっ！」
「きゃあああああっ！」
僕とノイの絶叫が、広場に響く。
もう、無理だ。なんとか開いていたまぶたも、勝手に閉じていく。
頭の中に浮かぶのは、さっきの泣き出しそうなクレハの顔。
クレハ、ごめん。
君を、助けられなかった。
君を、助けたくて、今日まできたってのに。
本当に、ごめん。
まぶたが閉じきる直前、ゼクストが叫んだ。
「これで、終わりだっ！」
その時。
完全に意識を失いかけていた僕の頭の中に、どうしてだか、クレハの声が響いた。

（神様、どうかナユタとノイを守って！　私はどうなってもいいから——！）

次の瞬間。

あれだけ体の中を暴れ回っていた痛みが、すっと、消えた。

僕は瞬間的に、あ、死ぬと痛みが消えるんだ、と思った。そして、クレハを助けられずに死んでしまったことを、もう一度後悔しようとした。

けれど、

「な、なんだこれは——！」

驚くゼクストの声で我に返り、ぱっと閉じていたまぶたを開いた。

僕は、透明な、大きな球の中にいた。僕だけじゃない、ノイもすぐ側にいて、目をぱちくりさせていた。

僕たちは時折ちかちかと明滅するその球の中で、ふわふわと浮いていた。

ゼクストの杖からは変わらず稲妻が放たれていた。けれど、球の表面に当たると軌道が逸れ、あらぬ方向に飛び散っていった。

「なんだ、これ——」

呟きながら、球を眺める。

目を凝らすと、僕らを取り巻いているそれが、小さな光の粒で出来ているのに気づいた。

光の粒が寄り集まって、球状の壁を作り、ゼクストの稲妻を避けていた。

光の粒は、ある方向から、帯になってこの球にに放出されていた。流れ込んでくる粒が周囲を巡り、球の表面をますます厚くしていた。

僕は、光の帯の源を見て、目を見開く。

「——クレハ！」

そこには、クレハが、立っていた。

両手を胸の前で組み、目を閉じている。その顔がぼんやりと明るく照らされている。

少し離れた所でセラムが、仮面の隙間から驚愕の眼差しを向けていた。

クレハの姿を見て、僕は驚く。

「翼が——！」

そこに、翼が、あった。

祈るように目を閉じているクレハの背中に、見上げるほど大きく、かつ、透き通った、対の翼が生えていた。光の粒が寄り集まって形作られたその翼は、黄金色に輝きながら、清廉な印象を見る者に与えた。

光の翼は左右に大きく広がり、空間の中で優しく、静かに羽ばたいていた。翼が空気を揺らす度に、羽の隙間から鱗粉が零れるように、眩い光の粒を降らしていた。

その光の粒が集まり、帯をなし、僕とノイの周囲に形作られる球体となっていた。
僕には、翼だけでなく、クレハ自身が、光り輝いているように見えた。
「おお……、なんたる僥倖！」
その光景を見ていたゼクストが、歓喜に口を歪める。
「あれこそは〝ミトスの洗翼〟！　古き力が蘇った！　これで我が大願は果たされるぞ！」
ゼクストはすぐに忌々しげな顔をこちらに向けた。
「セラム！　あの球体を叩き割れ！　奴らを殺せ！」
クレハをじっと見ていたセラムは、瞬時に剣を抜き、こちらに駆け寄ろうとする。
「させない！」
叫んだのはクレハだった。同時に、組んでいる手に更に力を入れる。クレハの背中に広がる翼が大きく羽ばたき、光り輝いた。すると、
「なっ⁉」
僕とノイを包んでいた光の粒が、一斉に輝きを増す。周囲の景色が白に塗りつぶされ、外が見えなくなる。
それは、光の繭だった。あまりに眩しくて、目を開けていられなかった。
光の壁の向こうで、クレハが叫ぶのが聞こえた。
「ナユタ、生きてえっ！」

直後、僕の意識は途絶えた。

クレハが叫ぶのと同時に、光の球体はその場からかき消えた。ナユタとノイの姿も、球体と共に姿を消した。
石の床にクレハが倒れ込む。背中から伸びていた光の翼が、倒れると同時にかき消えた。
セラムが近づいて、倒れたクレハの髪の毛を掴り、無理矢理頭を持ち上げる。
「気絶しているようです」
「良い。力を使い切ったのであろう。休ませてやれ。ただし、拘束はしておけ」
「は。人間とノイはいかがしましょう？」
「恐らく、奴らの星に転位させたのであろう。全く無駄なことだ。まあそれも良い」
ゼクストは玉座から立ち上がり、頭上に広がる青と緑の星、そこに穿たれた穴、その中央で鈍く赤く光る〝星核〟を見つめた。
「必要な道具は全て揃った」
万感の思いでゼクストは、その星に生き残る人間たちに、最後の言葉を送る。
「『再創世』が、始まるのだ」

幕間

両親が、まだ生きていた頃。

NAYUTA NO KISEKI

Intermission

――これは、夢だ。

何故なら、星片観測機を弄っている僕が、とても幼い。六歳かそこらだ。

何故なら、母さんがかまどの前で料理の支度をしている。もういない母さんが。

何故なら、父さんが難しそうな本を机の上に広げている。もういない父さんが。

だから、これは、夢だ。

僕は星片観測機を見よう見まねで動かそうとしているけど、上手くいかない。

父さんが分厚い本から顔を上げ、台所を見る。

「母さん、ナユタがまた〝眠り姫〟をご所望だよ」

「あらあら、まだ夕食の準備が終わっていないのに」

「いいじゃないか。見せてやりなよ」

二人の穏やかな会話。もう二度と聞けない会話。

母さんが近づいてくる。僕の後ろに立ち、包み込むように、観測機を操作する。背中に柔らかな温もりを感じた。

僕がいくら弄ってもぐちゃぐちゃの塗り絵みたいにしか映っていなかった物が、母さんの手の動きに合わせて、徐々に綺麗な絵に変わっていく。

「ほらナユタ、〝眠り姫〟よ。あなた、本当にこの〝星の欠片〟が好きなのね」

観測機に映し出されたのは、眠っている女の子だった。

穏やかな日差しに包まれた花畑のような所に、細長い箱が置かれ、その中に女の子が眠っていた。穏やかな表情で、目を閉じて。

父さんと母さんは、女の子が入れられている箱を「ヒツギのようだ」と言っていたけど、その時の僕には「ヒツギ」がなんだか分からなかった。「ヒツギ」の中にいる人が、どういう状態の人なのかということを、知らなかった。

なので僕は、その女の子が、「ヒツギ」の中に閉じ込められているのだと、無理矢理そこに入らされているのだと、勝手に思っていた。

箱の外には綺麗な花や、草がある。「ヒツギ」から出れば、楽しい物が沢山ある。一緒に遊ぶことが出来る。僕は、その女の子を「ヒツギ」から出してあげたかった。

温かい感触が頭を包み込む。いつの間にか父さんが隣にいた。僕の頭を撫でながら、隣にしゃがみ、僕と視線の高さを合わせる。

「いつか、出会えるさ」

父さんは、優しく、そう言った。

「お前が、この子を、ここから連れ出してやるんだ。なあに、お前なら、きっと出来るさ」

僕は、力いっぱい頷く。父さんの優しそうな瞳を見て、なんだか嬉しくなる。
ふいに、景色が薄れていく。全てがぼんやりと白くなり、もう箱の中で眠る女の子も、笑う父さんの顔も、背中から伝わる母さんのぬくもりも、思い出せなくなっていく。
ただ、あの時聞いた言葉だけが、僕の心に響き続ける。
お前なら、きっと出来るさ――



第6章

世界の終わり

NAYUTA NO KISEKI
Chapter 6

ゆっくりと、まぶたを開ける。直前まで何か夢を見ていたような気がするけど、瞬きの間に温かな印象はかき消えて、もう思い出せなかった。枕がかすかに濡れていた。

「ナユタ！　大丈夫!?」

寝台の横に置かれた椅子に、ノイがちょこんと座っていた。ずっと看てくれていたのだろうか。横になったまま、ノイに話しかける。

「ここ……は？」

「ナユタの家なの」

「ふうん……」

頭の中がもやもやしていて、その返事が何を意味しているのかを、上手く把握出来なかった。何か、今、とても重要なことを言われた気がするのだけど……。

とりあえず体を起こす。枕の横に、木彫り細工の耳飾りと、〝星の欠片〟が置かれていた。耳飾りはクレハがシグナにあげたお守り。〝星の欠片〟は僕のお守りだった。

どうして、これがここにあるんだっけ……？　僕のはともかく、シグナのは……。

「あら、目が覚めたのね。起きられるかしら？」

階段を上る音に振り向くと、アーサ姉さんが廊下から顔を出した。大皿を載せたお盆を持って上がってくる。懐かしいシチューの香りが鼻をくすぐる。

机にお盆を置くと、姉さんは僕に顔を近づけて額同士を合わせた。血色の良い姉さんの額が、温かかった。

「熱は下がったみたいね。ハイドル先生を呼んでくるから、まだ安静にしてるのよ？」

そう言って姉さんはクルリと背を向け、足早に階段を下りていった。

「……？」

姉さんの後ろ姿を見ながら、何か不思議な気分になる。まだ、もやもやが取れない。

「ナユタ？」

寝台に体を乗りだしたノイが、心配そうに見上げてくる。僕はゆっくり首を動かして、窓を見た。

「……えっ？」

それを見た瞬間、頭の中のもやもやが吹き飛んでいくのが分かった。

「空が……!?」

立て膝のまま窓にしがみついて、外の景色を見る。

紫というか藍色というか、なんとも言葉に出来ない異様な色彩に、空が染まっていた。見上げているだけで不安になりそうな、そんな色だった。

そして、いつも空に懸かっていた、大きな二つの月。
その片方が、月ではなくなっていた。
「なんだ……あれ……!?」
そう言いつつも、僕はもうそれがなんなのか、頭の中では分かっていた。けれど、認めたくなかった。
長年見慣れていた月だった物。その表面が紙細工のように割れ、剝がれ、その中身を覗かせていた。
そこには青があった。それが海であることを、僕は知っている。四つの緑の塊があった。それが大陸であることを、僕は知っている。四つの大陸の中央に、小さな島がある。そこが庭園と呼ばれていることを、高い塔があることを、僕は知っている——
「あれが」
後ろから、ノイが静かに言う。
「あれが、〝テラ〟なの」
〝テラ〟。
僕たちが冒険した場所。
あれが、〝テラ〟。
ようやく、頭がはっきりし、何もかもを思い出した。〝ヘリオグラード〟でゼクストと対峙したこと。あいつに殺されかけたこと。
そして、クレハに助けられたのだということを。
「……そうだ、クレハは!? ノイ、クレハはどこ!?」
僕が振り返ると、ノイは視線を落とす。
「あ、あのあの、多分、クレハ様は〝テラ〟からこちらの星に私たちを転送してくれたの」
ノイのその言葉に、引っかかるものがあった。
「クレハ、様、だって?」
ノイは困ったような、謝るような風に言った。
「私の勘違いじゃなかったの。クレハ様は、〝ミトスの民〟の血を引く者なの。私たちを助けてくれた力と、あの翼、〝ミトスの洸翼〟が何よりの証拠なの……」
ノイが何を言っているのかよく分からない。いや、分かってはいるけど、僕はそれを認めたくなかった。
認めたのは、クレハがまだ〝テラ〟にいるってことだけだった。
「行かなきゃ!」
「ナユタ!?」
寝台から飛び出て、階段を駆け下りる。まだ寝間着だとか、装備も持っていないとか、全く頭になかった。ただ、〝転位門〟に向かうことだけを考えていた。

「あら、ナユタ――」

かまどの前で振り返るアーサ姉さんの言葉も聞かず、外に飛び出す。

窓から見た時は分からなかったけど、〝テラ〟からは赤黒い光の筋が大地に向かって降り注いでいた。まるで炎のような、あるいは血のような色をしていて、僕にはそれが邪悪な物にしか見えなかった。

頭の中に何度も浮かんでくる「手遅れ」という言葉を必死にかき消しながら、村の端の広場へと走る。戻らなきゃ。〝テラ〟に。戻って、シグナとクレハを取り返して、ゼクストを倒し、『再創世』を止めないと！

上手く動いてくれない足を叩きながら、角を曲がって、広場に走り込む。そこには、大樹の根が絡みついた、〝テラ〟へと続く〝転位門〟が――

「……え？」

――なかった。

広場は、無茶苦茶になっていた。

皆でよく登ったりぶら下がったりして遊んでいた大樹が、なぎ倒されていた。その根が絡みついていた遺跡群も、なくなっていた。

広場はすり鉢のように抉れ、真ん中に、大人の大きさくらいの岩が突き刺さっていた。

「ナユタが眠っている間に、ここに遺跡の欠片が落ちてきたの……」

ノイがそっと飛んできて、僕の横に並んだ。

「それで、〝転位門〟が破壊されてしまったの……」

足下に転がる細かい石を見る。落下してきた遺跡の欠片は、大樹を倒し、その大樹が絡みついていた遺跡を、〝転位門〟もろとも、粉々に吹き飛ばしてしまったのだ。

〝転位門〟が、ない。〝テラ〟に、行けない。

体から力が抜けていく。寝間着のまま、芝生がはぎ取られた土の上に膝を付いた。

「ナユタ！」

僕の名を呼ぶノイの声が、やけに遠くに聞こえた。

いつの間にか、木陰に座っていた。ノイが引っ張って連れてきたのだろうか。

何もかもがぼんやりしていた。意識が曖昧だった。何も考えられなかった。

僕はただ、座り込んだまま、バラバラに壊れた石門の破片を見つめていた。ノイは僕を心配そうに見つめながら、これまでのことを教えてくれた。

五日前、散歩中のヴォランス博士が砂浜に倒れていた僕とノイを見つけてくれたこと。

その直後、月の片方が突然に姿形を変え、同時に空と海が赤紫色に変わったこと。

これまで以上の頻度で遺跡が落ちてくるようになったこと。

大陸では天変地異が相次ぎ、この世の終わりが来たと騒ぎになっていること。
その中でも、特に人々を困惑させたのは、形を変えた月から、赤黒い光が大地に向かって降り注ぎ出したことだった。観測の結果、その光の柱は〝失われた楽園〟に向けて放出されているようだった。
その光景が一体何を意味するのか、誰にも分からなかった。けれど、紫色の空を切り裂き、禍々しい色を放つ光の柱は、まさに世界の終わりの象徴のように、人々には見えた。
「あの光は、この星の〝星核〟を破壊する為に、ゼクストが送り込んでいる力の塊なの」
僕の隣に座っているノイは、目を伏せて言った。
「ゼクストは〝星核〟を破壊して、〝テラ〟にある〝星座球〟と取り替えるつもりなの。〝星核〟の破壊には時間がかかるから、すぐにこの星が壊れる訳ではないけど、「再創世」が、もう始まっているのは確かなの……」
ノイの言葉が、耳に届く。けれど、僕は返事をしなかった。頭では、何を言われているか分かっていた。でも、心が、受け入れるのを拒否していた。
〝テラ〟から降り注がれる光の帯をぼんやり見ながら、体が絶望に浸かっていくのを感じていた。どうしようもなかった。だって、そうじゃないか。今の僕に何が出来る？
〝転位門〟が、もう、ないのだ。

セラムの、ゼクストのことを思った。
シグナのことを思った。
クレハのことを思った。
「再創世」は阻止しなければならない。僕の大好きな世界が滅んでしまう。僕の大好きな人たちが皆死んでしまう。そんなの、絶対に認めることは出来なかった。けれど――。
「――けれど、〝転位門〟がないと、〝テラ〟に行けないじゃないか……」
思いが、口から漏れる。致命的な言葉が。口にすることで、絶望が更に深まった。
ノイが空中を飛んで僕の肩に触れる。必死に、僕を励まそうとする。
「ナユタ、諦めないで！　きっと、何か方法が――」
「何かってなんだよっ！」
思わず大声を出し、ノイの小さな手を払いのける。直後、自分が如何に恥ずかしい真似をしてしまったのかに気づいた。
ノイだって不安で堪らない筈だ。もう〝テラ〟に戻れないかもしれないという時に、僕は五日間も眠ってしまっていた。それでも、ノイは不安と戦いながら僕が目を醒ますのをずっと待っていた筈だ。にも拘わらず、僕はそのノイの優しさを拒絶してしまった。
情けなかった。ノイの顔が見られず、言うべき言葉も見つけられず、僕はうつむいて、

ただ涙が零れるのを我慢するしか出来なかった。

「ごめんなさいなの……」

ノイは、小さく呟いて背を向け、逃げるように飛び去った。

謝るのは、僕の方なのに。

一人になって、僕は自分がとても矮小な存在だと感じていた。

「最低だ……、僕は……」

広場を去ったノイは、ぼんやりと飛んでいた。

ナユタの家に戻る気分にもなれず、村へと続く坂道を下る。

目を伏せ、肩を落とし、地面に浮かぶ自分の影を見下ろしながら、ただ道なりに進んでいた。

ナユタの言葉に傷ついた訳ではない。ナユタは悪くない。これからどうしていいのか分からないのはノイだって同じだった。目が醒めて、自分の世界が一変していたら、誰だって慌てふためくだろう。それは仕方のないことだ。

けれど、ナユタが目醒めたら、何かが変わるのではないかと思っていたのも事実だった。これまでだって、ナユタは様々な驚きをノイに見せてくれた。人間が単に愚かで恐ろしい生物ではなく、可能性と希望に満ちた存在だとノイに示してくれたのは、他ならぬナユタだったのだから。

だから、そのナユタが絶望に沈んでいるのは見ていて辛かったし、見たくなかった。早くいつものナユタに戻って欲しい。けれど、自分に何が出来るとも思えなかった。

「ナユタ……」

誰に届くわけでもない声が、小さく口から漏れ、風に流れていく。

と、その時。

「ノイ？　どうしたの？」

突然声をかけられて、ノイは顔を上げる。すぐ目の前にライラが立っていた。あやうく胸元にぶつかりそうになり、手前で静止する。

「ごごご、ごめんなさいなの……」

ナユタが眠っていたこの五日間、ライラは毎日様子を見に来ていて、ノイともすっかり打ち解けていた。首を傾げるライラに、ノイは思わず心の中の思いを言葉にしてしまう。

「ナユタが目を醒ましたんだけど、いつものナユタらしくないの……」

ライラは、驚いた顔をして、坂の向こうを見上げる。けれど、すぐにノイの方を向いて、にっこり微笑んだ。

「ちょっとお散歩しない？　何があったのか、聞かせてよ」

村の中を進みながら、ノイはライラに今さっきのことを話した。そのうちに、二人は村の中央広場に到着していた。急に、村人の喧噪が大きくなる。

広場には沢山の村人がいたが、ノイが最初に見たのは、広場の真ん中に突き刺さっている大きな、遺跡の欠片だった。

この円形広場にも、二日前に遺跡の欠片が落下していた。大事はなかったが、美しい石畳に無残な亀裂が放射状に広がり、平らだった広場の地面は大きく歪んでしまった。

岩のような材質のその欠片は、大人の背よりも高く、更にやたらに重い為、馬でも引っ張れなかった。それで、二日経った今も突き刺さったままになっている。変に鈍く光る遺跡の欠片が、広場の雰囲気に影を落としている。今はその周囲を村人が囲んでいた。

「なるほどねぇ」

ノイが一通り話し終えると、ライラは中央広場の入り口で立ち止まり、息をつく。ノイは広場に直立する遺跡の欠片から目を背けるようにして、正直な気持ちを口にした。

「これからどうしていいかもう分からないの……。でも、きっと、ナユタも同じなの……」

「ねえ、ノイ」

気落ちするノイの言葉を遮るように、ライラはノイの名を呼んだ。

「どうしたらいいのか分からないのは私も同じよ。ううん。私たちみんなそう」

ライラは空を見上げた。

「空も海も色が変わってしまったわ。月も月じゃなくなって、おまけになんだかよく分からない光を降らしてる。この世の終わりってこういうものなのかなって、思ったりもするの」

「ライラ……」

「でもね。ほら、見て！」

心配そうに見上げるノイに、ライラは前を指し示した。ノイはそちらを見る。

「どう？　村のみんなは、絶望しているように見える？」

広場には多くの村人がいた。

突き刺さった岩を取り囲んでいる人たちは、どうやってこの邪魔物を運び出すかを議論していた。時折突飛な案を出した人をみんなで小突き、からかっていた。

石畳が割れて馬が上手く歩けない為、馬車の代わりに大人が二人がかりで、瓦礫を山ほど乗せた台車を押していた。額から汗を噴き出しながら、お互いを応援し合い、力強く、台車を前に進めていた。

その石畳の修繕を始めている石工がいた。いつまた石が落ちてくるかも分からないのに、こつこつと、広場を平らに戻そうとしていた。

壁際には、数日ぶりに動いた定期船を乗り継いで来た行商人が、土産話を餌に人を集めていた。皆、熱心に耳を傾け、彼が話す大陸の様子を聞いていた。

その周りで、子供たちが遊んでいた。広場に転がっている石を集めて、動物の形を作っているようだった。時折、笑い声がこちらまで聞こえてきた。

村人たちの瞳には、明日への不安があった。世界の終わりが目に見えていることへの恐怖があった。突きつけられている事実から目を逸らす逃避も、あったかもしれない。

けれど、どうしてか、そこには、絶望がなかった。ノイには、そう見えた。

ライラは彼らを見つめながら言った。

「私たちのご先祖様はね、一五〇〇年前の〝大洪水〟の後、それはそれは大変な思いをしたそうよ。それでも、みんなで協力して、絶望を乗り越えて、そして、生き延びたの」

ノイはハッとなって、ライラを見る。

「確かに、世界がこんなになっちゃってから、今まで以上に魚も捕れなくなったし、牛だって乳が出にくくなったわ。でも、生きていれば、そういう時だってあるわよ」

ライラはノイを見て、元気づけるように笑った。

「私たちがこれくらいで音を上げたら、今よりももっとひどい時代を生きたご先祖様に申し訳が立たないと思うの。だから私たちは、絶望している暇なんてどこにもないのよ。明日と、明日のずっと先まで、生きていかなきゃならないんだから」

「ライラ……」

ノイは、胸の奥がぎゅっと熱くなるのを感じた。そうだ、これが人間だ。

愚かで恐ろしい生物などではなく、可能性と希望に満ちた存在だ。

ナユタだけじゃない。みんな、そうなんだ。

管理者であるノイには、涙を流す機構は搭載されていなかった。けれど、こういう時に人間は泣きたくなるのではないかと、思った。

ライラは暫くノイを見つめた後、ちろりと舌を出した。

「なんちゃって。全部、村長さんの受け売りなんだけどね。なかなかぐっと来るでしょ？」

そう言って笑うライラを見て、ノイも自然に笑顔になる。状況は何も変わってはいないけど、絶望している暇なんてないのは確かだった。気分が少し、軽くなった気がした。

そして、思う。彼ら人間が、このまま滅ぼされてしまって良い訳がないと。

ライラはノイの表情を見て「よし」と頷くと、広場の先、岬への道を示した。

「浜辺で、もう少しお話していかない？」

ノイは、こくんと頷いた。

ノイに酷いことを言ってしまった僕は、重い体を引きずって家に戻った。

「もうナユタ、寝間着に裸足で外に行くなんて、お行儀悪いわよ」

扉を開けると、かまどの前でスープの味を見ていたアーサ姉さんがたしなめる。そこで

初めて、自分が裸足で飛び出していたと気づいた。土で黒くなった足を姉さんに見せるのが恥ずかしくて、脚に足の裏をこすりつけた。
「今拭く物を持ってくるから、座ってなさい」
姉さんが軽い足取りで奥の部屋に行くのを見送って、僕は食卓の椅子に座った。すぐに姉さんが濡らした布を持って戻り、僕の前に膝をついて、土で汚れた足を拭き始める。
「自分で出来るよ」
むずがゆい感覚が足から伝わってきて僕が嫌がると、姉さんは僕を見上げて微笑む。
「へこんじゃった弟を励ますのは、ずっと昔から姉さんの仕事なのよ。ノイちゃんと喧嘩したんでしょう?」
「え、どうして知ってるの?」
「見れば分かるわよ」
姉さんはそれ以上は何も言わず、丁寧に、優しく拭いてくれた。むずがゆいのは変わらなかったけど、なんだか、心が温かくなるのを感じた。そういえば、何年か前に、僕が落ち込んだ時、こんな風に足を拭いて貰った気がする。あの頃、姉さんはまだ元気で――
「――あれ?」
違和感。さっきもあった。なんだろう、これ。
その時、開けたままになっていた玄関をくぐって、医師のハイドル先生が入ってきた。

「やあナユタ君。目が醒めたみたいだね。あとで診察させてくれ」
そう言って先生は、帽子を取りながらまだ僕の足を拭いている姉さんに微笑みかける。
「アーサ、調子はどうだい?」
姉さんは立ち上がり、先生に向かって優しく微笑んだ。
「ええ先生、すっかりこの通りです」
「――えっ!?」
僕はようやく、違和感の原因に気づいた。椅子から飛び起きて姉さんの袖を掴む。
「姉さん!? なんで歩き回ってるの!? 寝てなきゃ駄目じゃないか!! 体を動かすと〝奈落病〟が体に回って――!!」
「ナユタ君、落ち着いて」
鞄を机に置いたハイドル先生が両手で僕を抑える。
「アーサはもう〝奈落病〟ではないんだ。彼女はね、治ったんだよ」
「――ええっ!?」
目が醒めて以来、驚かされることは多々あったけれど、それは本当に一番の驚きだった。
言われて見れば、姉さんは顔色も良く、咳もしていなかった。かまどでスープの味を見ていた時も、僕の足を拭いてくれていた時も、それは、病気になる前の元気な姉さんの姿だった。

「姉さん……」
微笑み返す姉さんに、僕は思わず抱きついていた。姉さんの細くて温かい指が、僕の頭を優しく撫でる。
「ナユタ。今まで心配かけて、ごめんね」
「良かった。本当に、良かった。良かったよ……！」
〝テラ〟でどれだけ苦しい目にあっても出なかった涙が、目の端から零れ落ちた。
「良かったね、ナユタ君」
声をかけられて、そういえばハイドル先生が側にいたことを思い出す。僕は慌てて姉さんから体を離し、涙をぬぐった。先生は微笑んで、見ていないフリをしてくれた。
「まあ、どうして治ったのかについては、残念ながら分からないんだがね」
ハイドル先生は椅子に座って、肩をすくめた。
「いつの間にか、病気が消えていたんだよ。しかも、アーサだけじゃない。大陸の〝奈落病〟患者の間でも、『原因不明の治癒』の報告が幾つも上がってきている」
「そうなんですか……」
「嬉しいことではあるけど、千年以上に亘って人間を苦しめていた〝奈落病〟が、世界の終わりを前にして突然治りだすなんて、なんとも不条理な話だ。科学を信奉する僕としては、大陸で流布されている『神が与えた残り時間だ』という説は、受け入れがたいしね」
ハイドル先生の言葉が、僕の胸の中に引っかかった。
――〝奈落病〟が、世界の終わりを前にして突然治りだす――
それって、どういうことだ？
頭の中で、何かが繋がりそうな気がしていた。それがなんなのかは上手く言えない。けれど、『再創世』を行うのでも、この星を滅ぶに任せるのでもない、星と人間が共に生き残る、第三の方法があるのではないかと、僕は考え始めていた。
「ねえ、ナユタ。あなたに見せたい物があるの」
ふいに姉さんがそう言った。
「ハイドル先生、診察は少しお待ち頂ける？」
「構いませんよ」
「ナユタ、こっちよ」
姉さんは部屋の隅にある星片観測機の前に座り、僕はその後ろに立つ。姉さんがツマミや突起を動かすと、観測機の真ん中に、ぼんやりと人の胸像が浮かぶ。
「……こいつは、ゼクスト！」
思わず叫ぶ。そこに映し出されていたのは、紛れもなく褐色肌の男、ゼクストだった。
「これね、昨日見つかった〝星の欠片〟なの」
椅子から立ち上がった姉さんに促されて、僕は椅子に座った。ゼクストと目が合う。

「ノイちゃんから、あなたたちに〝テラ〟で何があったのか聞いていたから、気になって……。ねえ、ナユタ。ちょっとこれ、聞いてご覧なさい」

脇から観測機に手を伸ばし、赤いツマミを引っ張る。すると、

「――我が名は、ゼクスト・ジ・キュリアス・ドミナドール」

観測機の中に浮かぶゼクストの像が、ゆっくりと、喋り始めた。

「これは……！」

「音や動きも記録されてるみたいなの。黙って聞いてみて」

言われて、僕はその絵を凝視した。ゼクストは、ゆっくりと言葉を紡いだ。

繰り返す。我が名は、ゼクスト・ジ・キュリアス・ドミナドール。後世の為に、この記録を残す。

現在、〝テラ〟は星からの離脱に成功し、周回軌道に乗った。

既存艦、移送艦を含め、星から脱出を予定していた〝方舟〟が何機あったのか、私は把握していない。

しかし、観測範囲内においては、レクセンドリア大陸の崩壊前に大気圏の外に出られたのは、この〝テラ〟だけのようだ。恐らく他の船は全て、大陸の崩壊か、あるいは、直後に起きた洪水に飲み込まれてしまったのだろう。

そして、この〝テラ〟には、[illegible]三人の〝ミトスの民〟、つまり私と、私の子供二人が搭乗しているだけで、人間は一人も乗っていない。皆、星に取り残された。

これは最大の誤算だ。

『再創世』を主目的として、『[illegible]』を乗せた〝テラ〟は、その構造上、主任務を終えるまでは星に戻ることは叶わない。

〝アストロラーベ〟の観測によれば、あの全惑星規模の洪水の中、なおも生き残っている人間がいるようだ。しかし、彼らを助けだす手段が、この〝テラ〟には用意されていない。

残念だ。誰にも、予想出来なかった結果だ。

〝ミトスの民〟さえ、ここまでの状況になるとは考えていなかった。今となっては星を責めることも出来ない。たとえ、これが人間の驕りによって起きてしまった事態だとしても。

私は、〝ミトスの民〟、星々を守る者の使命として、『再創世』を果たさなければならない。

しかし、あの洪水が引くまでは『再創世』を実行に移すことは出来ない。そして、私の命は、それを待てるほど長くはない。星を離脱する時に、傷を負ったのだ。

だから、これは遺言だ。

私は、〝ミトスの民〟の使命を、『再創世』の遂行を、その為に私に与えられた権限を、子供たちに委譲することにした。私が死んだ後、洪水が収まった来たるべき日に『再創世』を実行する最後の判断を、愛する子供たちに託すと決めた。

責任放棄と罵られるかもしれない。その批判は、甘んじて受け止めよう。しかし、これだけは分かって欲しい。

あの星には、まだ多数の人間が生きているのだ。生き残っているのだ。

〝星核〟の負った傷を考えれば、既に滅んでいると言ってもいいあの星で、それでも生き延びた者同士が寄り集まり、洪水で地表のほとんどが水没してしまったあの星で、自らの種の存続の為に生命活動を続けているのだ。

〝ミトスの民〟は、人間という存在を愛している。人間の持つ無限の可能性を信じている。だから、私の子供たちには地表で生き延びた彼ら人間を観察させ、〝ミトスの民〟が何をすべきなのか、それを自分で判断させようと考えている。

私は、子供たちが私の意志を正しく継いでくれると信じている。

息子、ヒラム・イル・オルディーン。娘、クレハ・レム・オルディーン。忘れないでくれ、〝ミトスの民〟は、悠久の昔から人間と共に生き、彼らを愛し続けたということを――

急に、耳障りな雑音が聞こえ、ゼクストの像が歪み、そして消えた。

「ここまでしか記録されていないみたいなの」

観測機から星の欠片を取り外しながら、姉さんが言う。

「あのね、ノイちゃんが言ってたゼクストって人の印象と、この話をしている人の印象が違うかなって、思うの」

「……うん。僕が会ったゼクストとは、随分違う」

けれど、これは一体どういうことなんだ？

星の欠片の中で喋っていたゼクストは、〝大洪水〟が収まるより前に自分が死ぬと言っている。じゃあ、僕たちが話したあいつは誰なんだ？

それに、繰り返し「〝ミトスの民〟は人間という存在を愛している」とも言っていた。まるで、『再創世』の実行を嫌っているかのようだ。

僕は、さっき〝奈落病〟の話を聞いた時と同じように、何かが心にひっかかるのを感じた。それがなんなのかは、まだ分からない。けれど、それはかすかな希望のように思えた。

その気持ちが、体中にゆっくりと広がって、今までまとわりついていた絶望の気持ちを外に追い出していくのを感じた。

ナユタ・ハーシェル、こんな所でいじけている場合なのか？　お前にはまだやるべきことがいくらでも残ってるんじゃないか？

すぐ側で、シグナが僕をそんな風にからかっているような気がした。

そうだよ。こんな所でいじけている場合じゃない。僕には、やるべきことがある！

「……ノイに、相談しなくちゃ」

そう言って立ち上がると、「ようやく復活したわね」と、姉さんは笑った。

「ちゃんと、ノイちゃんに謝るのよ？」

「分かってるって」

今すぐノイに会いたい。会って謝って、相談したい。そして、どんなことをしても〝チラ〟に戻るんだ！

「それと、もう一つ」

今にも外に向かおうとした僕を、姉さんが引き留める。振り返ると、姉さんはいたずらっぽく笑った。

「外に出る時は寝間着から着替えること。あと、靴も履きなさいね」

ライラとノイは浜辺に座って、水平線に沈む太陽を見ながら話をしていた。空の色も海の色も変わってしまい、夕日の明かりが歪んで砂浜に届くようになっても、それでも、夕焼けは人の心を落ちつかせてくれた。

「じゃあ、ライラはお父さんの宿屋を継ぐの？」

ノイに聞かれて、ライラは胸を張って答える。

「当然よ！　アーサさんから料理を教えてもらってて、最近は腕が上がってきたって、コックのグルズさんにも褒めてもらってるのよ？　《月見亭》は私の腕でシエンシアで一番の宿酒場にしてみせるわ！」

元気に言いきった後、ライラはすっと遠い目になる。陽は、もう僅かしか見えない。

「ナユタは、大人になったら、きっと大陸で暮らすんだろうな……。シグナもそうだろうし、クレハだって……」

ポツリと呟く。

「昔はどんな時でも一緒に遊んでたのに、少しずつ、そういう時間が減っていって、いつの間にか、みんなが顔を合わせるのは年に何回かだけになっちゃった。きっとこの先、もっと離れて行くんだわ……」

「ライラ……」

ノイが悲しげに見上げると、ライラは小さな笑顔を作った。

「悲しい訳じゃないのよ。私は宿屋の跡取り、ナユタとクレハは学者さん、シグナは剣士。みんな、小さい頃からの夢を叶えようとしてる。とてもいいことだと思う。だけど、なんでかな、今は少し、寂しい」

ノイは、人間の考える「寂しい」が、まだよく分からなかった。けれど、ライラが特定の名前を口にする時だけ、他とは異なる感情が交じることは、感じとれた。

「ライラは、ナユタのことが、好きなの？」

急に言われて、ライラは目を丸くし、真っ赤になった顔を両手で覆った。しばし沈黙。

やがて、こくんと、頷いた。

僕が浜辺に着くと、ノイとライラが楽しそうに話しているのが見えた。僕は呼びかける。

「ノイ！　ライラ！」

二人が振り向き、ノイがふわりと浮き上がる。何を喋ればいいのか分からないという顔を僕に向けている。その顔をさせてしまっているのは僕だ。心が痛んだ。

「ノイ、あの、さっきは――」

駆け寄って、謝ろうとしたその時、ライラが僕とノイの間に立ち、そのまま僕の頬を平手で打った。

乾いた音が、浜辺に響く。

打たれた頬に手を当て、ライラを見返すと、ライラは怒ったように叫ぶ。

「ノイが今どれだけ不安を抱えているのか、あんたが分かってあげなくて、誰が分かってあげられるのよ！　細かい事情は知らないけれど、多分絶対、ナユタが悪い！」

それは、昔よく聞いた、ライラの無茶苦茶な論理だった。

僕とシグナ、あるいはシグナとクレハが喧嘩をして、どちらからも謝りづらい雰囲気になった時、いつもこうやってライラがその空気を一刀両断してくれたんだ。

本当に久しぶりにライラに叱られて、僕は思わず、笑みを零してしまった。ライラは照れたのか、顔を赤くする。

「な、なんで笑ってるのよ！　反省しなさいよ！」

「ああ、分かってる。ライラには、助けられてばかりだ。ありがとう」

「……ばか」

僕はノイを見る。不安げな顔が見つめ返す。

「ノイ、さっきはごめん。僕は諦めかけていた。でも、それじゃいけないと思ったんだ。絶対に『再創世』を止めなきゃいけない。ノイ、力を貸してくれるかい？」

「ナユタ……。もちろんなの！　一緒に頑張るの！」

ノイが笑顔になり、僕も笑い、ライラも一緒になって笑った。

と、そこに人の気配がした。振り向くと、片腕を包帯で吊ったオルバス師匠が立っていた。

「師匠！　もう大丈夫なんですか!?」

「世界がこんな状態になっているのに、いつまでも寝ている訳にもいくまい。刀を振るえずとも、村の見回りくらいは出来るわい」

オルバス師匠はそう言って、まだ添え木が取れていない腕を持ち上げた。

「今、アーサの所に行っていてな。ナユタとノイが喧嘩したと聞いたのだが」

僕とノイを交互に見て、師匠は「ふむ」と頷いた。

「もう、大丈夫のようだな？」

「はい！」

「はいなの！」

ノイが嬉しそうに空中でくるりと回る。

と、その時になって初めて、僕はその光景がおかしな物だと気づいた。ノイを見る。

「ノイ！　君、飛んでるよ!?」

「……!?　あ、ホントなの！　私、飛んでるの！　ここは〝テラ〟じゃないのに！」

ノイはその場で飛び回って確かめる。

「おかしいの。〝星の力〟がないと飛べない筈なの」

「それって、この星の〝星の力〟が前より大きくなってるってこと？」

「そういうことになるの。でもそんな筈はないの。この星の〝星核〟はもう限界で、それにゼクストが更に傷付けている筈なの」

まただ。何かがひっかかる。

頭に手を当てて考える。〝奈落病〟の回復、ゼクストの言葉、そして、〝星の力〟。世界を救う方法が、遥か彼方に見えている気がしていた。けれど、それがなんなのかが分からない。まだ、答えが出ない。

「ナユタよ」

オルバス師匠に呼ばれ、師匠の目を見返す。師匠は少しの間僕を見つめて、そして満足そうに頷いた。

「もう、迷いはないようだな」

「はい」

しっかりと答える。

「なんとしても〝テラ〟に戻る方法を見つけ出して、『再創世』を、この天変地異を止めて来ます。そして、シグナとクレハを連れて帰ります！」

「私も一緒なの！」

ノイが頭上でくるりと回る。〝テラ〟に戻る方法があるのかどうかも分からない。けれど、師匠の言う通り、もう迷いはなかった。

オルバス師匠はもう一度深く頷いてから、言った。

「ならば、今から私の家に来なさい。見せたい物がある」

オルバス師匠、そしてシグナとクレハの家は、村の外れ、西の浜辺にあった。正確にはそれは家ではなく、岩棚の一角にある洞窟を改装して住居にしたものだ。十年

前にこの島にやって来た師匠が、修行に適した場所としてここを選んだらしい。
「村の人間はここを『洞穴』とか『鍾乳洞』とか呼んでいるが、それは外見の話」
話しながら中に入っていく師匠に、僕とノイは続いた。
「ナユタも知っての通り、この空間は、残され島を構成する遺跡なのだ。我が家は、地下に広がっているであろうその遺跡の、ごく一部を間借りしているに過ぎん」
確かに、今歩いている廊下はしっかりとした石造りだし、壁だって、煤や土に覆われてはいるけど、よくよく見ると、凝った装飾が施されている。
「ここ、神殿みたいなの」
ノイが呟く。
僕たちは、こういう遺跡が、どこから降ってくる物なのか、もう知っている。〝テラ〟だ。〝テラ〟の施設が壊れるか、老朽化し、剥がれ落ちて、空から降ってくるんだ。
さっき姉さんに見せて貰った〝星の欠片〟も、〝大洪水〟の直後にゼクストが〝テラ〟で記録した物が、一五〇〇年の時を超えて、僕たちの前に現れたんだ。その偶然と必然に、くらくらする。
廊下の最後に階段があり、そこを下りると、円形の空間に出る。この大きな一部屋に、師匠たちは暮らしている。窓はないが、壁の一部が大きく割れていて、その割れ目の奥から、陽の光が届くようになっていた。中央にかまどがあり、火が焚かれていた。
寝室には、机や、棚や、寝台がぐるりと並べられている。小さい頃から数え切れないほど遊びに来ているので、その配置は覚えていた。空になったシグナとクレハの寝台を見て、両手に勝手に力が入った。
オルバス師匠は、壁の一角、入って来た廊下の反対側を指さした。
「あそこだ」
そこには長い廊下が見えていた。光が届かず、奥は見えない。
「……あれ？　師匠、この家に、あんな廊下ありましたっけ？」
記憶では、あそこには本棚が置かれていた筈だ。その棚は、横にずらされていた。
「ずっと、塞いで隠していた。シグナもクレハも、知らない道だ」
空間を横断し、その廊下に一歩踏み入れる。その時、師匠は思いを吐くように言った。
「ここに入るのは、五年振りだ」

「わあ……！」
思わず声が漏れる。廊下の奥には、美しく、静謐な空間が広がっていた。
師匠たちが暮らしている部屋よりも、一回り小さな、円形の広間。周囲の壁自体がぼんやりと発光し、部屋を青白く染めている。

床には薄く水が張られている。水が光を反射し、丸い翼を模した装飾が施された天井に、揺れる水面を映し出していた。

部屋の中央には、円形の床が水面の上に出ていた。水に沈んでいる部分の床は一面に細かな装飾が施されていた為、円形の床はまるで珊瑚に囲まれた島のように見えた。僕たちが立っている広間の縁からは、ゆるやかな下りの階段がその島まで続いていた。島はとても小さく、大人が三人立てるくらい。

そして、その島の真ん中に、それはあった。

「〝転位門〟なの！」

ノイが叫び、一直線に飛んでいく。

その形や、縁に彫り込まれた複雑な装飾は、塔の遺跡や、僕の家の奥の広場で見た物と、同じように見えた。

僕と師匠が追いつくのも待たず、ノイは門に辿り着き、それに触れる。すると、石に彫り込まれた文字のような物がぼんやりと光り、続いて、門の内側が光の膜に覆われた。ノイが驚きと喜びをない交ぜにした表情で僕に振り返る。

「まだ機能してるの！　動かすことが出来れば、〝テラ〟に戻れるの！」

「ホントに!?　やった!!」

僕は思わず階段を一足飛びで下り、ノイの側に駆け寄った。

「動作を確認するから、ちょっと待っててなの！」

ノイは両手を門にかざし、そして複雑に動かし始めた。

それを見ていると、ふいに肩に手が置かれた。すぐ横に師匠が立っていた。

「……五年前のことだ」

〝転位門〟を見つめながら、ゆっくりと話す。

「それまで、私はこの空間を瞑想の為に使っていた。しかし、あの日、この門が突然光りだし、そして、その光の中から、男児と女児が飛び出してきたのだ」

「……それって！」

師匠は僕には答えず、すっと目を細める。何か、懐かしい物を見つけたように。

「どうやら、男児の方が女児を連れて、どこか、いや、何かから逃げてきたようだった。二人とも門を抜け出るなり床に倒れて、そして気絶してしまった。私は興味本位で、門から漏れる光の中に頭を通してみた」

師匠は目を閉じる。ひんやりとした空間の中に、少しの沈黙が訪れる。

「美しい光景だった。石と緑が調和した所で、鳥が歌っていた。遠くに巨大な塔が見えた」

——〝庭園〟だ。

「私は、そこは人間が立ち入っていい場所ではないと思い、すぐに首を引き抜いた。すると、光はすっと消え、ただの門に戻ってしまった。私は急いで二人の子供を担ぎ上げ、村

の人たちに看護をお願いした。二人のことは、浜辺に流れ着いたと嘘を言った。門の向こうのことを説明するのは難しかったし、またそうすべきではないと思った。今となっては、何故そう思ったのかは思い出せんが。そして、気絶する前の記憶を二人が失っていると分かって、私は二人を引き取ると決めた。それは、彼らを見つけた私の責任だと思ったのだ。この空間は封印した。時期が来るまでは、クレハにもシグナにも、教えないつもりだった」

師匠は振り返り、廊下を見る。五年前、気絶した二人を抱きかかえて歩いた道を。

「二人を村に運んでいる最中、男児が目を醒ましかけてな、女児の手を強く握り、そして小さく『クレハ』と呟いた。なので、それを女児の名前とした。男児の方は『伝える者』という意味の古い言葉である『シグナ』と名付けた」

オルバス師匠はそこまで話してから、ゆっくりと息を吐いた。

「二人とも、立派に育ってくれた。剣を振るうことしか能のないこんな私を、父親として慕ってくれた」

水面が反射する光の加減か、師匠の顔が少し老いたように見えた。その顔を、ゆっくりと僕に向け、そして言う。

「ナユタ。頼む。シグナとクレハを連れて帰ってきてくれ。私の、大事な子供たちを助けてやってくれ。本当なら私が自分で行くべきなのだが、今の私には無理だ」

包帯が巻かれた胸に視線を落とす。

「お前が、頼りなのだ、ナユタ」

僕は、答えを迷わなかった。

「オルバス師匠。必ず、二人を連れて帰ります」

〝転位門〟の側で手を動かしているノイの方に向かう。

「どうだい、ノイ」

ノイは笑顔で振り返る。

「いつでも行けるの！」

「よし、行こう！」

はやる気持ちを抑えて〝転位門〟に歩き出した、その時。

「もう、ナユタってば、いっつもせっかちなんだから。待ちなさいよ！」

突然呼び止められ、振り返る。廊下の暗がりから、ライラが現れた。

「外に出る時は準備をなさいと、いつも言ってるでしょ、ナユタ？」

続いてアーサ姉さん。二人とも両手に荷物を抱えていた。ライラは僕の肩当てと剣、姉さんは大きな背負い袋を。

そこで初めて、僕は丸腰で〝テラ〟に向かうつもりだったのだと気づいた。顔が赤くなる。

姉さんが僕の背中に回り込んで、背負い袋を担がせる。

「日持ちのするお弁当を沢山入れておいたわ。ちゃんと食べるのよ!?」
「もう、女の子にこんな重い物、運ばせないでよね」
ライラは文句を言いながら、僕に弁当と剣を渡してくれた。
「あと、これ。旅のお守りよ」
ライラが僕の胸に何かを押しつける。見ると、それは小刀だった。頬をほんのり紅くさせたライラは、少しだけ目を逸らして言った。
「ナユタが迷いを断ち切って、早く帰ってこられるように。私が研いだんだから、なんだって切れるわよ」
僕は無言で小刀を受け取り、腰に差した。胸が、一杯になる。
アーサ姉さんとライラは、そんな僕を見て微笑んでいた。師匠も、優しく頷いた。
「しっかりやってくるのよ」
「無理しないようにね」
「……うん! ありがとう、二人とも!」
僕は装備を両手で抱えたまま、“転位門”に飛び込んだ。



第7章

決闘

NAYUTA NO KISEKI
Chapter 7

〝転位門〟を抜けて再び〝テラ〟に降りた僕たちを迎えたのは、あまりに様変わりした〝庭園〟の姿だった。

まず空。〝ヘリオグラード〟で見た時と同じく、もうそこに青空はなく、黒い空間に無数の星が浮かんでいた。そして、一つの月と、青と緑の星、僕たちの世界が浮かんでいた。

空は星空なのに、地面近くは昼のように明るく、遠くまでを見通すことが出来た。それが逆に、不自然で、気持ちが悪かった。

そして、周囲を見渡し、思わず声が漏れる。

「ひどい……」

〝庭園〟の景色は、目を背けたくなる有様になっていた。

風景のあらゆる箇所から、活力が失われていた。花壇を彩っていた無数の花はどれも茶色に枯れていた。並木の枝は悲鳴を上げているようにねじれ、先の方が黒く変色している。葉っぱは全て落ちて、寒々しい姿を見せつけていた。

あれだけ聞こえていた鳥の歌声も絶え、〝庭園〟は静寂に満ちていた。

「『再創世』が始まったからなの……」

色あせた花壇の上で、ノイは変わり果てた〝庭園〟の姿を見渡す。

「今まで〝星座球〟から〝テラ〟の全土に送り出されていた〝星の力〟を、『再創世』の準備の為に、もう流すのをやめちゃったの。だから、植物が弱ってしまっているの」

〝庭園〟の管理者であるノイは、目の前の光景を悲しそうに見つめた。

「ゼクストが〝テラ〟の〝星の力〟を完全に制御する為には、四つのマスターギアが必要だったの。だから、ゼクストは〝マスターギア〟を奪わなければならなかったの」

「なるほど……」

と、思った直後、確かそれは前に僕がノイに聞こうとした話だったと思いだす。

「あれ？　ノイ。それ、前は喋れなかった話じゃないか？」

ノイは口に手をあてて驚く。

「そういえばそうなの！　『再創世』が始まったから機密指定が解除されたんだと思うの」

「ゼクストはその〝星座球〟の所にいるのかな？」

「多分、そうだと思うの。〝星座球〟は、〝テラ〟の地下区画〝ステラリウム〟にあるの。あ、これも以前だったら伝えられなかったと思うの」

「僕らにとっては助かるね。〝ステラリウム〟には、どうやって行けばいいんだい？」

「〝ヘリオグラード〟の中に、昇降機があって降りられるの！　こっち！」

「よし、行こう！」

塔に向かって飛んでいくノイを、僕は追いかけた。

〝デストロラーベ〟を大きく迂回する道順で〝ヘリオグラード〟の中を走り、僕とノイは塔の一番奥にある部屋に到着した。広い空間を歩きながら、僕は尋ねる。

「この部屋が、昇降機？」

「そうなの。動かすから少し待っててなの」

ノイが壁に嵌め込まれた操作盤に触れると、入ってきた扉が勝手に閉まった。

四角い空間を見渡す。端から端まで二十歩はありそうな広い空間は、四隅に一本ずつ丸い柱が延びていた。ただ、天井に向かう途中で途切れているので、柱の役割は果たしていないようだ。

「それでは、出発なの」

ノイが操作盤の中の大きな突起を押し込む。と、がこん、と大きな音がして、床が強く揺れた。歯車が噛み合わさるような音が連続し、その速度が徐々に速くなっていく。床は細かく振動を続けている。

見上げると、四方の壁が迫り上がり、天井が徐々に上方に遠ざかっていくように見えた。

「部屋が、伸びてる……？」

「違うの。ナユタの立っている床が、降下しているの」

ノイの言葉を証明するかのように、四方の壁の形状が徐々に変化していった。初めは石の壁が続いたけど、次は鉄のような材質の物に変わる。時折、細い管や歯車が沢山組み合わさった機械状の物が床の下から現れては、目の前を通り過ぎ、上方に消えていった。

床が落ちていく速度は徐々に速くなり、壁の景色の変化を目で追えなくなっていく。

操作盤から離れて、ノイがこちらに飛んできた。

「〝星座球〟は一番底の底。到着までしばらくかかるの」

「そうか……。じゃあ、もう出てきていいんじゃないかな！」

と、僕はノイの肩越しに、この部屋に入った時から感じていた、人の気配のする方に向かって叫んだ。ノイが驚いてそちらを向く。

空間の四隅に置かれた柱の一つ。その後ろから、ふらりと影が離れ、人の形になる。

「だ、誰なの⁉」

ノイの驚きをよそに、その人影が一歩ずつこちらに近づいてくる。大剣を携え、顔の上半分を覆う仮面を被っていた。ノイが驚く。

「セ、セラム様⁉」

「……何故戻って来た、ナユタ・ハーシェル」

忌々しげな口調で、銀髪の剣士は仮面の底から僕を睨み付ける。

「次に会った時は殺すと言った筈だ。お前には、何も守ることなど出来ない！」
セラムは一瞬で大剣を鞘から引き抜き、横から薙ぐように斬りかかってきた。けれど、僕はそう来るだろうと思っていたので、先に体を半歩引き、剣も抜いて構えていた。
迫り来る大剣の腹に斜め下からぶつけ、力一杯打ち上げる。セラムは自分が振るった剣の勢いに流され、体勢を横に崩した。しかし素早く足を出して踏ん張り、大剣を構え直す。
僕もセラムの方に向き、構え直した。仮面の奥の瞳と、目が合う。間違いなかった。
確信を持った僕は、ゆっくりと、その剣を床に向け、構えを解いた。
「ナユタ！」
ノイが驚く。
「……なんの真似だ」
セラムが低い声をぶつけてくる。僕は、仮面に隠れた目をじっと見つめて、言った。
「まったく、いつもそうだよね」
仮面の男も、僕をじっと見つめていた。
「腕っ節が強いからって、いつも兄貴ぶって、なんでも一人で背負ってさ」
ノイが混乱して、僕と相手を交互に見ている。
「悪い癖だよ、――シグナ」
「えっ!?」

更に驚くノイ。
銀髪の剣士は暫く僕を睨み付けたまま動かなかった。僕も動じず、見つめ返した。
やがて、剣士はゆっくりと大剣を下げ、同じように構えを解いた。
「っ!!」
ノイが目を丸くして、僕と剣士を交互に見る。
剣士は、顔を覆う仮面を片手で剥ぎ取り、投げ捨てた。放物線を描いて、仮面が床に落ちる。
前髪の奥に、見慣れた眼差しがあった。ずっと前から見慣れた眼差しが。
剣士が左右に首を振る。すると、銀色の髪の毛が、まるで根元から塗り変わっていくかのように、濃い茶色に染まっていく。それも、見慣れた色だった。
そこに立っていたのは、紛れもなく、僕の親友、シグナ・アルハゼンだった。
シグナは、暫く僕を見つめた後、言った。
「気づいて、いたのか」
その言葉に、思わず笑みを零してしまう。
「これまで、何度剣を合わせたと思ってるんだい？　顔や髪の色を変えたって、太刀筋は変えられる物じゃないだろ。神殿で斬り合った時から、分かってたよ」
「ははあ、なるほどな。それはしょうがないな」

頷いて納得するシグナ。ノイはなおも混乱している。
「え？　え？　どういうことなの？　セラム様がシグナだったら、じゃあ、セラム様は？」
シグナがノイに笑いかける。快活なその表情も、見慣れた物だった。
「その両方なのさ、ノイ。お前と話すのは久しぶりだな」
「りょ、両方？」
「俺はセラム・イル・オルディーンであり、同時に、シグナ・アルハゼンなんだ」
僕は剣を鞘に収めながら聞いた。
「説明、してくれるよね？」
「ああ。ちゃんと説明しないと、お前は諦めそうにないんでな。その為にここに来たようなもんさ。ナユタ」
シグナは大剣を軽々と回して鞘に戻し、そして、語り始めた。
「もう分かっていると思うが、俺とクレハは〝ミトスの民〟、ゼクストの子供だ。俺たちは父親から託された役割を果たそうとした。つまり、「再創世」を実行するかどうかの判断をしたんだ」
「それはつまり、君たちは実行しなかった、ってことだよね？」
シグナは頷く。
「洪水が引いた後、星では人間が新たな文明を再構築しようとしていた。培ってきた知識や技術のほとんどを失いながら、それでも彼らは自分たちという種を残そうとあがいていた。俺たち二人は長い議論の末に「再創世」は実行しないと決めた。それはつまり、星がいずれ滅ぶということだ。けれど、彼らを見捨てる選択は、俺たちには出来なかった」
シグナは、小さく息を継いだ。
「だからせめて、星が滅ぶ最後の瞬間まで、人間を見守ろうと決めた。冷凍睡眠装置に二人で入り、眠りについたんだ。〝星核〟が自重に耐えきれず潰れ、星が完全に崩れ去る何千年か先まで、俺たちは眠り続ける予定だった」
長い長い穴を昇降機が下っていく中、シグナの声だけが空間に響いていた。
「ところが、五年前、突然、俺たちは強制的に覚醒させられた。ゼクストの手によってだ」
「ゼクストの⁉」
「そうだ。ゼクストは、今生きている人間たちに対して強い怒りを持っていた。一五〇〇年前、自分たちの驕りによって一度は世界をも滅ぼしかけたという事実を忘れ、愚かにも醜く争いを続けている人間たちにな。それで、今度こそ〝ミトスの民〟の使命、「再創世」を実行すると決めた。そして、その権限を持っている俺たちを眠りから醒まさせたんだ」
僕は、シグナの言葉に引っかかりを感じていた。何かが、おかしい。シグナは続ける。
「突然目を醒まし、混乱した俺は、クレハを抱きかかえて逃げた。そして〝転位門〟に飛び込んだ。あとは、大体知っているんだろう？」

「ああ。でも、そうなると、ゼクストの側にいた、セラムはなんなんだい？」
「それはちょっと話が複雑でな。〝転位門〟をくぐった時、門の動作が不完全だったのか、俺という存在が二つに分離しちまったんだ」
「分離……？」
理解出来ずにいる僕を見て、シグナが肩をすくめる。
「まあ、信じられないだろうが、ありえない話じゃねえ。〝ミトスの民〟は、人間の言葉で言うと、霊的な存在に近いんだ。肉体は魂の現し身に過ぎず、魂には本来形はない。魂が二つに分かれれば、現し身も二つ出来上がるって寸法さ」
「現し身が二つ……」
「そうだ。片方は〝テラ〟に残り、セラムとしてゼクストに従った。もう片方は残され島に渡り、シグナと名付けられて、クソオヤジの元で育った訳だ。そして塔の遺跡で、俺たちは再会した」
シグナの瞳がすっと細く、鋭くなった。
「セラムと剣を交えた時、どうしてもあいつと決着をつけなきゃいけないと感じた。それで、魂に突き動かされるみたいに後を追った。今考えると当然だな。目の前にいたのは自分だったんだから。俺たちは自分の半身に再会したんだ」
「……それで、また一つに戻ったっていうこと？」
「そうだ。〝テラ〟に来て、すぐに融合を果たした。分かれていた間の記憶を共有し、俺が本来すべきことを、理解したんだ」
「本来、すべきこと？」
「もちろん、『再創世』だ」
「っ!!」
ノイが驚いて体を震わせる。僕は、じっとシグナを見た。シグナは笑みを作る。
「再びセラムと一つになることで、俺は〝ミトスの民〟の使命を思い出した。ミトスの民は星を渡り、星を守る民だ。今ここに〝星の力〟を失い、滅びようとしている星がある。我らが為すべきことは一つ。『再創世』によって星を再生させるんだ」
「それによって、沢山の人間が死ぬ。君とクレハは、彼らを守る為に、『再創世』をやめたんじゃなかったのか？」
「人間と星。より貴重な物がどちらか。〝ミトスの民〟にとって、それは自明なんだ、ナユタ」
少しの間、僕たちの間に沈黙が下りた。昇降機の動く音はとても大きい筈なのに、耳に入ってこなかった。
やがて、シグナは顔から表情を消し、言った。
「では、これがシグナ・アルハゼンとして、ナユタ・ハーシェルの長年の親友として、俺

がお前にしてやれる最後の警告だ。ナユタ。お前の世界に帰れ。そしてその世界が消え去る瞬間まで、大切な人と共にいろ。お前には、教える物など、何もありはしないのだから」

「嫌だ」

僕は即答した。

「『再創世』なんてさせない。そこに住む幾多の人を犠牲にしてでも星を守らなきゃいけないなんて、そんな理屈は僕には分からない。それに、何より」

しっかりと、シグナの瞳を見つめて言う。

「何より、シグナに、そんなことはさせられない。君とクレハを連れて帰る為に、僕はもう一度〝テラ〟に来たんだ」

シグナはじっと僕を見返し、そして小さく息を吐いた。

「ま、お前はそう言うだろうと思っていたよ。なら、次に俺が言うことも分かるな？」

「ああ」

剣の柄に手をかける。シグナも、同じように動いた。僕は言った。

「僕たちは戦うしかない。たとえ、戦うことが、更に迷いを生むとしても——」

シグナの動きに合わせるように、鞘から剣を引き抜く。そして、僕は、島に戻るあの船の上、もうずっと昔のことのように思えるあの時、シグナが言った言葉を繰り返した。

「——その答えは、剣が決める」

それが、決闘の合図だった。

瞬時にシグナが駆け寄り、大剣を真横から薙ぎ払ってきた。考えるよりも早く体が反応し、その剣筋を叩き落とす。

剣の軌道が逸れた隙を狙って足を踏み込もうとするも、僕の動きを読んでいるのか、シグナは素早く剣を返してこちらの動きを封じ、次の打撃を加えてくる。暫くは防戦一方となった。

シグナは大剣の長さを活かして、僕の剣の間合いの外から攻撃を繰り出してくる。その為、僕の剣は大剣を弾くことは出来ても、シグナの体まで届いていなかった。大剣の返しが遅れる時に体を前に進めても、シグナは歩調を合わせて左右に動き、弧を描くように僕との距離を一定に保った。

武器が大きければ、重量や重心のせいで取り回しが難しくなる物だけど、シグナは身の丈ほどもある大剣を軽々と操り、僕に距離を詰めさせまいと、執拗に振るってくる。僕は攻め入る隙を見つけられずにいた。

「その程度か、ナユタ！」

激しい連打の後にシグナは叫び、これまでよりも強い殺気を帯びた一撃を繰り出してくる。僕は剣を斜めにぶつけて軌道を逸らす。が、大剣の勢いを殺しきれず、剣先が右上半身に迫る。

避けるには体勢を崩すしかなかった。膝から折れてしゃがむ。大剣が顔のすぐ横を突き抜けていく。刀身が肩当てにぶつかり、革で出来た肩当ては簡単に割れ、更に刃が肩を擦った。
「ぐぁっ！」
思わず声が漏れる。
「ナユタ！」
ノイが心配そうに叫ぶけれど、返事をする余裕はなかった。すぐに体勢を直し、次の攻撃に備える。肩の焼けるような痛みが、思考を鈍らせているようにも、研ぎ澄ませているようにも感じた。
「まだまだぁっ！」
痛みをごまかすように叫び、攻撃を繰り出す。シグナは瞬時に大剣を引き、応戦した。
再び打ち合いが始まる。けれど、僕は直感していた。
このままでは、負ける。
剣の腕前では、僕はシグナに敵わない。シグナには、剣士として天性の才能があった。今は互角に戦えているかもしれない、けれど、僕はこれが精一杯なのに対し、シグナにはまだ余裕がある。立ち回りがこれ以上続けば、やがては僕が押し負ける。
僕の思考が表情から漏れたのか、シグナが叫ぶ。
「覚悟ある者との差だ、ナユタ！　お前には俺を殺せない！」
そんなことは分かっていた。僕にシグナを殺せる訳がない。
「もう、諦めろ！」
でも、言葉は口を突いて出てくる。
「嫌だっ！」
シグナは強い。
けれど、諦めるつもりはない。
その時、あの船の晩にシグナが言った言葉を、思い出した。
――酔っぱらい親父共の前でやる余興だろうが、魔獣と一対一での殺し合いだろうが、剣士が剣を握った時、目指すべきは、常に一つしかない――
そうだ。目指すべきは、常に一つしかない。
勝つこと。勝って生き残ることだ。
僕は、ここで勝たなきゃいけない。勝たなきゃいけないんだ。
――その為なら、あらゆる状況を利用する。使える物はなんでも使う。反則だって？　知

ったことか。規則を守って死ぬよりも、規則を破って生き残ることを剣士は選ばなきゃいけない――

そうだね、シグナ。その通りだ。あらゆる状況を利用し、使える物はなんでも使う。そして、相手を殺すことだけが、勝つ方法じゃない。

シグナが叫ぶ。

「諦められぬなら、せめて、俺の手で死ね！」

渾身の力を込めた大剣の横薙ぎを、剣で受け止める。が、体ごと弾き飛ばされる。剣が手から離れて宙を飛び、僕は床に転がる。

「剣を捨てたな！　これで終わりだ！　ナユタ・ハーシェル！」

まだだ。まだ終わりじゃない。

僕は転がりながら、床に落ちていた割れた肩当てを掴む。剣を手放したのは、そうしないと肩当てが掴めなかったからだ。

そして、瞬時に体を起こし、肩当てをシグナの顔めがけて投げつけた。

「なっ⁉」

シグナは一瞬迷いを見せ、飛んでくる肩当てを大剣で叩き落とした。けれど、その一瞬の間に、僕は地面を思い切り蹴って、シグナに飛びかかっていた。

大剣を振り下ろしたシグナが、突進してくる僕に気づき、驚愕に顔を歪める。けれど、もう遅い。僕はシグナの両肩をがっしり掴み、そのまま渾身の頭突きを食らわせる。

「ぐぁっ⁉」

不意を突かれたシグナがよろける。間髪入れず膝の裏から足を掬い上げて転ばせる。シグナはすぐに起き上がろうとするも、僕は押さえ込むように馬乗りになり、そしてその首筋に、腰に佩していた小刀をぴたりと当てた。

「……っ！」

シグナは動きを止め、黙ったまま、僕を見上げている。僕はシグナの目を見て言った。

「僕の、勝ちだ」

シグナは僕を強く睨み付けた。そして、まるで僕を叱るように言った。

「……お前が飛びかかって来た時、俺が剣を少しでも返していれば、その首は飛んでいた。何故あんな無謀なことをした？」

「勝つ為ならなんでもするってシグナ言ってたろ。それを実践してみたのさ」

「俺はお前を殺そうとしたんだぞ！」

「いいや。シグナには僕を殺せない」

僕が自信を持って断言すると、シグナの目が大きくなる。僕は続けた。

「殺すつもりなら、肩当てなんか無視して斬れば良かったんだ。でも、そうはしなかった。

シグナは、ジョブキを叩き落としたんだよ」
シグナは呆けたような顔を僕に向ける。
「……俺がそうすると、確信していたってのか？」
「当たり前じゃないか。長い付き合いだろ」
僕はそう言って笑うと、首筋から小刀を離した。そして、それをゆっくり、腰に差し戻した。ノイが驚いて叫ぶ。
「ナユタ⁉」
僕は立ち上がり、手を差し出した。シグナは僕を暫く見つめた後、僕の手を取り、ゆっくり体を起こした。その瞳からは、もう殺意は消えていた。
手を離してもなお、シグナは僕をじっと見ていた。そして、
「ハッ」
我慢出来なくなったのか、笑みを零した。僕も思わず笑ってしまう。二人とも笑いが止まらなくなって、お腹を抱えて笑い合った。
混乱しているノイを余所に、僕たちは笑い続けた。やがて、笑いすぎて出てきた涙を手袋で拭いて、シグナは言った。
「ま、こんなもんだな」
そして、ふう、と息を吐く。
「ナユタの本気の力は十分に分かった。これなら、いけるだろ」
シグナの「そうだろ？」という視線を受け止めて、僕は答える。
「そうこなくっちゃ」
そして、また笑い合った。状況が未だに掴めないノイが、僕の側に飛んでくる。
「あのあの、どういうことなの……？」
僕は答えた。
「ノイ。シグナは最初から、ゼクストに従うつもりなんかないんだよ」
言われて、シグナは茶色の髪を掻き上げて「たりめーだろ」と言った。
「俺様が、あんなイカれた野郎の言いなりになんか、頼まれたってなる訳がねえ」
「え⁉　え⁉　え⁉」
なおも混乱するノイ。シグナは鼻をこすり、少し照れたように言った。
「『再創世』は、確かに〝ミトスの民〟の使命だ。けれどそれは、単に星を救うというだけの話じゃない。そこに生きる生命も救わなきゃ、使命を果たしているとは言えない。ゼクストのやろうとしていることは、端からおかしいんだよ」
その時、これまで長い穴の中を通っていた昇降機が、突然開けた場所に出る。シグナはその景色を見て言った。

「これが、その証拠だ」
外に広がっていたのは、巨大な街だった。見渡す限りに建物が広がっていた。帝国の首都だってこんなに大きくないだろうってくらい、それは巨大な都市だった。見たこともないほど高い階層の建物や、それ自体が光を放って道路や周囲を照らしている建物もあった。どれだけ見ていても飽きないほど、それは美しい光景だった。
「ここは、〝星都レクセンドリア〟と呼ばれる筈だった空間だ」
シグナが、街の光景を見下ろしながら言う。昇降機はなおも下降を続け、先ほどまでは遥か足下に見えていた街にどんどん近づいていく。
そして、違和感に気づく。こんなに美しい街なのに、そこには人の姿がなかった。どこまでも続く道路にも、何階建てだか分からない高層建造物にも、人も動物も、植物すらも、見えなかった。完全なる無人の都市だった。
「当初の予定では、〝大洪水〟が起きる前に、ここに人間を避難させることになっていた」
「……ゼクストの遺言を聞いたよ。昨日、〝星の欠片〟が見つかったんだ」
シグナは少しだけ驚いたように目を大きくし、「そうか」と小さく呟いた。
「なら、話が早いな。〝星核〟が致命的な傷を負い、星の再生の為に「再創世」の実行が不可避だと分かった時、〝ミトスの民〟は、星に生きるあらゆる生命体を、〝方舟〟に乗せて星から待避させる計画を立案した」
シグナは足下を指さす。
「この〝テラ〟も〝方舟〟の一つだ。〝方舟〟は〝ミトスの民〟が星々を渡る為に使う星間移民船なんだが、まあそれはどうでもいいな。〝方舟〟に乗せる「あらゆる生命体」には、もちろん、人間も含まれていた」
シグナはほとんど目の高さまで迫ってきた都市に向けて手を広げた。
「この都市は、失われゆく大陸レクセンドリアにあった都市を模して、「再創世」にかかる長い長い時間を人間が過ごす為に作られた場所なんだ。けれど、計算がくるった」
「計算？」
「〝大洪水〟が、予測よりも遥かに早く発生してしまったんだ。その為、〝方舟〟はこの〝テラ〟を除いて、飛び立つことも出来ずに全て水に沈んだ。唯一〝テラ〟が無事だったのも、偶発的な事故のようなものでな。それだって、運良く乗り込めたのは〝ミトスの民〟である俺たち三人だけ。〝テラ〟はその三人と、事前に運び込んでいた動植物だけを乗せて、星から離脱した」
シグナは悔しそうに、下からせり上がり、上に消えていく無人の都市を見つめた。
「人間は、自らの過ちによって自分たちが住む星を滅ぼそうとしていた。けれど、それでも、〝ミトスの民〟は、自分たちが導いてきた人間という存在を愛していたんだ。〝ミトスの民〟は、人間に憎しみを抱いてはいないし、滅ぼしたいとも思っていないんだよ」

その言葉は、〝星の欠片〟に記録されていた、ゼクストの言葉と同じだった。
　シグナは、僕とノイの方を向き直した。
「セラムと融合して一つの体に戻った俺は、かつての記憶を思い出した。だからすぐに、ゼクストの言っていることも、やろうとしていることもおかしいと気づいた。けどな、あいつがその体に宿している〝星の力〟はあまりに偉大だった。あの力に守られている以上、いくら俺の腕でもゼクストは倒せない」
　己の非力さを苛むように、拳をぐっと握る。
「だからな。ゼクストの命令に従うフリをして、機会を待っていたんだ。奴を倒せなくても、最後の最後で『再創世』を阻止してやる。そうすれば、最悪の事態は回避出来るだろうってな」
　やがて、昇降機は都市よりも下部に滑り込み、また四方が壁に囲まれた穴の中を進み出した。轟音が体を包む。
「ナユタから〝マスターギア〟を奪ったのは、出来れば〝ミトスの民〟の問題に、お前を巻き込みたくなかったからなんだ」
　シグナは頭をかき、バツが悪そうに僕を見た。
「悪かったな」
「もう、水くさいんだから」
　ノイがまだ複雑な顔をして、シグナをちらちら見ている。
「じゃ、じゃあ、セラム様、じゃなくて、シグナは、『再創世』には反対なの？」
「あたりめえだ」
　威張るように言うシグナ。
「アーサやクソオヤジ、それに残され島の奴らには、返しても返しきれない恩義があるんだ。それを見捨てるなんて、出来る訳がねえ。みんな、俺様が助けてみせる」
　僕はシグナの顔を覗き込むようにして、にやりとした。
「それに、ライラも助けてみせる、だろ？」
　急に、それまで凛々しかったシグナの顔が真っ赤になり、慌てたように目を大きくする。
「ば、馬鹿野郎！　そっ、そんなの関係ねえよっ！」
　とても関係ないようには思えないほど声がうわずっているシグナは、僕を睨み返し、責めるような口調で返した。
「それよりナユタ、お前はなんで他人のことにはそうやって細かい所まで気づくのに、自分についてはそこまで鈍感なんだ？　お前こそライラはどうなんだよ。それにクレハは」
「え？　なんの話？　ライラとクレハが、どうかしたの？」
　シグナは呆けたように僕を見た後、大きくため息をついた。何故か、ノイも一緒になってため息をついている。え？　え？　なんなの？

「まあいいや。それよりこれからのことを話そう、ナユタ。「再創世」を止める方法だ」
表情に凛々しさを取り戻したシグナに言われて、僕は気を引き締めて頷いた。そして、次のシグナの口から出た言葉に驚かされる。
「『再創世』の最後の鍵はな、クレハなんだ」
「クレハが？」
「ああ。これは俺も想定外だった。『再創世』を実行する為には、俺だけいればいいもんなんだと思い込んでいた。クレハを巻き込むつもりも、俺はなかったんだ」
悔しそうに顔を歪めるシグナ。
「ゼクストの野郎、万が一を考えて、セラムの記憶を弄ってやがったんだ。だから融合しても、俺はそれに気づけなかった。『再創世』にはクレハの力が必要なんだ。あいつが持っている〝ミトスの洸翼〟がな。ほら、お前も見ただろ。クレハの背中から伸びる黄金色の光の翼を」
残され島に戻される直前、〝ヘリオグラード〟の頂上での光景を思いだす。
「あれが、〝ミトスの洸翼〟？」
「そうだ。あれを持つ者だけが、『再創世』の実行を司ることが出来るんだ。ただ、その為にはクレハに、〝ミトスの民〟としての記憶と力を取り戻させなきゃいけなかったんだ」
「僕が、それを手助けしてしまったってことだね……」
僕が無力だったせいで、クレハを巻き込んでしまったのだ。後悔の念が心を重くする。
シグナは僕の肩に手を置いた。余計な言葉をかけてこないことが、逆に有り難かった。そうして欲しい時には黙っていてくれる彼のことが、僕は好きだった。
「逆に言えば、クレハがいないと、ゼクストにも「再創世」は実行出来ねえ。だからクレハは今、〝星座球〟を動かす贄として捕らわれている。「再創世」を阻止する為には、あいつを、助け出さなきゃなんねえんだ」
「分かったよ、シグナ。手伝わせて、くれるよね？」
触れていた手が持ち上がり、僕の肩を強く叩く。
「もちろんだ。相棒！」
とても懐かしい言葉を聞いた気がして、訳もなく嬉しくなってくる。
と、ノイが心配そうにシグナを見た。
「でもでも、シグナはいいの？　だって、相手は仮にもお父さんなのに……」
「いや、違う」
シグナは、しっかりと答えた。
「あいつは、父親なんかじゃないんだ。あいつは――」
その時、昇降機が一際大きな音を立てて、動きを停止した。
四方の壁のうち一方が開いていて、光が差し込んでくる。背の高い鉄骨が聳え立ち、そ

の向こうに道が続いているように見えた。
そして、僕たちの到着を待っていたかのように、鉄柵が、左右に開かれていった。



第8章

星の座する処

NAYUTA NO KISEKI
Chapter 8

昇降機の外は、石造りの長い渡り廊下が続いていた。廊下の左右に円柱が等間隔に並び、三角の屋根を支えている。オルタビアで見た神殿と、造りが似ていた。

「ここが、〝ステラリウム〟……？」

「そう。〝星の座する処〟だ」

そう言って、シグナが昇降機の外に出る。僕とノイもそれに続いた。廊下を歩きながら、左右に広がる不可思議な光景に目を奪われる。

渡り廊下の外は、上も下も、果てが見えないほど広大な空間だった。

そして、その空間には、光が満ちていた。

小さな光の粒が、様々な色の光の粒が、その空間に満ち溢れていた。それはとても数え切れないほどの、膨大な量だった。見渡す限りの空間に、光の粒が舞い踊っていた。

不思議と、眩しくはなかった。ただ、綺麗だった。

それぞれの色の光の粒が、帯をなして、うねり、混じり合い、新しい色に変わり、すぐに分かれ、別の光の帯に合流していた。ノイが呟く。

「〝星の力〟が、この空間に充満しているの……！」

光の動きには秩序がなく、混沌としていた。まるで、子供が絵の具を撒き散らしているようでもあった。

けれど、その光景は、見ているだけで涙が零れそうな程、美しかった。

見た目ではない、光の持っている生命力が、僕に語りかけてくるようだった。

僕の目に映っていたのは、文字通り星の中から生まれ出る力そのものだった。万物の源が満ちあふれ、縁から零れ落ちた片鱗が光や色に変換されて僕の視界に襲いかかってくるようだった。

美しすぎる光の絵画は、しかし、僕に恐怖を感じさせた。

この光景を長く見続けると、その美しさに目を潰されてしまうのではないかという感覚に襲われた。そう感じてしまうくらいに、それはあまりに強力で、強大な存在だった。

かつて、人間は、この力を自らの物として自由に操ろうと試みたと言う。しかし、それは確かに人間の驕りだったのではないかと、僕には思えた。

飲み込まれそうになる心を抑えて、僕は前を向いた。渡り廊下が終わろうとしていた。

それほど大きくはない、円形の広間だった。渡り廊下と同じく壁はなく、床の縁に等間隔に並んだ円柱が円錐の屋根を支えていた。

中央に、装飾が施された背の高い石の椅子があった。〝ヘリオグラード〟の頂上で見たのと同じ玉座だった。そして、そこにあの時と同じ、杖の男が座っていた。

「……何故、人間の小僧が、生きてここまでやって来ているのだ？」
ゼクストは、僕を見て不思議そうに言い、そして、シグナに視線を向けた。
「この人間も、それにノイも、始末しろと言った筈だが。セラムよ？」
シグナはじっとゼクストを見つめ返し、そして、肩をすくめた。
「悪いな。俺はもうセラムじゃねえんだわ」
「なに？」
次の瞬間、シグナは体勢を下げてゼクストに突進した。
既に鞘から抜かれた大剣は両手で構えられ、切っ先は前方の玉座に向けられていた。ゼクストは微動だにせず、突進してくるシグナを見ている。
ゼクストまで五歩の距離で、シグナは地面を蹴って宙に飛んだ。突進した速度をそのまま剣に乗せ、一気に大剣を前方に突き出す。
「とおりゃあっ！」
……が、そこまでだった。
「えっ!?」
思わず僕は叫んだ。
剣先は寸分違わずゼクストの顔、その眉間に突き刺さった。
眉間に潜り込んだのは、剣先の先端のみ、爪程の長さに過ぎなかった。シグナが渾身の力で見下を言の葉に、まるで雷鳴の雷に囚まれたかのように、そこで止まっていた。
そしてゼクストは眉間に剣を撃ち込まれた状態のまま、退屈そうにシグナを見て、そして言った。
「くだらぬ」
ゼクストは右の手を上げる。同時にその手から稲妻が湧き上がり、シグナを包み込んだ。
「ぐわぁっ！」
シグナは剣ごと弾き飛ばされ、床に転がった。その場で呻く。
ゼクストはゆっくりと立ち上がり、シグナを見下ろす。眉間に、小さく黒い穴が空いているのが見えた。
「血迷ったか、セラムよ。実の父に剣を向けるなど――」
「違う！　お前は実の父なんかじゃない！」
地面にうずくまるシグナが、ゼクストの言葉を強く遮る。
シグナは、痛みを堪えながら床の上で体を起こし、無表情のゼクストを見上げる。
「お前は、俺の父親じゃない。お前は、ゼクスト・ジ・キュリアス・ドミナドールでは、ないんだよ」
ゼクストは、シグナの言葉を「ハッ」と笑い飛ばした。
「何を戯れ言を――」

その時。
小さな、音が聞こえた。
ゼクストが異変に気づき、自身の眉間に指を沿わせる。
と、今度は、はっきりと、パキリ、という音が耳に届いた。僕は驚いて音のした方、ゼクストの顔を見つめた。
ゼクストの顔面にひびが入っていた。
シグナの剣が穿った穴を中心に、まるで、陶器がひび割れるかのように、黒い筋が顔の上に何本も走っていた。
パキリパキリと音がする度に、ひび割れが徐々に顔全体に広がっていった。
シグナが立ち上がり、静かに告げた。
「お前の本当の名は〝虚無なる星核〟。お前は〝星座球〟の管理者にして、神像なんだ」
同時に、ゼクストの顔が真っ二つに割れた。顔全体を覆っていた仮面が剥がれるように、ゼクストの顔が床に落ちる。床に大小の破片が散らばる。
「あっ！」
ノイが、ゼクストの顔があった所を指さす。
そこには、様々な機械が詰まっていた。小さな歯車が幾つも回転し、カチカチと音を鳴らしながら規則的な運動を繰り返していた。小さな光が星の瞬きのように点滅していた。
僕もノイも何が起きているのか分からない。けれど、それ以上に混乱しているのは、ゼクスト自身のようだった。自分の顔があった所を両手で触り、その感触に戸惑っているように見えた。
「こ、これは、どうなっているのだ⁉」
口を失ったゼクストの困惑の声は、その機械の奥から聞こえた。
シグナが、大剣を引きずりながら僕の側まで来て、言った。
「ゼクストは、死んだんだ。〝テラ〟が星から脱出した、すぐ後にな」
――そして、私の命は、それを待てるほど長くはない。
〝星の欠片〟に記録されていたゼクストは、そう言っていた。
「俺とクレハは、ゼクストの遺志を継ぐべく、星に残った人間達を観察した。そして、アラクラン、お前に相談したんだ。〝星座球〟の管理者である、お前にな」
「わた、しに？」
「ああ。俺たちはまだ幼かったから、相談出来る相手が必要だった。〝星座球〟を管理し、『再創世』の最終的な実行を司るお前は、俺たちの話を聞いて、幾つもの案を示してくれた。感謝してるんだぜ」
シグナは小さく笑った。
「俺たちは最終的に、星の再生よりも、人間の営みを見守り続けることを選んだ。あんた

は俺たちの考えを尊重し、〝星座球〟ごと、自身を封印した。そして俺とクレハも、眠りについたんだ。俺たちもお前も、永遠に眠り続ける筈だった。星が死ぬその日まで」

「わた、しが……」

ゼクスト、いや、〝虚無なる星核〟は、シグナの言葉が受け入れられないのか、なおも顔があった部分を両手で掴み、震えるように身をよじった。

「ところが、事故が起きた」

シグナの言葉が広間に響く。

「〝テラ〟の設備が老朽化し、建物の多くが剥がれて星に落ちるようになった。これだけの長期間、宙に浮かせる設計になっていなかったんだな。で、その結果、〝テラ〟の機能の一部が破壊され、アラクラン、お前の封印が解かれ、覚醒しちまった」

「おお……おお……！」

両手をわなわなと震わせて、顔のあった所を掻き毟る。シグナは続ける。

「ところが、この覚醒は不完全だった。お前は俺たちが決めた結論を忘れ、当初与えられていた自身の役割である「再創世」の実行がまだ果たされていないことに驚き、速やかに実行に移さなければならないと考えた」

「そんな……訳が……！」

「『再創世』を実行する権限は、俺とクレハが持っていた。二人を覚醒させるのはたやすい。しかし、二人が「再創世」の実行を受け入れるかは分からなかった。そこで、お前は状況を解決する為の最適解を導き出した。すなわち――」

シグナは小さく息を吸った。

「――ゼクストの人格と記憶を自らに取り入れ、ゼクストになりすましたのさ」

「馬鹿なっ！」

シグナの言葉を遮るように、アラクランが叫ぶ。両手を広げて、高く掲げる。

「この体も、この記憶も、偽物だと言うのか！　そんなことがあってたまるものか！」

シグナは、初めて、アラクランに寂しそうな瞳を向けた。

「哀れな神像よ。お前は、元の自分の記憶すらも消し去って、ゼクストになりきったんだ」

「おおお……!!」

アラクランはうめき声をあげながら、両手で頭を抱え、体をかがめて震えた。その震えがどこから来る物なのか、僕には分からなかった。

けれど、やがて、顔を失った男はゆっくりと体を起こし、吐き出すように叫ぶ。

「……認めぬ。認めぬぞっ！」

その声からは、これまで込められていた威厳の色は感じられなかった。伝わってくるのは深い憎悪と、憤怒だった。両手を振り上げ、機械に埋め尽くされた顔をこちらに向ける。

「我はゼクスト・ジ・キュリアス・ドミナドールだ！　作り物の神像などではない！　よ

うやくここまで来たのだ！　〝ミトスの民〟の大願、『再創世』はまもなく叶おうとしている！　お前たちは偽りの言葉で我が心を惑わし、その大願を阻もうとする害毒だ！」
　シグナは小さく舌打ちした。
「アラクラン、お前は騙れちまってるんだ。思いだせ。本来のお前自身を――」
「黙れええええっ！」
　シグナの言葉を絶叫で打ち消したアラクランは、右腕をこちらに伸ばし、手を広げた。
「我の邪魔をする者は、誰であろうと、殺す！」
　アラクランの手から紫色の稲妻がほとばしり、僕たちに襲いかかってくる。
「やらせるかよ！」
　シグナが瞬速に大剣を横に構え、稲妻を剣の腹で受け止めた。四方に跳ね返る稲妻が屋根や床に当たり、音を立てて石を抉っていく。円形の空間の中で紫色の光が明滅した。稲妻に押されようとする大剣を踏ん張りながら、シグナが言った。
「ナユタ！　ここは俺に任せろ。お前は先に行ってくれ！　そこにクレハがいる！」
　アラクランが座っていた椅子の向こう、広間の奥に、渡り廊下が延びていた。
「クレハを取り戻しちまえば、〝ミトスの洗翼〟を持たないアラクランには、もう『再創世』は起こせない！」
「分かった！」

「私も行くの！」
　僕とノイは、シグナの背後から飛び出し、広間の縁に沿うように走り出す。
「逃がさん！」
　アラクランが叫ぶ。闇を埋め尽くす機械の中で、二つの赤い光がまるで瞳のように煌めいた。そして、稲妻を発する腕をこちらに向ける。しかし、その隙にシグナが走り、僕たちとアラクランの間に大剣を割り込ませる。
「お前の相手は俺だっての！」
「邪魔をするのか！　ミトスの子よ！」
　アラクランは、玉座に立てかけてあった長い杖を掴み、両手で構えた。杖全体が、紫色の稲妻に包み込まれる。その杖の先端をゆっくりとシグナに向ける。
「もうお前は私の息子ではない！　ここで果てよ！」
　シグナは大剣を構え、アラクランに向かって走った。
「生憎、最初からお前の子じゃねえんでな！　俺はゼクストの息子セラム・イル・オルディーン！　そして、俺はシグナ・アルハゼン！　剣豪オルバス・アルハゼンの一番弟子だあっ！」

長い長い渡り廊下を進むと、急に屋根が途切れ、開けた場所に出る。道はそこで行き止まりになっていた。
空を見上げる。周囲と同じく、上空も様々な色の光が渦巻いていて、どこに天井があるのかも分からなかった。
そしてそこに、それはあった。
「これが、〝星座球〟……！」
巨大な、ひたすら巨大な漆黒の球体が、頭上に浮かんでいた。
周囲を流れる光の帯が引力に抗えきれず、球体に吸い込まれていく。新たな色の光を飲み込む度に、〝星座球〟が纏っている漆黒が、より濃くなっていくように見えた。
「ナユタ、あそこ！」
ノイが指さす上空を見る。
〝星座球〟と同じ高さの所に、クレハがいた。
「クレハ！」
クレハは、空中に磔にされていた。
服が所々裂け、白い肌に痣が浮かんでいる。ぐったりと頭を下げ、目を閉じている。その背中には、黄金色に光る翼が大きく広げられ、光の鱗粉を撒いていた。
「〝ミトスの洗翼〟なの！」
「クレハッ！」
より大きな声で呼びかける。すると、クレハはうっすらと目を開ける。僕は走り寄ろうとした。途端にクレハが大きく目を開き、叫ぶ。
「来ちゃ駄目！」
え？　と思う間もなく、足下から殺気が湧き上がってくる。
反射的に横に跳んだ。
轟音と共に石の床が割れ、中から長い爪が突き出てきた。続いて腕、体、そして、頭が。
「なんだっ⁉」
オルタピアで見た神像よりも更に大きな人形が地面から現れ、僕らの前に立ちふさがる。まるで、僕たちをクレハに近づけさせまいとするかのように。
爬虫類を模したように見えるその人形は、逆三角形の顔の中に不気味に光る四つの目を浮かべ、腕を左右に二本ずつ広げている。その四本の腕全てに、鋭いかぎ爪が四本備えられていた。ノイが叫ぶ。
「〝虚無なる星核〟なの！」
「えっ⁉　アラクランはシグナと戦ってる奴じゃないの⁉」
「あっちは〝ミトスの民〟と対話する為の通信機みたいな物なの！　こっちが本体なの！」
人形の腕の一本が大きく持ち上がり、こちらに向かって振り下ろされる。慌てて横に避

ける。かぎ爪がさっきまで立っていた所を床の石ごと抉り取る。轟音が耳を襲う。

「ナユタ避けて！」

言われて、反射的に後ろに飛ぶ。すると、今度は別の腕から伸びるかぎ爪が真上から落ちてきて、床に突き刺さった。動きが速い！

四本の腕が次々に僕を叩き潰そうと、握り潰そうと、薙ぎ払おうと、襲いかかる。僕とノイはそれを紙一つ分の差で避け続ける。時折、かぎ爪が岩を握り、こちらに投げつけてくる。大きい物は避け、小さい物は剣で叩き割った。

クレハの側に行きたいのに、次々と繰り出される攻撃に、僕たちは身動きが取れずにいた。人形は四本の腕を巧みに繰って、僕とクレハの間に立ちふさがり続けた。

「っ！」

一瞬判断に迷って、横に飛ぶ間合いが一拍遅れる。攻撃は避けられたものの、地面に突き刺さるかぎ爪が、僅かに太股を掠った。衝撃的な痛みが脳天まで突き抜ける。

「ぐはぁっ！」

「ナユタ！」

頭上でクレハが叫ぶ。

うずくまっている暇なんかなかった。視界の隅に別の腕が襲いかかってくるのが見えた。前方に飛び、転がって避ける。太股から噴き出す血が石の床に散った。

軽傷だ。自分にそう言い聞かせて、太股から這い上がる痛みを忘れようとする。取り落としかけた剣をしっかり握り、次の攻撃に意識を向ける。

「もうやめてナユタ！　逃げて！　あなたが死んじゃう！」

クレハが叫ぶ。泣いているのが声から分かった。泣かせるつもりなんか、なかったのに。

「君を助けると約束したんだ！　クレハ！」

人形の攻撃を避けながらクレハの元に辿り着くのは諦めるしかなさそうだった。この人形を倒すしかない。

「ノイッ！　こいつはどうやって倒せばいい!?」

「アラクランは〝神像〟なの！　だから〝双たる巨岩〟と同じように、核を破壊すれば、機能が停止するの！」

あの巨大な石像と戦った時のことを思い出す。口の中に嵌っていた赤い石。〝神像〟の核。

「こいつの核はどこにあるんだ!?」

「あそこなの！」

ノイが指をさす方向を見上げる。逆三角形の顔に浮かぶ四つの目の上、額の所に、大きな赤い石が嵌り、ぼんやりと光っていた。

遠い。そして高い。核まで辿り着く為の足場が何もなかった。

飛んできた岩を二つ続けて叩き割りながら、ノイに叫ぶ。
「ノイ！　あの時みたいに、ここに吹雪を起こせるか⁉」
吹雪であの四本の腕の動きを止められれば、腕を伝って人形の頭部に到達出来る。
けれど、ノイは「無理なの！」と叫んだ。
「〝アストロラーベ〟の能力は〝ステラリウム〟の中には及ばないの！」
「クソッ！」
かぎ爪を避けながら、考える。
何か、方法がある筈だ！

シグナ・アルハゼンは〝虚無なる星技〟を攻めあぐねていた。
シグナは的確にアラクランの死角を狙い、大剣を突き出す。しかしアラクランは、まるで体中に目があるかのような動きでその攻撃を避け、稲妻を纏う杖で反撃してくる。攻め手を変える為に少しでも距離を置こうものなら、たちまち頭上や後方から雷が襲ってくる。
どうにもシグナが主導権を取れないまま、打ち合いが続く。
剣技において言えば、両者はほぼ互角だった。しかし、神像であるアラクランは、どれだけ剣と杖とをぶつけ合っても、疲れた素振りは全くなく、逆にシグナの方は、剣を振る度に汗を飛び散らせていた。シグナは、徐々に自分が押されていて、円形の床の端に追い詰められつつあることを自覚していた。
もはや腕を持たないアラクランの、かつて口のあった所からくぐもった、そして怒りに満ちた声が響く。
「今、『再創世』を実行しなければ、あの星は滅ぶ！　星が滅んでしまえば、貴様らが大事に思っている人間だって滅ぶではないか！　両方失うよりも、片方だけでも生き残るのであればそれを選ぶべきだ！　それこそが〝ミトスの民〟の使命！　何故それが分からない！」
振り下ろされた杖を、刹那の間隔で見切って大剣で受け止め、シグナは怒鳴り返した。
「星を救うという〝ミトスの民〟の使命は、星と、そこに宿された生命を救うことなんだ！　星だけ生き延びたってしょうがねえんだよ！　親父だってそれを望んでいた筈だ！　それが分からないお前は不完全なんだよ、アラクラン！」
「だまれぇっ！」
怒りにまかせて続けざまに落とされる雷を、指一本の距離で避ける。
床の端までは、あと六歩。その先は、数多の色の光が、シグナを待ち受けるようにうねっていた。

幾多の攻撃を避けながら、僕はまだ核に到達する方法を思いつけずにいた。
「ノイに気候を変えてもらうことは出来ない。ならどうやってあそこまで上れば――」
僕もノイのように空を飛べれば簡単なのに。いや、そんな意味のないことを考えている暇があったら――
――その時、頭の中で閃く物があった。そうだ。ノイだ。
上空から投げ落とされる岩の塊を避けながら、必死に僕に付いてくるノイを見る。
「ノイ！」
「どうしたのナユタ！　足の傷が痛むの⁉」
それについては思い出させないで欲しかった。正直、気が抜けたら倒れてしまうだろう。
僕は叫ぶ。
「〝魔法〟だ！　君の〝魔法〟を使うんだよ！」
「む、無理なの！　まだ元の力は戻ってなくて、前に見せた奴しか使えないの！　でも、あれでは核を破壊出来るほどの力は出ないの」
「核を狙う必要はないんだ！」
腰を低くして、横に薙ぎ払われる腕を避けた後、僕は覚悟を決め、叫ぶ。
――〝魔法〟を使って、僕を核の所まで、吹き飛ばしてくれ！」
ノイは一瞬呆けた顔をした後、目を丸くする。
「なっ、何を言ってるのナユタ⁉　そんなことしたら、ナユタも無事じゃ済まないの！」
「他に方法がないんだ！」
後ろに飛んで爪を避ける。左足を床に付けると、激痛が全身を襲う。けれど僕は無理矢理笑顔を作ってノイを見た。
「僕は、大丈夫だから！　ギリギリまであいつに近づいて合図をするから、思いっきり〝魔法〟をぶつけてくれ。いいね⁉」
「……ホントに、大丈夫⁉」
「約束する！」
ノイは目をぎゅっと瞑って、頷いた。
「……分かったの。ナユタを信じるの！」
「ありがとう、ノイ！　じゃあ、しっかりついて来てね！」
「はいなの！」
僕は全速力で人形に向かって走った。
「うぉおおおっ！」
たちまち二本の腕が壁を作るように目の前に落ちてきた。地面と腕との僅かな隙間に足

から滑り込み、腕をやり過ごしてからすぐ体を起こす。背後に轟音を聞きながら、走る。見えないけど、ノイがすぐ側にいることが、僕には分かった。
　三本目の腕が、僕の背丈よりも大きな岩を投げつけてくる。速度を殺す余裕はない。真っ直ぐ前に飛び込み、岩を避ける。
　体勢を直して顔を上げると、最後の腕から伸びるかぎ爪が目の前に迫っていた。既に避けられる間合いではなかった。
「うおりゃあああああっ！」
　渾身の力で剣を振り下ろして、かぎ爪の一本を叩き折る。出来た隙間にこちらから飛びこんで、床に転がった。
　何回転もした後起き上がる。石が砕ける音に振り返ると、地面に横たわる二本の腕が、まるで壁が迫って来るようにこちらに向かっていた。腕と自身の体とで、僕を押し潰すつもりだ！
「ナユタッ！」
　叫ぶノイの声を背中に聞きながら、僕は人形を見上げ、核までの距離を測り、叫び返した。
「ノイ、今だ！　頼む！」
「わわわ、分かったの！」
　ノイが僕から少し距離を取り、空中で腕を組む。桃色の光がノイを中心に広がる。急激に、そこに力が集まっていくのが伝わってきた。
「〈李の閃光〉！」
　瞬時に、背中を鈍い衝撃が襲った。
　息が、出来ない、と、思った時には、もう体が空中に投げ飛ばされていた。
　狙い澄ましたかのように、僕の体は綺麗な軌道を描いて、人形よりも上方に持ち上がっていた。このまま行けば、核に辿り着ける筈だ。
　けれど、〝魔法〟の攻撃の威力は、僕の想像を遥かに超えていた。
　体がバラバラになりそうな感覚を必死に押さえつけていると、徐々に頭の中が白くなっていくのを感じた。
　あ、不味い、これは気絶する。
　必死に意識をつかみ取ろうとするも、何もかもがするすると解け、抜け落ちていく。
　指に力が入らない。このままでは剣を手放してしまう。剣がなければ核を壊せないのに。
　頭では分かっているのに、体が動かない。意識と肉体がどんどん離れていく。
　そしてその意識も、もう限界だった。
　意識を保て、意識を保、て、意、識、を――

「この馬鹿ナユタ！　最後まで頑張りなさいよっ!!　じゃないと許さないからっ！」
ハッと目を開ける。
視界の隅で、涙目になって僕を見つめているクレハが見えた。そうか。クレハの声が、聞こえたんだ。
そうだ。最後まで頑張ろう。この状況で、僕は思わず笑みがこぼれそうになった。星を救うのも、人間を救うのも、もちろん大事だ。けれど、僕は、クレハを助ける為に、ここまで来たんだから。
両手で剣の柄をしっかりと握る。上昇が終了し、体がゆっくりと落下し始める。眼下には、僕を見上げる逆三角形の顔。その額に、赤く光る石が嵌っていた。
僕は、剣を構えた。

シグナは床の端まで追い詰められ、ついに丸屋根を支える柱に背を付けた。
「終わりだ！　セラム、いや、シグナ！」
アラクランは両手で握った稲妻を纏う杖で、最後の一撃を放った。シグナは、体を動かすだけの場所の余裕がなく、首をずらしてその突きを紙一重で避けた。杖が柱に深々と突き刺さる。稲妻がシグナの頬をかすめ、鮮血が散った。
「[illegible]！　[illegible]！」
確かに、シグナの命は風前の灯火に思えた。
しかし、アラクランを見返し、シグナはにやりと笑った。
「何が可笑しい！」
「ようやくこっちの番が来たと思ってな！」
シグナはそう言い放つと、真っ直ぐに突き刺さったアラクランの杖に足をかけ、それを踏み台にして宙に飛んだ。そして柱を蹴り、更に上へと跳ぶ。
「なっ!?」
シグナは空中で一回転するようにして、アラクランの頭上高くに浮かび上がった。
アラクランは瞬時に迎え撃とうとした。が、柱に深々と突き刺さった杖を抜くのに、一瞬の遅れがあった。
「これを見越していたというのか!?」
空中でアラクランを見下ろしながら、シグナは言った。
「あんたは俺の親父じゃない。でも、親父にもう一度会えた気がして、嬉しかったよ」
シグナは、剣を構えた。



僕は、剣を持ち上げた。落下の威力と全体重を、剣に込める。

〝虚無なる星技〟。お前を倒して、クレハを助ける。

僕は叫んだ。

「これが、人間の――」

シグナは、剣を持ち上げた。落下の威力と全体重を、剣に込める。

〝虚無なる星技〟。やるべきことを間違えた、哀れな神像。

彼は叫んだ。

「これが、〝ミトスの民〟の――」

僕たちは、あらん限りの思いを込めて、その剣を突き刺した。

「――あの星に生きる者の出した答えだ！」

二つの場所で、二つの雄叫びが響き渡り、そして、沈黙した。

〝神像〟は断末魔のような叫び声を上げ、激しく体を震わせ、けれど、それもすぐに止まった。僕の剣が深々とささった赤い石は、もう光を発してはいなかった。僕は、彫刻のように動きを止めた人形の、頭の上に立っていた。

　管理者を倒した為か、宙に浮かぶ〝星座球〟を覆っていた漆黒が、徐々に薄まっていくのが見えた。まるで、アラクランによって歪められた使命を持っていた〝星座球〟が、本来の役割に戻ろうとしているかのように、僕には見えた。

「キャアッ！」

　叫び声に頭上を見る。空中に繋ぎ止められていたクレハが、突然楔が外れたかのように、体勢を崩し、地面に落ちていこうとしていた。

「クレハッ！」

　頭よりも体が先に動いた。僕は人形の顔を蹴り、ほぼ真横に向かって飛んだ。落下してきたクレハを包み込むように抱きしめる。それでも、地面まではまだ致命的な距離があった。なんとか僕の体を下にして落ちれば――

「まったく、ナユタは無理しすぎなの！」

　誰かに体を引っ張られ、同時に、落ちていく速度が穏やかになる。見れば、ノイが僕とクレハの服を銜って、足をばたつかせながら引っ張りあげていた。ノイの長い歯の桃色の髪が膨らみ、光を放っていた。その光が僕とクレハを包む。心に温かさを感じながら、地面が近付いてくるのを見ていた。

　ゆっくりと、石の床に着地する。人形が繰り出したかぎ爪によって、石の床はどこも抉れ、めくれ、破片が散らばっていた。

　目の前に立っている、四本の腕を広げた人形は、もう動かなかった。上空に浮かぶ〝星座球〟は、徐々に黒い色を失い、七色の〝星の力〟の塊に変わりつつあった。

　そして、僕の胸の中には、クレハがいた。

　勝った、んだ。

　そう思った途端に、体から力が抜けていった。思っていた以上に、体を痛めつけていたらしい。いつの間にか剣も手からすっぽ抜けてどこにあるのか分からないし、もし見つけたとしても、とてもちゃんと握れる気がしない。

　体を支える力すら失って、僕はクレハの上に倒れ込んだ。

「ちょ、ちょっと、ナユタ⁉」

　クレハが驚いて、僕の上体を抱き起こす。そして、僕の顔を見て、瞳に涙を浮かべた。

「馬鹿ナユタッ！　なんでこんな無茶な真似をしたのよ！　一歩間違えれば、自分が死んでたのかもしれないのよ⁉　人間を救っても、あなたが死んだら意味ないじゃないっ！」

そう言われて、考える。
僕はどうして、こんなにも必死だったのだろう。
やがて、その答えはとても単純なのだということを、思いだした。
上手く動かない右手で懐をまさぐり、いつも持っているそれをクレハに見せる。
「これは……〝星の欠片〟？」
「そうだよ。小さい頃、母さんが見せてくれて、僕があんまりねだったから、くれたんだ。〝眠り姫〟が、映ってるんだ」
「眠り、姫……？」
僕はこの〝星の欠片〟が映し出す絵を思い出す。何度も見たから、隅々まで覚えていた。
「〝庭園〟に柩があって、その中に女の子が眠っているんだ。銀色の長い髪が柩の縁にかかって、そこに綺麗な花が絡みついていた。とても、綺麗なんだ」
それを聞いて、——銀色の美しい髪の女の子——クレハは、瞳を大きくした。
「……え、それって！」
「僕は、その女の子が、捕らえられているんだと思っていた。なんでかは分からないけど、そう思い込んでいた。いつかその子と出会い、その子が捕らわれている世界から救い出したいと、ずっと思っていたんだ。眠る女の子の絵に、僕はそう約束したんだ」
「ナユタ……」

見下ろすクレハの瞳が、涙に滲む。ぽたりと、頬に雫が落ちた。僕は、クレハの頬に優しく触れた。手袋越しに、彼女の温もりが伝わって来るようだった。
「そして、僕は君に出会った。クレハを助けたかったんだ。ようやく、約束を果たせたよ」
「ナユタッ！」
涙を流しながら、クレハは僕の体を抱きしめた。温かかった。
クレハの肩越しに、大剣を引きずりながらやって来るシグナの姿が見えた。満身創痍の体で、けれど、僕たちを見てにやりと笑った。
「よお、上手く行ったみたいだな」
僕はなんとか笑顔を作って、右手を上げた。

第9章

星の再生

NAYUTA NO KISEKI
Chapter 9



「さて、これからどうするか、だな」
僕がクレハに支えられながらもなんとか起き上がると、シグナは石の床に出来た亀裂も気にせずどっかと座った。ノイも、近くにあった石の上にちょこんと留まる。
クレハが沈んだ顔をして言う。
「『再創世』は確かに食い止めたわ。でも、アラクランが途中まで進めた作業のせいで、〝星核〟は更に傷付けられ、星の寿命はより短くなってしまったの……」
残され島に戻った時、〝テラ〟から流れ込んでいた光の帯のことを思い出す。あれは〝星核〟を破壊する為の光なのだと、ノイが言っていた。
「もちろん、短くなったと言っても、今すぐ星が滅んでしまう訳じゃないわ。何十年か、ひょっとしたら何百年かは先かもしれない。けれど、その間、今の異常気象が続くでしょうね……」
紫色の空と雨を思い出す。残され島の人たちは、世界があんな風に変わっても、自分たちは変わらず生きようとしていた。けれど、もう世界が元に戻らないと知ったら——
「クソッ！」

シグナが片手で頭をがりがりと掻く。
「〝ミトスの民〟じゃないナユタを、ここまで危険な目に遭わせてまで頑張ったってのによ！　これじゃあアーサに申し訳が立たねえじゃねえか！」
その言葉に、思わずカチンと来た。こんな時でも苛立つ物は苛立つのだ。
「そんな言い方ないだろシグナ。〝ミトスの民〟とか人間とか、そんなの関係ない。あの星を救わなきゃいけないんだ。アーサ姉さんだって——」
そこまで言って、僕は言葉を止めた。アーサ姉さん。自分で口にした名前に引っかかった。
「……アーサ姉さん？」
頭の中を様々な記憶がぐるぐると回り始める。何かが、思いつきそうな気がしていた。
「どうした？　ナユタ」
「ナユタ？　アーサさんが、どうしたの？」
不思議そうな顔をする二人。僕は考えをまとめる為に、二人に話した。
「クレハの力で残され島に戻った時に、不思議なことが二つあったんだ。一つは、〝奈落病〟が、全世界的に回復しつつあったこと。原因は分からないのだけど、アーサ姉さんは、それで助かったんだ」
「ホントか!?　良かったじゃねえかおい！　ナユタ！」
シグナが嬉しそうに僕の肩を叩く。クレハは唇が震えて言葉にならず、目尻に浮かんだ

涙を拭っていた。二人とも、姉さんが大好きだから、喜んでくれた。僕は、クレハの手を握って「ありがとう」と言い、続けた。
「二つ目は、ノイが飛んでいたこと。〝星の力〟が足りないと飛べない筈なのに」
「確かに、あれは不思議なの。最初にナユタと会った時は確かに飛べなかったのに……」
ノイも首をひねる。
「僕には、この二つとも、星を救う方法を示唆しているように思えてならないんだ。でも、それがなんだか分からない」
シグナが腕を組んで唸る。
「〝奈落病〟は、恐らく星核から〝星の力〟が失われて、それが人間の生命力を低下させて起きる病気なんだろうな。それが治るってのは、つまり〝星の力〟が復活してるってことなんだろうが……」
クレハも細い指を顎に当てて、考える。
「ノイが飛べるようになったのも、〝星の力〟が強まったからと考えるべきでしょうね。でも、そんなことがありえるのかしら？　星は滅びようとしている筈なのに……」
三人で唸る。もう少しだと思うのに、答えが出ない。
手が、無意識に脇腹をなぞった。〝テラ〟に来て、初めて戦った時に出来た傷がある。
「……あれ？」
脇の下にある筈の、包帯の感触がない。
その時になって思いだす。残され島で目が醒めた時、もう包帯は取れていて、傷も、もう消えていたのだった。だから、今はもう包帯を巻いていない。
そういえば、森で過ごした夜、クレハが「〝テラ〟では、傷が早く治るみたいね」と言っていた。と、同時に、あの時、クレハが僕に教えてくれた話を思いだす。

――それはね、自然治癒力って言うのよ――

その瞬間、頭の中に閃光が走った。
光は必要な全ての事象を繋ぎ合わせ、一つの答えを導き出した。
僕は、叫んだ。
「自然治癒力だよ！」
シグナとノイが、なおも不思議そうな顔をする。クレハだけが、目を見開いていた。
「万物は、自分が壊れた時、どう治せばいいのかを知っているんだ！　そして、自ら治ろうとする力があるんだよ！」
あの日、ゼクストが見せた、痛ましい〝星核〟の姿を思い出す。
「人間が〝星核〟を傷付け、〝大洪水〟が起きてから一五〇〇年が経った。その間、星が、

ただ自らを滅びに任せている訳じゃなかったとしたら？」
シグナが驚いて、僕を見る。
「〝奈落病〟が治ったのも、ノイが飛べるのも、今、あの星の持つ〝星の力〟が強まっているからだとしたら……、それが意味するのは！」
僕は強く頷く。
「そうだよ！　僕たちの星は、今まさに、自ら治ろうとしているんじゃないか⁉」
「ノイ！」
クレハが僕を支えたまま叫ぶ。
「〝アストロラーベ〟で計算してみて！　ナユタの考えは、正しいかもしれない！」
「了解なの！」
たちまちノイの周囲に半透明の文字や図形が浮かびあがり、その上でノイの手が素早く動き回った。
固唾を呑んで見つめていると、やがてノイが「びっくりなの……！」と言って、目を大きくしてこちらを向いた。
「ナユタの言う通りなの！　あの星の〝星核〟は、治りかけているの！　今地上で起きている異常気象は、『再創世』のせいじゃなくて、その自然治癒における、最終工程の副産物なの！」

がばっとシグナが立ち上がり、慌ただしくノイの横に並んだ。ノイと一緒になって文字や図形を睨みながら言う。
「その自然治癒が終わるまで、あとどれくらいかかるんだ？　あんまり長いようだと、異常気象に耐えられなくなって、先に人間がくたばっちまう」
「うーんうーん、恐らくは、あと二〇〇年くらいなの……」
シグナがガクッと肩を落とし、大きなため息をつく。
「無理だ。それじゃあ持たない」
すると、さっきから何やら考え込んでいたクレハが「待って」と、顔を上げた。
「〝星座球〟に残っている〝星の力〟を〝星核〟に注入することで、治癒速度を速められないかしら。〝星核〟を壊すのではなく、救う為に〝星の力〟を使うのよ！」
「計算してみるの！」
再び、ノイの周りで文字や図形がせわしなく浮かび上がる。やがて――
「――いけるの！　そのやり方なら、短期間で〝星核〟を治癒出来るの！」
ノイが笑顔になる。クレハが瞳を潤ませ、両手で口元を押さえる。シグナが「よっしゃあ！」と叫んだ。
ノイはなおも忙しそうに両手を動かしながら、僕たちに言った。
「今すぐ作業にとりかかるべきなの。遠隔操作では限界があるから、〝アストロラーベ〟に

行って、直接操作する必要があるの」
　ノイが手を止めると、周囲に浮かんでいた絵がさっと消えた。そして、空中で体を回転させてシグナとクレハを見る。その表情は、珍しく、真剣だった。
「シグナ様とクレハ様には、〝アストロラーベ〟の操作をお願いしたいの」
　二人は、小さく息を呑んでから、黙って頷いた。ノイは、
「ありがとうなの」
　と言って、僕の方を向いた。
「ナユタは、二人と一緒に〝アストロラーベ〟に行って、作業を手伝って欲しいの」
「え？　ノイはどうするんだい？」
　すると、ノイは微笑んだ。
「私は、ここで最後の調整作業をしていくの。終わったら、すぐに追いつくの」
「よっしゃ。そうと決まったら、さっさと行くか」
　シグナが両の手のひらを合わせて、乾いた音を鳴らした。そして、廊下へと向かい始める。クレハは一瞬立ち止まり、ノイを見つめてから、無言で振り返り、シグナを追った。
　ノイが僕の方を向き、笑顔で言った。
「ナユタも急いでなの」
「分かった。じゃあ、また後でね」

「了解なの！」
　僕は振り返り、クレハたちを追いかけた。

　去りゆくナユタ・ハーシェルの背中を見つめながら、ノイは、小さく呟いた。
「さようなら……、ナユタ」

　上昇を終えた昇降機から降り、走って〝アストロラーベ〟の元に辿りつく。シグナはそのまま操作盤に飛びつき、操作を始めた。
「クレハ、手伝え！」
「分かった！」
　頷いて、クレハも別の操作盤を弄りだした。僕は言った。
「僕は、どうすればいい!?」
　シグナの手の動きが止まる。そして、こちらを見ないで言った。
「お前は、見ていてくれればいい。俺たち二人で操作出来るから」

そしてまた、ツマミや突起を複雑に動かし始める。
僕は、シグナのその言葉に、その言葉に含まれた感情に、何故か、不安を感じた。昇降機の方を見て、またシグナに聞いた。
「あのさ、シグナ。ノイを待たなくていいのかい？」
「いいんだ」
僕の言葉を遮るみたいに、シグナは短く答えた。今度は、手を止めることもなかった。そこに、強い拒絶を感じた。シグナが、何かを隠しているように、僕には思えた。
と、クレハが僕の方を向き、顔を伏せ気味に言う。
「ナユタ、実は――」
「黙っていろ！　クレハ！」
シグナが怒鳴り、クレハの言葉をかき消す。でもそれは、怒りや苛立ちとは、少し違って聞こえた。シグナの声は、何かつらい物を堪えているかのようだった。
「でも、兄さん！　こんなのって！」
そして、そんなシグナに向けられたクレハの瞳は、今にも泣きだしそうに見えた。
二人は深い悲しみを抱えている。でも、僕にはそれがなんなのか分からない。
「二人ともなんの話をしているんだい!?」
『私から説明するの』
どこからか、聞き慣れた声が響いた。
〝アストロラーベ〟の操作盤の上に、ノイの姿が浮かび上がった。後ろが透けて見えて、まるで星片観測機が映し出す絵のようだった。
「ノイ！」
『ナユタ。ごめんねなの』
半透明の絵の口が動くと、それに合わせてノイの声が周囲に響いた。
「なんで、謝るんだ？　ノイ」
『ナユタに隠していたことと、嘘をついてたことが、あるからなの』
そう言って、ノイは小さく微笑んだ。
『ナユタ。私はね、〝楽園〟の管理者なのだけど、同時に、〝アストロラーベ〟の神像でもあるの』
「ノイが、神像……？」
『そうなの。本当の名前は〝楽園の紡ぎ手〟。それでね、〝星の力〟を星核に注入するには、〝アストロラーベ〟を全力で機能させる必要があるのだけど、その為には、私が〝アストロラーベ〟と一体化する必要があるの』
「一体化って、どういうこと？」
『ええと……。ううん、上手く説明出来ないの』

ノイは困った顔をして笑った。
「ナユタが分かる言葉で言うと、私の魂を〝アストロラーベ〟に組み込むって、感じなの。今までナユタが見ていた私の体は失われて、もう戻ることもない。今ナユタが見ているこの躰も、分かりやすいように見せているだけで、もう既に、私は体を持ってないの」
　そして、とても残念そうな顔になる。
「〝星の力〟の注入が終わった後は、私は〝アストロラーベ〟と完全に融合して、私の人格そのものが失われる。だから、私が、私として、ナユタたちとお話が出来るのは、これが最後になるの」
　突然の言葉に、あまりに驚いて、僕は何も言えなくなってしまった。何か言わなくちゃと思うのに、頭がうまく働かなくて、喉からは変な音が漏れるだけだった。
「残念だけど、他に方法がないの。でもね、後悔なんかは全然ないの」
　ノイは、また微笑んだ。
「私も、あの星を救いたい。可能性と希望に満ちた人間という存在を救いたい。残され島で私を助けてくれたライラや、村の人たちを救いたいの。だから、そのお手伝いが出来るのが、とても、とっても、嬉しいの！」
　半透明のノイが、笑顔でくるりと回る。僕は、その無邪気な姿に心を締め付けられる。
　そっと、右肩に手が置かれる。シグナだった。左手がぎゅっと握られる。クレハだった。
二人は僕の側に立ち、ノイを見つめていた。
　僕は、いつの間にか涙を零していた。悲しいからでは、なかった。だってノイはあんなに笑顔でいてくれるじゃないか。だからこれは、悲しいから泣いているんじゃない。
　そう自分に言い聞かせ、僕は、涙を拭って言った。出来るだけ、笑顔になるように、頑張った。
「いつか、また、会えるかな？」
「私はいつでもナユタの側にいるの！　だから笑って！　ナユタ！」
　笑顔で、もう一度くるりと回る。その可愛らしい仕草を見て、僕の目からは、更に涙が零れた。ノイは、「また会える」とは、言ってくれなかった。
　やがて、ノイは、悲しむような瞳を僕に向けた。
「今までありがとう、ナユタ。あなたのこと、忘れないの。あなたに貰った勇気や、沢山の大切な物も、絶対、絶対、忘れないの」
「ノイ……」
　僕は、ノイの決心を受け入れた。嘘だ。本当は嫌だった。ここでノイと別れたくなんかなかった。でも、受け入れなければならないのだと、ノイ自身がそれを望んでいるのだと、その決心を無駄にしてはならないのだと、自分に何度も言い聞かせた。
　だから、次にノイに向けた笑顔は、さっきよりは幾分マシな物になっている筈だった。

「ありがとう。ノイ。僕も君に会えたこと、君から貰った物を、絶対に忘れないよ」
ノイは嬉しそうにまたくるりと回った。そして、笑顔のまま言った。
「さあ、準備はもう全部終わったの。あとはボタンを押すだけ。それで、全部が終わるの」
ノイの絵が少し後ろに下がる。と、操作盤には内側から光る突起が一個あった。
『出来れば、これは、ナユタに押してもらいたいの』
「……分かった」
答えた時、肩に置かれたシグナの手に力が入る。僕は、その上に自分の手を乗せ、温かいシグナの手をぎゅっと握った。
「ナユタ……」
クレハが、僕を見上げる。クレハは泣いていた。白い頬の上を透き通った涙が線を描いていた。僕は小さく「大丈夫だよ」と言って、二人から離れて、操作盤の前に立った。
突起に手をかける。
僕は顔を上げ、ノイに笑いかけた。ノイも、笑みを返す。僕は言った。最後の挨拶を。
「じゃあ、またね。ノイ」
『またね！　ナユタ！』
僕は、光る突起を、強く押し込んだ。
途端に、〝アストロラーベ〟全体が光に包まれた。眩しさに思わず目を閉じる。それでも、まぶたの隙間から、光が流れ込んでくる。
急に、両の足から地面を掴んでいる感触が消えた。海の中に落とされたみたいに体が軽くなり、自分の体がどっちを向いているのかが分からなくなった。確認しようにも、眩しくて目を開けられなかった。
ただ、光の海の中を、僕の体がどんどん上に昇っていくような、そんな感じがした。
流れ込んでくる光に塗りつぶされるみたいに、頭の中が、ゆっくりと白くなっていくのを感じた。何も考えられなくなっていく。でもそれは、とても心地よいものだった。
最後に、ノイの声が聞こえた。
「――きっと、また会えるの。そんな、予感がする――」

終章

那由多の星の物語

NAYUTA NO KISEKI
Chapter 10



――ゆっくりと、目を開ける。青と緑の星が、視界一杯に広がっていた。
大きな、透明な球体の中にいた。小さな光の粒が無数に集まって膜になっている、光の球だ。以前、ゼタストからの攻撃を防いでくれたのと、同じ物だった。
僕の体は球面のどこにも触れておらず、球の中に浮かんでいた。自分の体に重さがないみたいで、不思議な感覚だった。
首を動かして、左右を見渡す。
目の前の星と、大きな月の他は、ただ、星空が、どこまでも続いていた。
球の中には僕しかいないようだった。もちろん、球の外にも。
ぽつりと、呟く。
「……ここは？」
「星に還る船の中、って所かな」
シグナの声が聞こえて、直後に、僕の目の前にシグナとクレハの姿が現れた。と、言っても、それはさっきのノイのように、半透明の絵のような姿だった。
「私たちの姿、見えてる？　これで合ってる筈なんだけど……」
クレハが心配そうに僕を見る。どうしてか、それだけで、少し、安心出来た。
「見えてるよ」
「良かった！　あのね。ナユタが〝テラ〟に戻ってくるのに使った〝転位門〟は、壊れてしまったみたいなの。でも、その船に乗っていれば、星に戻れるわ」
「え？　シグナとクレハは、どこにいるの？」
「ナユタ、ひとまず、星を見てくれ」
シグナに言われて、目の前の、青と緑で塗り分けられた美しい球体を見る。その一部は大きく抉れて、〝星核〟が剥き出しになっていた。けれど――
「――色が、変わってる？」
前に〝ヘリオグラード〟で見た時、〝星核〟は鈍く、毒々しい、赤黒い光を発していた。けれど今、僕が見ている〝星核〟は、透き通った、穏やかな緑色の光を灯していた。そして、〝星核〟から溢れる光が帯を作り、抉れた地表を覆うように美しく広がっていた。その光景は、この距離からでも、満ちあふれる生命力を感じさせた。
「成功したんだね!?」
シグナは力強く頷いた。
「そういうことだ。作戦は大成功。〝星の力〟を注入されて、〝星核〟は急速に再生を始めている。いずれ、星は蘇るだろう。そこに生きる生命を犠牲にすることなく、だ」

「地上での異常気象はもう少し続くけど、こちらの予測では半年くらいで元に戻る筈よ」
二人の言葉を聞きながら、僕は〝星核〟が魅せる神秘的な光景に見入っていた。
「ナユタ」
静かに、シグナが、僕の名を呼ぶ。
「お前の言った通りだ。かつて、人間は確かに過ちを犯した。いや、今だってそれは途上なのかもしれない。けれど、人間にはそれを認め、反省し、やり直す力がある。俺は、〝ミトスの民〟として、そして、残され島で育てられた一人の人間として、人間の持つ可能性と希望を信じる」
クレハが、笑顔で頷いた。
「私も信じてるわ、ナユタ。〝ミトスの民〟として。そして、人間として」
「ありがとう、シグナ、クレハ」
シグナは続けた。
「〝虚無なる星核〟は、そのことを最後まで認めようとしなかった。ナユタ、お前は勝ったんだよ」
「勝ったとか、負けたとかじゃないよ。そんなことは重要じゃない」
その言葉に、シグナはおや、という顔をした。
「僕たちが生きるこの星、この世界を守ることが出来た。それが一番大切なことで、僕の勝ち負けなんか、どうでもいいのさ。僕は学者で、剣士じゃないからね」
シグナは少しの間呆けたように僕を見つめ、そして、にやりと笑った。
「いやまったく、お前らしいよ。ナユタ・ハーシェル」
僕も笑った。クレハも一緒に笑った。
優しく輝く〝星核〟の光を浴びながら、僕たちは笑い続けた。
と、急に耳障りな雑音が響いて、シグナとクレハの姿が一瞬歪み、また元に戻った。
「何、どうしたの？」
「そろそろ、距離が限界みたい……」
クレハの言葉に、雑音が少し混じっていた。
「ナユタ、後ろを見てくれ。小さな青い点が分かるか」
振り向くと、確かに一つだけ大きな丸が見えた。シグナが言う。
「あれが、〝テラ〟だ」
「あの小さいのが？」
「ああ。ため込んでいた〝星の力〟の大部分を放出した結果、軌道制御が不完全になってな。一時的に、星から離れるしかないんだ。もう、随分遠ざかっている」
クレハが申し訳なさそうに「それでね」と言った。
「それでね、ナユタには星に帰ってもらって、私たちは、〝テラ〟に残ることにしたの」

僕は驚いた。
「どうして⁉　みんなで帰ろうよ！」
するとクレハは慌てて手を振った。また二人の姿が一瞬歪んだ。
「あのね！　私たち、ノイを探そうと思っているの！」
「ノイを……？」
「ええ。星から離れて行く〝テラ〟に、ノイを一人残すのは可哀想だと思うの。〝アストロラーベ〟の中からノイの魂を探し出して、元の体に戻してあげれば、ノイにまた会えると思うのよ」
「星を救った立て役者の一人だからな。せめてそれくらいはしてやらないとな」
「もう兄さんったら！　それだけじゃないわ！　ノイは、私やナユタの、大切な友達なんだから！　友達にまた会いたいのは、当たり前じゃない！」
「そんなもんかあ？」
二人の兄妹喧嘩みたいなやりとりは、少し前なら見慣れた物だった。そのせいか、それをまた見られたことが堪らなく嬉しくなって、僕は胸が熱くなっていくのを感じた。
「どうしたナユタ。泣いてるのか？」
「……いや、そんなことないよ」
目元を拭きながら答える。と、強い雑音が球体の中に響いて、二人の姿が更に歪んだ。
「今度こそ限界だな。映像と音声を飛ばす距離に制限があるんだ」
シグナの声は上から雑音が被さっていて、かなり聞き取りづらくなっていた。
「これ以上〝テラ〟が星から遠ざかると、もうこうやって話すことも出来なくなる」
二人の姿も、砂嵐が吹いてるみたいに乱れて、そして、薄くなっている。
「シグナ！　クレハ！」
僕が叫ぶと、クレハは一瞬泣きそうな顔をした後、それでも、笑顔で言った。
「ノイを見つけたら、必ずまた残され島に帰るから！　それまで待っててね！」
「アーサや、クソオヤジによろしく伝えておいてくれ。それと――」
シグナは頬をかいて、そっぽを向いて言った。
「――ライラにも、な」
僕はなんだか可笑しくなって、目の端に浮かんだ涙を拭いた。
「分かった。伝えておくよ。相棒」
僕がそう言うと、シグナは片肩を上げてにやりとした。
「おう、頼んだぜ、相棒。じゃあ、一時のお別れだ。またな。ナユタ」
「ああ。またね、シグナ」
シグナの姿が薄くなり、そして消えた。クレハの姿もだんだん消えていく。
「またね、クレハ」

僕が言うと、クレハの瞳が潤むのが見えた。砂嵐がひどいけど、僕にはそれが見えた。
『ナユタ、聞いて』
声に混ざる雑音が、だんだん大きくなってきていた。僕は答える。
「なんだい？」
クレハは一瞬目を閉じ、そして一言ずつ、言葉を紡いだ。
『私ね――』
クレハが何を言おうとしているのか、僕には分かっているつもりだった。
『ずっと――』
でも、聞きたかった。最後まで、クレハの声を、聞きたかった。
『あなたの――』
雑音は、もうクレハの言葉をかき消しつつあった。それでも、僕は耳を澄ませた。
『ことが――』

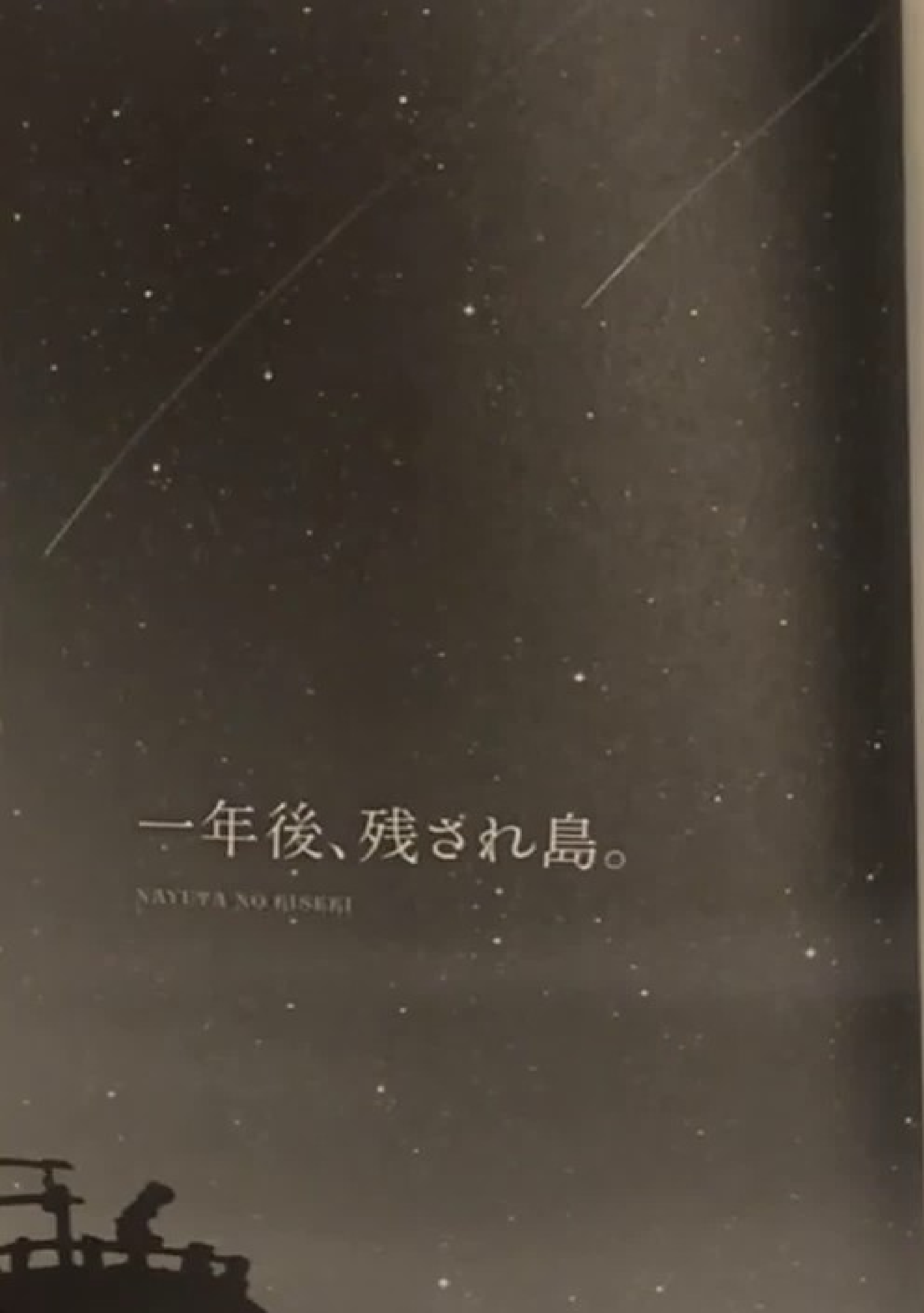
無音。

クレハが言い終えるより早く、音が途切れ、クレハの姿も消えた。
球体の中は、また僕一人だけになった。静寂が、耳に痛い程だった。

僕は、目を閉じる。
そして、小さく、呟いた。遥か遠くの、〝テラ〟に届くように。
「僕もだよ、クレハ」
そして、ゆっくりと目を開き、眼下に広がる僕たちの星を見た。
振り返り、もう見えなくなりつつある〝テラ〟の姿を見た。
そして、上を見上げた。
無数の星々が、黒い世界の中に眩しく浮かんでいた。
その星々の連なりを見て、ああ、僕たちと一緒だと思った。
僕、シグナ、クレハ。それにアーサ姉さんやライラ、残され島の村人たち。そして、あの星に住むすべての人たち。
その人たち一人一人の前に、無限の可能性が広がっている。
まるで、この那由多程もある星々と同じように。
〝ミトスの民〟は、人間の持つ可能性と希望を信じた。僕も、それを信じている。
「また会おうね、シグナ、クレハ。そして、ノイ」
もう見えない〝テラ〟に向けて呟いた後、改めて、青と緑の星を見下ろした。
ああ、ようやく帰るんだ。そう思った。
「ただいま。みんな」

僕はゆっくりと目を閉じる。
星々の温かな光が、僕を包み込んだ。

〈那由多の軌跡　完〉



ふと、誰かの声が聞こえた気がして、僕は顔を上げた。
青空に、綺麗な月が、一つ、浮かんでいる。
「気のせいかな？」
村へと続く坂道を見下ろしても、人の気配はなかった。僕は小さく息を吐き、天体望遠鏡の整備を再開した。
ハーシェル家の屋上に設置されている天体望遠鏡は、天文学者だった僕の父さんが作った物だ。それなりに性能が高く、整備を欠かさなければ立派に使える。まあ、今となっては僕が残され島に帰ってきた時にしか使われないし、整備もその時にしかやってないのだけれど。
「今日は雲もないし、夜は綺麗な星空が見えるだろうな……」
呟きながら、遠くを見る。
青い空。白く浮かぶ一つの月。その下に広がる空よりも青い海。緑に囲まれた残され島。時折、小鳥の鳴き声がここまで届く。潮風と森の匂いが混ざって、鼻をくすぐる。
「綺麗だ……」

思わず声が漏れる。それは、あまりに綺麗な、世界の姿だった。
少し強い風が吹き、耳から垂らした木彫り細工を揺らした。結局、〝テラ〟から持ち帰れたのは、このシグナの耳飾りと、いつも持ち歩いていた〝星の欠片〟だけだった。

〝テラ〟から帰ってきて、一年が過ぎた。
クレハの言っていた通り、異常気象は半年ほどで収まり、空も海も、徐々に元の色に戻っていった。
それどころか、復活した〝星核〟によるものか、世界は以前よりも輝きを増しているようにさえ見えた。作物の生育が良くなったり、魚が捕れる量が増えたりした。異常気象が起きる前よりも豊かになった気がすると、村の人たちが喜んでいた。
〝奈落病〟に関する学院の発表も、人々を驚かせた。異常気象が起きる前と比較して、〝奈落病〟が自然治癒していく患者の割合が増加傾向にあると、確認されたのだ。
この勢いであれば、数年内に、この星から〝奈落病〟は根絶されるのではとすら言われている。「人間はなんらかの意志によって救われたのかもしれない。治療法を発見出来なかったのは我々の学問の敗北ではあるが、今はただ喜びたい」という、学院による異例の声明もあったくらいだ。
本当は、救われたのは人間だけじゃない。この星に住むあらゆる生命、そして星自身も

救われたんだ。でも、それを知っている人はほとんどいない。〝テラ〟から戻って来た後、僕は、色々考えた上で、自分が体験した冒険を、口外しないと決めたんだ。

ただ、シグナとクレハが暫く帰って来ない理由を説明しなければならないから、村の何人かには本当のことを話した。

オルバス師匠は、僕の肩に手を置いて「ありがとう」と言ってくれた。ライラはいつまでも泣き続け、アーサ姉さんは黙って僕を抱きしめてくれた。クレハが勤めていた博物館の館長、ヴォランス博士は「優秀な助手が一刻でも早く帰ってくるよう祈っているよ」と言って、笑った。

休暇の期間が終わって僕は大陸に戻り、学院の生徒としての生活を再開した。学業に追われる日々で、あの冒険の日々が、まるで夢の中の出来事だったように思える時もあった。そうしている内に、いつの間にか一年が経った。そして、学院の休暇に合わせて、僕は定期船に乗り、残され島に帰ってきた。今度は、一人で。

また、誰かに呼ばれた気がした。

「ナユタ！」

下を見ると、ライラが手を振りながら坂道を上ってくる所だった。手に大きな包みを持っている。きっとお弁当を作ってきてくれたんだろう。

ライラは変わらず、家業の宿屋を継ぐべく料理の勉強を続けている。去年はアーサ姉さんに教わっていたみたいだけど、どうやら腕を上げたようで、僕が島に戻ってからは毎日昼食を持ってきて味の感想を要求してきた。そして実際、ライラの料理はとても美味しかった。

僕は手を振り返し、身振りで屋上に上がってくるよう示した。

整備を一休みして立ち上がる。体を空に向けて大きく伸ばし、また景色を見渡す。

綺麗な世界。

けれど、そこに住む人間までが綺麗かというと、それはちょっと微妙だった。

地上には、未だに争いの火種が尽きない。食料と〝奈落病〟の問題が解決しそうだというのに、帝国は未だに隣国に戦争を仕掛ける機会を狙っているようだ。大陸中の国家を併合してしまおうという腹づもりのようだけど、何故今それをする必要があるのか、僕にはさっぱり分からない。

僕が通う学院でも、学問の探究とは無関係な派閥争いが水面下で進んでいたりする。なぜそんな無駄なことに労力を使うのか不思議でならない。大陸の各地には、まだ僕らの学問が及ばない所があり、死ななくていい筈の多数の命が飢餓や病気によって失われている。学者同士で対立している余裕がどこにあるというのだろうか。

僕の疑問に対し、博物館の館長ヴォランス博士はこう答えた。

「それはね、ナユタ君。人間というのが、本質的に寂しがり屋で、孤独でいることに耐えられない生物だからさ」

何故人は争いをやめないのかという僕の質問には答えていないように思えたけど、なぜだかその言葉は、僕の心にすとんと収まった。そうか、人間は寂しいのか。

「ナユタ」

天窓に手をかけて、ライラが屋上に顔を出す。僕は手を貸して彼女を引っ張り上げた。

「へえ、ここって、風が吹いて気持ちいいのね」

ライラは髪を押さえながら外を眺める。一年ぶりに会ったライラは、髪が伸びたせいもあってか、少し大人びて見えた。望遠鏡を覗き込む瞳も、一年前より綺麗に見えた。

「ね。何か見えるの？」

「昼間はあんまり。夜にまた来たら、色々見せてあげられるよ」

「〝テラ〟も見える？」

「ああ、多分」

僕は答える。これだけ空気が澄んでいれば、今夜は、肉眼でも見えるかもしれない。

〝テラ〟が、近づきつつあった。

軌道を大きく外れ、この星から遠ざかっていた〝テラ〟を、僕はこの一年観測し続けていた。〝テラ〟は大きな楕円を描きながら、この星に還ろうとしているように、僕には見えた。とはいえ、以前のような距離までやって来るのは、まだまだ先だ。

空の一角を見上げる。夜にはそこに青い点、〝テラ〟の光が見えるだろう。僕がじっと青空を見ていると、ライラがポツリと呟いた。

「ナユタは、〝テラ〟に行きたいの？　シグナとクレハを、探しに行きたいの？」

「……いいや」

僕の返事は、ライラには意外だったらしい。少し驚いた顔をするライラに笑いかける。

「約束したんだ。必ず残され島に帰ってくるって。だからそれを信じてる」

もう一度、雲一つない空を見上げる。

「信じるということが、何よりも大事なんだよ」

そう。僕は信じている。人間が持つ可能性と希望を。

この先、何が起きるのかは分からない。帝国は戦端を開くのかもしれない。それよりもっと愚かな事を、人間はするかもしれない。それは誰にも分からない。

けれど、人間はその度に反省し、同じ過ちを繰り返さないようにして、前に進むだろう。寂しがり屋の僕たちは、そうやって一歩ずつ、未来を作り出していくんだ。

「……やっぱり、ナユタってかっこいいな」

「ん？　何か言ったかい？」

僕が振り返ると、ライラは慌てて両手を振った。
「うっ、ううん、なんでもないのっ！　そ、それよりね！」
ライラは顔を真っ赤にして立ち上がる。
「私ね！　ナユタに伝えたいことがあるの！　去年言えなかったこと！　クレハがまだ帰ってきていないのに、私がこういうことしちゃうのは少しずるい気もするんだけど！　だけど今しかないと思うのよ！」
興奮気味にまくし立てるライラ。けれど、何が言いたいのかよく分からない。
「伝えたいこと？　なんだい？　ライラ」
「あのねっ！　私！　ずっとずっと前から！　ナユタのことが――」
「きゃああっ！」
ライラの言葉が、女の子の悲鳴によってかき消される。
「なんだ!?」
その声は空高くから聞こえたように思えた。僕が見上げようとした瞬間、頭の上に何かが落ちてきた。
どちん。
強い衝撃が頭蓋骨に伝わる。かなり痛い。
「痛っ！　え、何!?」

僕が混乱していると、頭の上に覆い被さったそれが喋った。
「ううん、どうやら座標指定にミスがあったようです……」
それは、僕の頭の上からひょいと浮かび上がり、空中で制止し、その場で、その妖精のような姿をこちらに向けた。くるりと回った拍子に、頭の上に結んで垂らした、ふた房の長い桃色の髪がふわりと広がる。僕は叫んだ。
「ノイッ!?」
続けてライラが叫んだ。
「もう、どうしてあんたはいつも私の告白を邪魔する訳!?」
ノイは、少しの間何も言わず、そして、口を開いた。
「一つ目の質問についての回答は、はい。私の名前はノイです。二つ目の質問については、情報が不足している為、回答しかねます。申し訳ありません」
その声の響きは確かに僕の知っているノイだった。けれど、その少し硬めの口調は、僕の知っているノイとは違っていた。
小さな二つの瞳が、僕に向けられる。
「あなたが、ナユタ・ハーシェルですか？」
「そうだけど、君は、ノイ……じゃ、ないの？」
「その質問についての回答は、はい、かつ、いいえ。私の名前はノイです。ですが、あな

たが図面を持っているノイではありません」
「えっと、どういうこと？」
「その質問についての回答は――」
ノイは言いかけて、首を振り、また僕を見た。
「申し訳ありませんが、詳細な説明を行う時間的余裕がありません。ナユタ・ハーシェル。私と一緒に来て下さい」
「えっと、どこへ？」
「もちろん、『テラ』です」
「えっ!?」
ノイが僕の目の前に近づく。
「『テラ』が現在、大変な事態に陥っています。あなたの力が必要です。だから来て下さい」
「そんなこと言われても……。『転位門』はもう、全部壊れちゃったんでしょ？」
「いいえ、もう一個あるのです」
「そうなのっ!?」
「案内します。今すぐ装備を整えてきて下さい。時間がないのです！」
僕は弾かれるように天窓を開けて、飛び下りた。頭上からライラが怒ったように僕の名前を呼ぶ声が聞こえたけど、心の中で謝りながら、自分の部屋に向かった。
一年前に命を託した胴当ても剣も、綺麗に磨かれて、棚に並べられていた。

村へと続く坂道を、装備を身につけたナユタが駆け下りていくのが見える。屋上に取り残されたライラは、ふてくされたようにそれを見つめ、そして、ふうとため息をつき、その表情を笑顔に変えた。
大好きな男の子の、この一年でより大きくなったように見える背中に向かって呟く。
「ようやく、いつものあんたに戻ったみたいね。ナユタ」

前を飛んでいくノイを追いかけながら、僕は聞いた。
「それで、今度は何が起きたんだい？」
速度を維持したまま、ノイはこちらを向いた。
「シグナ・アルハゼンと、クレハ・アルハゼンについてはご存じですね？」
「もちろん！」
「二人は私のオリジナルにあたる、『楽園の紡ぎ手』の救出作業を行っている最中、ある問

題に直面し――」
ノイの言葉を聞きながら、僕の体の中が興奮に満ちていくのを感じていた。
また、〝テラ〟に行ける。あの不思議な世界で、冒険が出来るんだ。
帰ってくるのを信じているのは嘘じゃない。でも、その過程を僕が手伝って、二人の帰還をちょっとばかり早めてあげたって、構いはしないだろう？
そして、クレハ。
君に早く、また、会いたい。
会って、話がしたいんだ。
「――ということです。ナユタ、聞いてますか？」
「ああ、大丈夫！　なんだって、やってやるさ！」
「事前情報では、ナユタ・ハーシェルは、もう少し慎重な人物とあったのですが……」
心配そうな顔をするノイに、僕はとびきりの笑顔で応えてあげた。
白い月が一つ浮かぶ空の下を、ノイと僕は駆け抜けていく。
物語は、まだ、終わらない。

☆
星海社
FICTIONS
ツ2-01

那由多（なゆた）の軌跡（きせき）

2013年 8 月19日　第 1 刷発行　　定価はカバーに表示してあります

原　案 ――― 日本ファルコム
著　者 ――― 土屋つかさ

発行者 ――― 杉原幹之助・太田克史
編集担当 ――― 平林緑萌

発行所 ――― 株式会社星海社
〒112-0013 [illegible]
TEL [illegible]　FAX [illegible]
http://www.seikaisha.co.jp/

発売元 ――― 株式会社講談社
〒112-8001 [illegible]
[illegible]

印刷所 ――― 凸版印刷株式会社
製本所 ――― 加藤製本株式会社

ISBN978-4-06-138864-2　　N.D.C913 330P　19cm　Printed in Japan

本書は書き下ろし作品です。

Falcom
日本ファルコム(株)のライセンス許諾商品です。

Illustration　尾谷おさむ
Book Design　[illegible]
Font Direction　[illegible]

[illegible]



SEIKAISHA

星々の輝きのように、才能の輝きは人の心を明るく満たす。

その才能の輝きを、より鮮烈にあなたに届けていくために全力を尽くすことをお互いに誓い合い、杉原幹之助、太田克史の両名は今ここに星海社を設立します。

出版業の原点である営業一人、編集一人のタッグからスタートする僕たちの出版人としてのDNAの源流は、星海社の母体であり、創業百一年目を迎える日本最大の出版社、講談社にあります。僕たちはその講談社百一年の歴史を受け継ぎつつ、しかし全くの真っさらな第一歩から、まだ誰も見たことのない景色を見るために走り始めたいと思います。講談社の社是である「おもしろくて、ためになる」出版を踏まえた上で、「人生のカーブを切らせる」出版。それが僕たち星海社の理想とする出版です。

二十一世紀を迎えて十年が経過した今もなお、講談社の中興の祖・野間省一がかつて「二十一世紀の到来を目睫に望みながら」指摘した「人類史上かつて例を見ない巨大な転換期」は、さらに激しさを増しつつあります。

僕たちは、だからこそ、その「人類史上かつて例を見ない巨大な転換期」を恐れるだけではなく、楽しんでいきたいと願っています。未来の明るさを信じる側の人間にとって、「巨大な転換期」でない時代の存在などありえません。新しいテクノロジーの到来がもたらす時代の変革は、結果的には、僕たちに常に新しい文化を与え続けてきたことを、僕たちは決して忘れてはいけない。星海社から放たれる才能は、紙のみならず、それら新しいテクノロジーの力を得ることによって、かつてあった古い「出版」の垣根を越えて、あなたの「人生のカーブを切らせる」ために新しく飛翔する。僕たちは古い文化の重力と闘い、新しい星とともに未来の文化を立ち上げ続ける。僕たちは新しい才能が放つ新しい輝きを信じ、それら才能という名の星々が無限に広がり輝く星の海で遊び、楽しみ、闘う最前線に、あなたとともに立ち続けたい。

星海社が星の海に掲げる旗を、力の限りあなたとともに振る未来を心から願い、僕たちはたった今、「第一歩」を踏み出します。

二〇一〇年七月七日

星海社　代表取締役社長　杉原幹之助
代表取締役副社長　太田克史


Falcom
冒険は、もうはじまっている!
那由多の軌跡
ナユタノキセキ
軌跡シリーズ初の
ストーリーARPG
『那由多の軌跡』、
大ヒット発売中!
ジャンル ストーリーARPG
プレイ人数 1人
CERO レーティング B
公式サイトはこちら!
http://www.falcom.co.jp/nayuta_psp/index.html


4Gamer.net
日本最大級の総合ゲーム情報サイト
最新ゲームのニュース、レビューはここで!
http://www.4gamer.net/
Falcom × 星海社 × 4Gamer.net 共同企画
ノベライズの"新地平"特設サイト
http://www.4gamer.net/games/140/G014055/FC20120913001/
ここでしか
読めない
コンテンツも
多数掲載中!


―零から閃へ―
軌跡シリーズ最新作、2013年遂に始動！
閃の軌跡
センノキセキ
2013年9月26日(木)発売予定
ジャンル ストーリーRPG 対応機種 PlayStation® 3、
PlayStation®Vita プレイ人数 1人 CEROレーティング B
最新情報を、公式サイトでチェック！
http://www.falcom.co.jp/sen/index.html